法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

文政三年のオランダ芝居 ： 川原慶賀筆「阿蘭陀芝居巻」について

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
52
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
101
(発行年 / Year)
2005-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021022

文政三年のオランダ芝居

——川原慶賀筆「阿蘭陀芝居巻」について

宮永孝

はじめに
一　さまよえる「阿蘭芝居巻」（川原慶賀筆）
二　オランダ芝居の上演
三　オランダ芝居の素材
四　「阿蘭芝居巻」の中味について
五　登場人物たちの衣装
六　オランダ芝居が上演された場所
七　舞台の構造について
八　オランダ芝居の筋書に関する日本側文献
九　オランダ芝居に関係ある蘭人の名刺
あとがき
［資料　一］川原慶賀筆「阿蘭芝居巻」の詞書
［資料　二］「和蘭戯芸　二人猟師湧壺娘」の原本のひとつ
——Louis Anseaume 作 *"Les deux Chasseurs et la laitière."* の原文の一部と宇田川榕庵が謄写したオランダ語訳
［資料　三］Louis Anseaume 作 *"Le deux Chasseurs et la Laitière"*（「二人の猟師とミルク売りの娘」）の全訳（大意）

はじめに

西周の研究家であった麻生義輝[1]の遺稿『近世日本哲学史』（近藤書店、昭和17・7）を繙読していたとき、その中にオランダ人が出島において演じた素人芝居にふれた箇所があり、わたしはその記事にひじょうに興味を覚えた。長崎奉行・筒井和泉守政憲（一七七八～一八五九、のち江戸南町奉行、大目附）が文政三年（一八二〇）十月、任期をおえ江戸へ帰る際に、オランダ側が歓送の意味をもって上演したものらしい。

麻生は「然(しか)してこれが上演せられた時、舞台の正面にヒポクラテスの言葉『芸は長く、命は短し』(De Kunst is lang, het Leven kort.) と書かれていたということである」(二〇頁) と記している。麻生がこの一文を書くときに、よりどころとしたのは太田南畝(なんぽ)(一七四九～一八二三、江戸後期の文人) の「一話一言」第四十三巻 (『新百家説林 獨山人全集 巻五』所収、吉川弘文館、明治41・8) に見られる「二人猟師渾売(ちちうり)娘」と「オンヘデュルディヒ (性急者)」の二つの芝居の筋書や、『海表叢書 巻二』(更生閣書店、昭和3・1) に収録されている「喝蘭(おらんだ)演戯記」(先に述べた二つの芝居の筋書) であったと思われる。

この二つの芝居は、文政三年八月から九月にかけて、出島の植物園の中にあった商館長および館員のための安息所 (オランダ語では speelhuis(スペールハイス) [賭博場の意] という。出島内の南東に位置する、細長い二階屋。本稿では日本人が描いた出島図にみられる文字「花畑亭」を用いた) において四度上演されたものである。このとき舞台の正面の幕にみられた文字は、「芸は長く、命は短し」といった意のラテン語 Ars longa vita brevis であったが、麻生がいうようにオランダ語で書かれていたわけではない。

文政年間に出島において演じられたオランダ芝居は、おそらく本邦初の西洋芝居の上演[2]であったと思われるが、そのときの模様を出島出入りの絵師・川原慶賀 (一七八六～没年不詳)[3] が描いた絵巻物が、現在財団法人「黒船館」(新潟県柏崎市大字青海川(おうみがわ)一八一番地) に収蔵されている。

「黒船館」は、柏崎から直江津にむかって二つ目の駅「青海川」で下車して、十五分ばかり坂道を昇った、眼下に日本海をのぞむ丘陵の上にある。建物は「柏崎コレクションビレッジ」の中にある。「黒船館」は、柏崎市内にある呉服店「花田屋」の三代目当主吉田正太郎とその実弟吉田小五郎 (元慶応義塾幼稚舎舎長、キリシタン史家) の収蔵品をもとに、平成七年 (一九九五) に開館した。

この絵巻物は、どのような径路をへて「黒船館」にたどり着いたのであろうか。本稿は、謎の絵師川原慶賀が描いたオランダ芝居絵巻の構図・図柄・色あい・役者の姿やかたち、芝居の内容等を分析、講究したものである。

*

一　さまよえる「阿蘭芝居巻」(川原慶賀筆)

わたしは先頃、青海川を訪れ、館長大竹信雄氏の格別な計らいで慶賀の絵巻物をみることができた。この絵巻は木の箱 (9.3 cm×31.5 cm、厚さ7 cm) に入っており、箱書には、

「川原慶賀筆阿蘭陀芝居図巻」

とある。題簽には「川原慶賀筆阿蘭陀芝居巻」（墨筆）とある。それを書いたのは、池長孟（一八九一～一九五五、大正から昭和期にかけての美術品収集家）である。巻緒をほどいて広げると、本紙に泥絵の具[4]（安価な絵の具）を用いて細密に描いたみごとな泥絵が七枚貼りまぜてあり、そのあとに続くのは墨書の詞書（長さ約6m24cm）である。

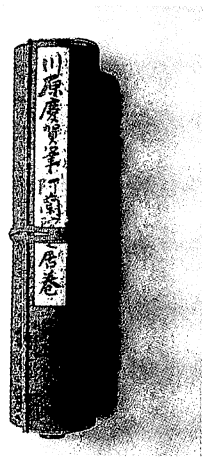
詞書は、本来、画中の内容を説明する文章の意である。が、本稿では単に文章の意として用いた。泥絵のあとに、「性急者」と「弐人猟師乳汁売娘」の二つの芝居の筋書が長々と書いてある。

「阿蘭陀芝居巻」には、巻子（巻き軸で巻いたもの）仕立ての絵（27.5cm×36.3cm）が七枚描れている。おそらく芝居を見ながら淡墨で下書きを何枚も作ったのち、本紙（厚美濃）のうえに浄写し、さらに刷毛・彩色筆・面相筆（極細の筆）を用いて彩色したものであろう。いずれもオランダ芝居の代表的な場面を細密描写したものであり、各図の下に慶賀はオランダ語で、Getekent door Tojoskij te Nagasaki（〝長崎において登與助［慶賀の通称］が描いたもの〟の意）と記している。

巻末に「此段のあとにて此夫婦のもの立出てしばらくかの国の躍（おどり――引用者）をなせり」と記し、「源賢綱写之」とあって、朱印が二つ押されている。上の印文は「賢綱」と読めるが、その下の印はよめない。源賢綱とはいかなる人物かも不明である。長崎の著名な郷土史家・古賀十二郎は、七枚の絵について「いずれも、なか〳〵見事な作で、覗眼鏡式のものらしい。この巻物の絵を見ると、あたかも百二十年以前の昔に還り、蘭館に入りて、親しく紅毛演戯をみるやうな感がある[5]」とその印象を記している。

慶賀がこの絵巻をつくった年代は定かでないが、おそらく江戸後期―芝居が上演された文政三年庚辰年（一八二〇年）のことであろう。時に慶賀は三十五歳であった。その三年後の文政六年（一八二三年）にシーボルトが来日し、かれはそのお抱え絵師となるのである。

オランダ芝居を描いたこの絵巻は、アムステルダムの公文書館やネーデルラント演劇研究所にもあることから考えて[6]、複数模写されたものであろう。慶賀の手を離れたのち、すぐそれが誰の手に渡ったものか明らかでない。いつ頃のことか分らないが、道具屋（書画骨董商）の手に帰し、それを長い間持ちまわっていたらしい[7]。それがいつしか浮世絵研究



川原慶賀筆「阿蘭陀芝居巻」（黒船館蔵）
［筆者撮影］

（第１図）にみられる、川原慶賀の蘭文による署名。

家の落合直成が入手し愛蔵していた。それを人から伝え聞いた永見徳太郎（一八九〇～一九五〇、長崎生まれの紅毛美術研究家、収集家）は、落合から絵巻をゆずってもらった。[8] 永見は昭和八年（一九三三）の一月から三月にかけて、雑誌『人情地理』に「阿蘭陀と長崎女の恋慕録」（一月号）と「長崎秘実　阿蘭陀芝居」（三月号）を投稿した。かれは後者において、芝居の舞台幕の図を一枚、二人猟師乳汁売娘の舞台スケッチから一枚、記事に計二枚の絵を挿絵として添えている。これは紙面に、オランダ芝居の絵が紹介された最初であろう。

その後、絵巻は永見のもとから高見沢某の手に渡り、さらにそれを昭和八年（一九三三）六月、八三〇円[9]もの大金を出して同人から入手したのが神戸の池長孟であった。戦前までこの絵巻は、池長コレクションの中に入っていたが、戦後キリシタン研究家の吉田小五郎（一九〇二～八三）が手に入れ、同人の死後、甥の吉田直太が受けつぎ現在に至っている。

このように慶賀のオランダ芝居絵巻の一巻は、何人もの手を経て黒船館に収まったわけである。ともあれこの絵巻は、慶賀の青年期の代表作であり、「忠実な写生でヤマ[10]」がないばかりか、「甲比丹の別墅に於て演ずる所の紅毛芝居を画いた者で、珍中の珍[11]」といえるものであった。

二　オランダ芝居の上演

出島の館員らによるしろうと芝居は、

一八二〇年九月一七日（文政三年閏庚辰八月十一日）
一八二〇年一〇月一三日（〃　九月七日）
一八二〇年一〇月二〇日（〃　九月十四日）
一八二〇年一〇月二二日（〃　九月十六日）

の四度（陽暦の日曜日に二回と金曜日に二回）演じられた。当時、出島の商館長であったヤン・コック・ブロンホフの日記によると、第二回目の上演のとき、長崎奉行・筒井和泉守政憲は、「一人の画家を（今日の一行に）同行させてあったが、その画家は、将軍に送るために、俳優たち、舞台、ならびに様々な動作のすべてをスケッチした[12]」という。「一人の画家」（een schilder）とは、川原慶賀であったことは間違いないようだ。

この記述通りであるとすると、長崎奉行は慶賀に芝居の様子をスケッチさせ、それをあとで将軍家への献上品とするつもりであった。絵師は役者の動きをその場で精密に描き、すぐ着色することは不可能であろうから、おそらく慶賀は芝居を見ながら、すばやく筆で下絵の素描画をたくさん描き、あとでそれを紙面に細密に写しとり、彩色を施したものと考えられる。

何部つくったものか明らかでないが、献上用に一部、私物用に一部、さらにオランダ人用に川原工房の絵師らに何部か模写させたものか。のちに世間に姿をみせ、道具屋の手に渡った作品は、幕府への献上品ではなく、慶賀が個人用にもっていた作品であったものか。

長崎奉行・筒井和泉守政憲（文化十四年七月～文政四年一月在任）[13]は同役の間宮築前守信興（文政元年四月～同五年六月在任）といっしょに芝居を見たのであるが、かれらにおおよその筋書は見当がついても、役者のせりふまで理解できなかったという。そのため筒井は芝居の筋をオランダ語の通詞にあらかじめ訳させ、その訳文を読んではじめて芝居の中味がわかった、と述べている。

《然為其戯也、其態可察、而若其事與詞、不可得而知、於是令譯司、譯以和語、而作此記、而後其事始了々、》[14]

太田南畝の「増訂一話一言」（蜀山人全集　巻五）に、「阿蘭陀俄狂言」の筋書が二つ掲載されているが、「性急者」の筋の最後に「文政四年正月廿七日写　觸山」とあるから、おそらく出島で芝居が上演されてほどなく翻訳が完成すると、長崎奉行はそれを早速読んだものと考えられる。そしておそくとも翌年の春には、早くも訳文の写本が江戸にたどり着き巷間に流布するようになったのであろう。

オランダ芝居を上演した経緯、場所、観客、配役などについては、ヤン・コック・ブロムホフの日記（日蘭学会編『長崎オランダ商館日記　八（自一八一九年度至一八二〇年度）』雄松堂書店、平成9・3）にくわしい。第一回目の上演は、一八二〇年九月十七日（文政三年閏庚辰八月十一日）のことであった。

（一八二〇年九月）十七日　日曜日

変り易い天気、北東の風、曇天。

（中略）

しばらく以前から、職員（商館員――引用者）たちとフォルティテュード号の積荷方ステーツから「アルス・ロンガ・ヴィタ・ブレヴィス」[2]（芸術は長く、人生は短い）という標語のもとに素人芝居（原語は een liefhebberij tooneel という。[15]直訳すると〝趣味の芝居〟の意）を上演したいと求められており、それに対して私は許可を訴え、私の庭園の家（「花畑亭」――玉つきなどができる――引用者）を貸すことにしたので、彼らによって上述の住居

の広間が、それに向けて雰囲気充分に飾り立てられ、本日、積荷方ステーツ、J・F・フィッセル（筆者頭）、H・スミット（書記）、さらにL・E・フィッセル（二等書記）やバウエル（書記）などによって喜劇「結婚の策略」またの名「二人の兵士」の幕が開けられ、それは彼らによってたいへん上手に上演された。

場所は狭かったけれども、飾り付けも芝居そのものと同じほど良好で、期待にかなり応えた。乙名（おとな）（長崎の町役人、町内のことをつかさどった――引用者）たち、通詞たち、およびその他の様々の日本人たちが、そのために奉行の許可を得てその場にいたが、このようなことは当地では前代未聞のことだったので、彼らもこれに大変堪能して、驚き、満ち足りた気持ちになった。

最後に、その場にぴったりの歌曲が、この素人劇団の人々により合唱され、書記（J・ファン）オーフルメール・フィッセルが、自分の詩を朗読して、舞台は閉じられた。そのあとで私は全員をもてなし、この日は歌と踊りで終った。(16)

同年一〇月一三日（文政三年閏庚辰九月七日）――この日は陽暦の金曜日にあたる。午前中、両奉行は番所、砲台などを訪れ、午後は停泊中のフォーティテュード号、ついでニューウェ・ゼーリュスト号などを訪問したのち町に帰った。

同日の夕刻、両奉行の出席のもとに、再び芝居が上演された。ヤン・コック・ブロムホフの日記はいう。

十三日　金曜日

晴天、強い北風。（中略）

本日の夕方、再び（許可を得て）芝居愛好者、オーフルメール・フィッセル（一等書記――引用者）、H・スミット、バウエル、L・E・フィッセル、およびP・ディック（勝手方）によって、二度目の素人芝居が「気短な人」という喜劇で始まり、「二人の猟師とミルク売り娘」という作品で幕を閉じた。本日、出島で当番であった現役の検使と、ほとんどすべての通詞たち等々が同席した。芝居は、総じて、とりわけ日本人には、見事に満足をあたえ、道具や衣装は適切でしかも趣味の良いものであった。例の検使はこれにたいそうご満悦であり、このことを奉行に話すつもりだ、と言った。(17)

ついで七日目の一〇月二〇日（文政三年閏庚辰九月十四日）、三たび芝居が上演された。ヤン・コック・ブロムホフの日記はいう。

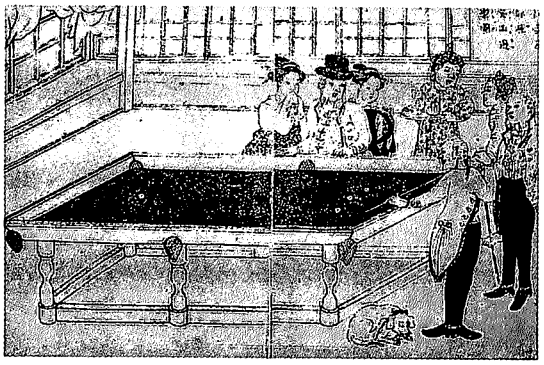
二十日　金曜日

晴天。中国人たちは再び沖へ出て行った。四時をまわったころ、両奉行は、勘定方と両秘書官［家老二人］[18]ならびに検使全員等々とともにやって来た。表門で閣下方を出迎え、かぴたん部屋で私の挨拶を述べ、閣下方の健康を祝した、等々。（中略）

六時半ごろ閣下方は、舞台がたいそう趣味良く設定されている庭へ、そして舞台の正面にあって、いくらか高く、絨毯とオレンジ色の布で飾られ、両側から大きな立派なガラス蓋のある燭台で照らされている彼らの席へとお出ましになった。

閣下方は、まず最初に、習慣に従って玉突き部屋（「花畑亭」のこと――引用者）へ行き、荷倉役がしばらく玉突きをして見せて、楽しませた。その後、私が閣下方に玉突き棒を差し出すと、閣下方はそれが気に入り、私に教えられて、何突きかした。私は荷倉役とともに、閣下方に、若い者たちがすでに舞台衣裳に着替えているが、階下ですっかり準備が整えることができるまで、退屈しのぎに、しばらく玉突きをしていてはどうか、という考えを述べた。

その後、閣下方とその他の人々が席に着き、最初の芝居（すなわち「気短な人」）が終り、閣下方は夕食のため二階へ上がった。ここで私は閣下方にオランダ風の軽食を、菓子なども混ぜて出してもてなした。閣下方はすべてを注意と驚きをもって観察し、全部を召し上がり、供の者たちにも食べさせようとしたが、手はつけられなかった。



蘭館の館員が玉突きをする図。
広川獬『長崎見聞録』より。

芝居の準備ができたので、閣下方は再び階下に着席した。若い芝居愛好家たちは「二人の猟師とミルク売り娘」を演じ、次に歌と踊りを混ぜたパントマイムが続いた。すべてが期待を十二分に満たすものだった。

装飾といい、衣裳といい、演技といい、いずれも本当に期待していたよりも良かった。

最後に、緑で飾り、Lang leeve de Gouverneurs van Nangazackij［両長崎奉行万歳］と書いてある照明具が舞台へ運び込まれ、それは手拍子で迎えられた。

閣下方は極めて満足し、このようなことは見たことがない、彼ら自身［日本］の見せ物や中国人の見せ物への自負が失われた、と述べた。若い俳優たちに注目が集まった。

奉行筒井は、芝居の荒筋の完全な翻訳文を前もって手に入れており、自らも多くのことを書き留めていた。九時ごろにはすべてが終り、両奉行はご機嫌で、庭を抜けて、（つまり、二列の照明と、明かりをつけた凱旋門の間を抜けて、それらを私はこのフィナーレのために用意させておいたのであるが、一方、避暑棟全体と旗竿にも同様に私によって照明がつけられていた。）

［長崎の］町へと戻っていった。表門のところで閣下方と別れの挨拶をしたが、閣下方が始めに、もう一度私に礼を言い、終りに私は［今日の］出来事への適当な感想を添えて挨拶し、それにはすべて懇ろに返礼の言葉が返された。

奉行所の要人だけは、観劇の機会にめぐまれたが、用人と検使、町年寄らは劇場がとても狭かったために場所を得ることができなかった。そのためかれらは、商館長ブロムホフに再度の上演を要請した。ブロムホフは、忙しかったが、芝居の施設のひどさを味わせるために、願いを聞き入れてやった。十月二十二日（文政三年閏庚辰九月十六日）、第四回目の上演が行なわれた。

（十月）二十二日　日曜日

霧のかかった天気、時々こぬか雨。

昨日の要請にもとづいて、例の方々がやって来た。秘書官たち（用人のことか――引用者）を最初にかぴたん部屋へ迎え入れた。検使たちもそうした。町年寄たちは直接庭園の家（「花畑亭」――引用者）に行き、その後に、上記の［秘書官・検死の］一行も同様にその［庭園の家］建物に向かい、彼らの座席を占めた。秘書官たちは、［先日］奉行が座ったのと同じ場所に座ったが、貴賓用の座席と、屏風以外の装飾品は取りのけてあった。

閣下方は［舞台からの］距離と彼らの前に座る人数が多いことから、一段と良く見えるように、椅子に座ることを選んだ。一昨日と同じ最初の芝居（「気短な人」）が終ると、私は閣下方に、食事をするよう勧めさせた。一人一人全員に食事が運ばれたが、私はその他に、

ハム ham

骨付きの肉（karbonaden 牛、豚、羊の背、肩、あばら肉の切り身――引用者）

三種の菓子（gebak ケーキ、パイなど――引用者）

を、第一のものは秘書官用に、第二のものは検使用に、そして第三のものは町年寄用に、それぞれ三つの別室に用意した。

二つ目の芝居（「二人の猟師とミルク売り娘」）の準備がすべて整うと、私は閣下方に声をかけ、彼らは再び席に着き、関心を集中し、出演者たちに拍手喝采を送った。九時ごろ、芝居がはねると、閣下方［用人たち］に私の挨拶をし、彼らからもありがとう、良かった、驚いた、という言葉を受けた。そのあとで、検使と町年寄も同じことをした。（後略）

芝居が演じられた建物は、本来、商館長や館員らがうさを晴したり、くつろいだりする遊戯場であり、オランダ人はふだんよく板張りの一階で

は玉突きを、畳を敷いた二階では飲食しながら歓談に興じたりした。

広川獬（生没年不詳、江戸後期の医師）の『長崎見聞録』（寛政十二年＝一八〇〇年刊）に、この遊戯場の玉突き台についての記事があり、それには「此花園の傍に亭あり。のぼる（〝高い所〟の意か――引用者）に種々の小鳥を飼置たり。又席上に。長さ貳間に横壹間半ほど。高さ三四尺ばかりなる臺有。惣て羅紗を敷たり」とある。

この遊戯場もしくは娯楽館は、時代によって形を変えているが、当時はL字形をしていた。[19] 狭い場所に舞台を設えることは、さぞかし困難を伴ったことであろう。観客は階段下に用意された狭い席にすわって芝居をみたものと考えられる。

長崎奉行・筒井政憲は、第三回目の上演（一八二〇・一〇・二〇＝九・一四）までに、芝居の荒筋の完全な訳文を手に入れていたことは明らかであるが、かれがいつそれを入手したものか定かでない。通詞らが訳した芝居の筋書のもとの文章はどのようなものであったかも不明である。おそらく川原慶賀の阿蘭陀芝居図巻にある詞書がかぎりなくそれに近いものであったと考えられる。

三　オランダ芝居の素材

太田南畝の「増訂一話一言」に、

庚辰九月廿四日於出島興行

阿蘭陀俄芝居狂言仕組大帳

狂言名題

二人獵師湧賣娘二段續

とある。[20]

この記事は『長崎市風俗編』（大正14・11）の二八三頁にも引用されている。が、これまで原本について分からなかった。しかし、近年ようやくそれについて明らかになった。出島では、まず「性急者」（〝気短な人〟）が、ついで「二人猟師乳汁売娘」の順で上演された。つぎに原題を示そう。

［邦訳］　　［原題］
「性急者」……De Ongeduldige
「二人猟師乳汁売娘」……De Twee Jaagers en het Melkmeisje

右の二つの演題のうち、「性急者」の原作者については、これまで明らかでなかったが、近年中央大学教授・中村洪介（一九三〇～二〇〇一、西洋音楽史研究家）によって解明された。同氏の研究によると、原作者はエティエンヌ・フランソワ・ド・ランティエ（Etienne François de Lantier）であり、原題は「ランパシアン」（*L'Impatient*）（〝短気な男子〟〝いらいら男〟の意）という。

そしてこの芝居をオランダ語に訳したのは、ピィテル・ヘラルドゥス・ウィステン・ヘイスベーク（Pieter Gerardus Wisten Geysbeek, 一七七四～一八三三、警句家・劇作家、翻訳家）であった。[21]

フランス人ランティエの台本は、パリの国立図書館にマイクロフィッシュされたものがあるということであるが、オランダ語訳と原作とを比べてみると、川原慶賀の絵巻物にみられる詞書の内容と少々異なる点が明らかになったという。「性急者」という芝居が展開する主要な舞台は、パリにある「ボルカムプの邸内」であるが、フランスの原作では、ボルシャン（Borchamp）とダモン（Damon）がいっしょに暮らす「共同アパート」（une maison commune）になっているという。

その他、日本側の詞書と異同とつくっているのは、登場人物の名であり、以下まとめると、つぎのようになる。

［日本語版］　　［オランダ語訳］
ダアモンの召使いラフレウル――→ラ・フルール（La Fleur）
ダアモンの下人フロンティン――→アンドレ
銀借しボルカムプ――→ユリアの父親
ボルカムプの娘ユリア――→未亡人（eene weduwe）
裁判方の書記役ノターリス――→公証人（eene Notaris）[22]

しかしながら、「二人猟師乳汁売娘」の芝居は、ルイ・アンソーム Louis Anseaume[23] の台本、エジディオ・ロモアルド・デュニ Egidio Romoaldo Duni[24] が作曲した小唄入りの喜劇「二人の猟師と乳売娘」(*Les deux Chasseurs et la laitière*) と、ラ・フォンテーヌの寓話「熊と二人の仲間たち」(*L'Ours et les Deux compagnons*)、「ミルク売り娘とミルクの入った壺」(*La Laitière et le pot au lait*) などに基づいたものである。[25]

オランダ語に訳したのは、フィリップ・フレドリック・レインスラーヘル Philip Fredrik lynslager (生没年不詳) である。この翻訳作品は一七八三年にアムステルダムにおいて上梓されたという。[26] 宇田川榕庵 (一七九八～一八四六、江戸後期の蘭学者) の自筆稿本として「和蘭戯芸 弐人猟師乳汁売娘」(和とじ本の題簽にこのようにある。23.3 cm×16.4 cm、厚さ0.7 cm、十二葉ある。ところどころに虫くいがあるが、文字は比較的鮮明である) と、同人が謄写したオランダ語の原本 (墨書23.3 cm×16.3 cm、厚さ0.6 cm、二九頁) の一部があるが、そのタイトルおよび版元は、つぎのようなものである。

de
Twee Jaagers
en't
Melkmeisje
William
……
de
Twee Jaagers
en't
Melkmeisje,
Klächtspeel;
met zang

gevolgd naar het
fransche,
door
p. p. Lỳnslager.
ママ
Te Amsterdam,
by̆ J. Helders en a.
mars, in de Nes.
1783
met privilegie.

とある。

このオランダ文の意味は

「二人の猟師と乳売娘」。歌まじりの笑劇。フランス語からP・P・レインスラーヘルがオランダ語に訳したもの。アムステルダムのJ・ヘルデルスとA・マルス社は、特別の許可をもらい、一七八三年に刊行」である。

宇田川はこの原本を手に入れて、それを訳した、といった説がある。[27] が、じっさい訳筆をとったものかどうか定かでない。また宇田川がどのようなルートから原本を借覧し、それを謄写したのかもわからない。おそらく長崎奉行所の関係者もしくは、通詞、参府したオランダ人から入手したものか。

宇田川榕庵が書き写したと考えられる「二人の猟師と乳売娘」の筋書は、

和蘭戯芸　弐人猟師乳汁売娘
阿蘭陀原本添

榕庵蔵

と記されている。

この文の意味は、訳文のほかに原本があることを伝えている。筋書は榕庵蔵・となっており、榕庵訳・となっていないから、おそらく誰からか筋書の原本ともども訳文の写本（？）を借り出して謄写したものであろう。

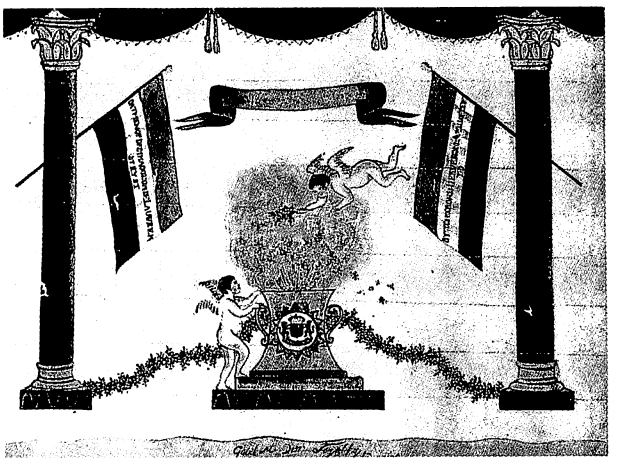
四　「阿蘭芝居巻」の中味について

オランダ芝居を描いた川原の紙本泥絵は、すでに述べたように計七枚あるのだが、少々虫くいはあっても、色彩は良好である。これより第一図から第七図まで、一枚ずつ細かく見てみよう。原画はすべて彩色が施されているが、いまこの紙面において白黒でしかその色を再現できないのが残念である。

第一図（葉）は、舞台の正面図である。波形の紺色の幕がかかっている。その下に厚手の白い帆布（キャンバス）を十枚縫いあわせ、巻いてあげおろしする幕（緞帳（どんちょう））がかかっている。紺色の幕のすぐ下―中央上部に空色の大きなリボンのようなものが付いており、それにはラテン語の大文字で「ARS LONGA VITA BREVIS」と書かれている。

左右には、コリント式の黒い柱が二本みられ、柱頭にはアバクス花形飾りが付いている。またコリント式の円柱には赤・白・青から成る大きなオランダ国旗が二本描かれている。左右に各一本づつある国旗の白地に何やら欧文で文字が書かれているが、左側には「DAT MEN OP DECIMA OOK OM DE LAUWREN STRYDT」、右側に「BY'T CHOOR ONS HIER VERGUND APOLLOE GEWYD」と書かれている。このオランダ文は、左右あわせてはじめて一文を構成するもので、意味は「人々が［故国でだけでなく］出島においても栄冠を求めて競っているという事実は、当地でわれわれに恵み与えられ［かつ］アポロに捧げられた劇場により［明らかになる］」という意味とのことである。(28)

幕のほぼ中央下に、ビールジョッキのような形をした香盤（色は灰青色）が描かれ、その真中にオランダ国王の紋章であるライオンが二疋と王冠が描写されている。香盤の台（黒色）の上に天使がひとり足をかけており、また盛んに火炎をあげている香盤の上空で、もう一人の天使が手に花束を差し出している。さらに左右の円柱の土台を、あたかもへその緒のように、一本の花飾り（緑、ピンク、黄から成る）が結んでいる。



第１図―舞台の正面図。

第一図は、全体から見ると、単純なものだが、オランダ国旗が大きく描かれていたり、香盤が赤い炎を吹きあげている光景は、かなり観客の注意を引いただろうし、舞台の異国情調に魂をうばわれたことであろう。

第二図（葉）から第四図（葉）までは、「性急者」（De Ongeduldige）の芝居の場景を描いたものである。

この芝居の登場人物たちは、左記のとおりである。

［役柄］　　［役者名］

性急者ダアモン……オーフルメール・フィッセル（文政三年［一八二〇］の夏来日した一等書記）

ラウレウル（ダアモンの従者）……ルイス・エリッセ・フィッセル（文政二年［一八一九］度からいる二等書記）

フロンティン（ダアモンの下男）……フレデリック・クレメンス・バウエル（文政二年［一八一九］度からいる書記）

ボルカンプ（金貸し）……パレラス・ディック（文政三年［一八二〇］の夏来日した台所係）

ユリア（ボルカンプの娘）……ヘルマヌス・スミット（文政二年［一八一九］度からいる書記）

ノターリス（裁判所の書記）……デロイトル（文政三年［一八二〇］の夏来日した小役）

この芝居は、二段（二つの場面）から成る。舞台は金貸しのボルカンプ邸である。せっかちで気短な主人公ダアモンは、金貸しの家に宿泊しているのだが、じぶんが身を寄せている家の娘ユリアを妻にしようとさんざん苦労する。が、ついにめでたく望みを遂げるといった話である。

初段は、せっかちなダアモンが、思うように物事が進展しないことに業を煮やし、下男のフロンティンを叱りつけているところから始まる。ダアモンは、この下男にユリアの様子を見てくるように命じるが、下男がすぐ戻らないので腹を立てる。

そこへユリアが姿をみせる。ダアモンはユリアと会うや、思いを打ち明けるが、相手にされない。けれどユリアは係争中の父ボルカンプのことを思いだし、思い直して訴訟の件で力を貸して欲しい、という。ダアモンの叔父は裁判官であったから、判決に便宜をはかってもらえるかも知れなかったからである。

ダアモンは訴訟の世話をたのまれたことを、ユリアを物にする絶好のチャンスと考え、その依頼を聞き入れ、その場から立ち去ろうとする。そのとき父親のボルカンプが帰宅するのを見たユリアは、父から裁判の次第を聞いてほしいという。ダアモンはユリアの父と会うと、訴訟中のよし、わたしが力を貸しましょう、というと、相手はことの次第をくどくど語る。せっかちなダアモンは長話にうんざりする。

しかし、事は縁談にかかわるため、ダアモンはいらいらする気持を押える。ボルカンプはダアモンの性格をよく承知しているが、そのような素振りを見せず、訴状を取りに部屋から出てゆく。

ダアモンは、ひとりで部屋で待っているうちにいらいらして来る。そこで下男のフロンティンを呼び寄せると、早くボルカンプを呼んで来いと命じる。が、下男のほうは、主人がせわしくものをいったため、話の要領を得ることができず、殴られてしまう。

第二段目。

父親のボルカンプは、娘ユリアにダアモンのせっかちさを悪しざまにいったのち退場する。ユリアがひとりいる所にダアモンの下男フロンティンがやって来て、主人ダアモンがあなたにお会いしたい、と申しておりますが、さしつかえありませんか、と尋ねる。ユリアはまず父の心をなだめ、そのあとお会いしましょう、といって奥へ下がる。

せっかちなダアモンは、下男のフロンティンに言いつけた使いの返事を待ちきれず、ユリアの返事はどうであったと、下男に聞くと、彼女は返事なかばで奥へ下がられました、と答える。

そのとき、ある考えがダアモンの頭に浮ぶ。ユリアとの縁談を成功させるには、訴訟の件で便宜をはかってくれるよう、裁判官である叔父に手紙を出すのが早道である。

ダアモンは、早速ペンをとり手紙を書きおえると、下男のフロンティンを呼んで持たせて遣る。ダアモンは、裁判所の書記をも呼び寄せると、ボルカンプの訴訟を早くすませて欲しい、費用はどのようにかかろうと、わたしが払う、という。廷吏は承知して退場する。

やがてユリアが、静かに奥のほうから出てくる。ユリアと再会したダアモンは、恋々の情を彼女に打ち明ける。そのときかねてユリアの肖像画

を描くよう依頼しておいた絵描きが部屋に入ってきて、絵筆をとって画きはじめる。ダアモンは画家が似顔を描くのを見ていると、いらいらしてくる。

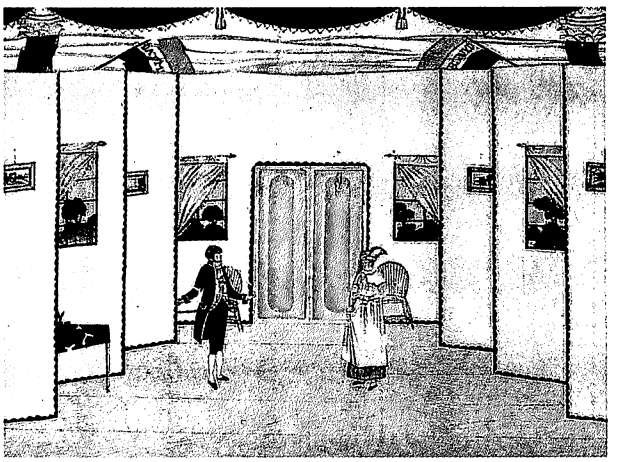
そのとき下男のフロンティンが叔父の返事を持ってきたので、早速ひらくと、勝訴とあり、ダアモンは大いによろこぶ。すぐにボルカムプを呼び、その手紙を相手にみせる。文面にはボルカムプは容貌もよい上に聡明である、一件落着ひじょうにめでたいと、認めてあった。

しかし、ボルカムプは、文中にある容貌がよいという字句をふしぎに思い、鏡にじぶんの顔を写してみる。これはダアモンが叔父に送った手紙の中で、ユリアは美貌の女性である、と書くべきところ、ボルカムプと間違って書いたことに原因があった。

折しも裁判所から書記が、書付けをもってやって来る。それにはガラヒンを相手とした訴訟に勝ったことが記されており、ボルカムプは大いによろこぶ。ボルカムプは、なぜこんなに早く判決が出たのか、裁判所の書記に尋ねるが、相手は秘して語らない。

このときダアモンは、勝訴を取らせたのは外ならぬわたしである、という。ボルカムプはそのことばを聞いて驚くが、半信半疑である。いずれにしてもボルカムプは、娘の縁談をゆるす様子をみせようとしないので、ユリアは父にむかって、裁判に勝ったのは、ひとえにダアモンの計らいによるものであり、縁談を断わると義理が立たない、という。

娘がじゅんじゅんと説くことばを聞いていたボルカムプは、やがてその理に伏し、その場に居合わせる書記に、娘ユリアとダアモンとの結婚契約書を書かせて、めでたく幕は下り、一同奥に退がる。



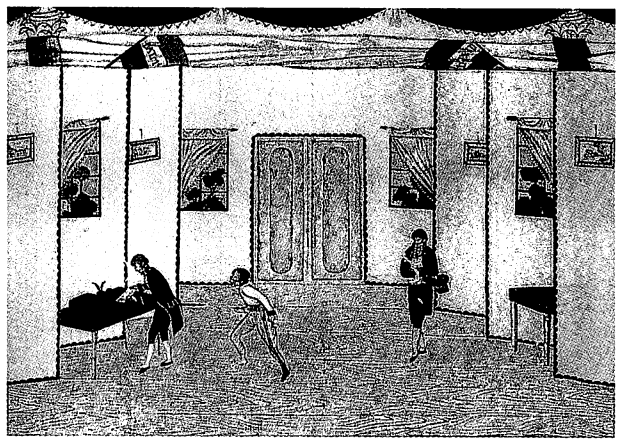
第2図―ボルカムプ邸の屋内の図。

第二図。

第二葉は、ボルカムプ邸の屋内の図であり、舞台中央の左側にダアモン、右側にユリアが立っている。ダアモンは思いの丈を彼女にぶちまけ、彼女の方も悩みごとを打ち明け、ダアモンの助けを借りようとする。

白い緞帳は巻き上げられている。絵の中央奥にうすい黄褐色の壁と窓が二つ、大きなドアがみられ、その左右に椅子が二つ置かれ、下袖と上袖（舞台の両わきの部分）には、壁を模したうすい紫色と黄褐色の屏風式の鏡（立ての道具）が三枚立ててあり、そこには窓と絵が二枚みられる。

外舞台は板敷きであり、うすい茶色で塗られている。



第3図―ボルカムプ邸の屋内の図。
下袖と上袖に‘書きもの机’が二つ置かれている。

第4図―ボルカムプ邸の屋内の図。
登場人物が5名描かれている。

第三図。

第三葉の舞台の図柄は、第二図とほとんど変らないが、舞台中央の奥にあるドアの左右にあった椅子が姿を消し、代わって下袖と上袖に書きもの机（色は左が青、右が緑色）が二つ置かれている。下袖の机にむかって叔父（裁判官）宛の手紙を書いているのはダアモン、そのうしろにいるのがダアモンの下男フロンティン、そして帽子を手にし立っている男が裁判所の書記である。

第四図。

第四葉の舞台の図柄は、第三図と同じである。が、登場人物が五名描かれている。正面にむかって左からダアモン、裁判所の書記、絵描き、ユリア、ボルカムプである。ボルカムプは、身を乗りだすようにして手紙を読んでいる。

＊

「性急者」のつぎに上演された出し物は、「二人の猟師とミルク売り娘」である。この芝居の登場人物たちは、左記のとおりである。

［役柄］　　［役者名］

猟師ギリョット（仏・ギョ）……オーフルメール・フィッセル（文政三年［一八二〇］の夏来日した一等書記）

同　コラス（仏・コラ）……ルイス・エリッセ・フィッセル（文政二年［一八一九］度からいる二等書記）

牛乳売り娘ペルレッテ（仏・ペルレット）……ヘルマヌス・スミット（文政二年［一八一九］度からいる書記）
騎士（リダー）タンケレート……オーフルメール・フィッセル（二役）
士卒……フレデリック・クレメンス・バウエル（文政二年［一八一九］度からいる書記）
同……一番船小役シイモン
同……在留小役スミット
同……同　デウィルデ
娘ペルレッテの父……デイキ（ディック、文政三年［一八二〇］の夏来日した者）

この芝居も二段（二つの場面）から構成されている。物語は猟師ギリヨットが、ミルク売りの娘ペルレッテに一目惚れして以来、彼女を女房にしようとするが、娘はなかなかなびこうとはしない。

じつはこの娘、騎士なる人の子女であったが、父の同輩の騎士（タンケレートという者）にそそのかされて駆け落ちした。相手の男はじぶんが取った行動を後悔し、娘を旅の途中で捨ててしまう。男に捨てられたペルレッテは、旅路をさすらううちに、ある一軒の農家に身を寄せることになり、やがて乳売り娘となる。

いまはすっかり改心した騎士のタンケレートは、部下を連れてペルレッテを捜索するための旅に出、ついにたずね慕う娘をみつけ、めでたく結婚するといった話である。

「性急者」のときと同じように、第一図（舞台の正面図）がある。緞帳が巻きあがり、開演となる。初段は、二人の猟師ギリヨットとコラスが、熊狩りに出かけるところから始まる。ギリヨットは仲間のコラスが山深くわけ入っている間に、ミルク売りの娘ペルレッテと出会い、その美しい容貌をみて心がうごき、女房にしたいと思う。

猟師ギリヨットは、さかんにペルレッテをくどき落そうするが、娘はいっこうになびかない。ペルレッテはいう。わたしはあなたよりずっと富める者だから、猟師ふぜいと一緒になるなんて思いもよらない、と。ギリヨットは、我もまた熊の皮を売って、金もうけをすれば、汝よりも富める人間となる、という。

しかし、ペルレッテは猟師のことばに耳を貸さず、立ち去る。

山深く入っていたギリヨットの相棒のコラスは、熊に追いかけられ、息も絶え絶えに駆け寄ってくると失神する。ギリヨットはその様をみて大いに驚ろき、木によじ登って難を避けようとする。熊はコラスの体をかぎまわっていたが、やがて姿を消す。

猟師ギリヨットは、熊が去ると、コラスを介抱したのち、行方不明の犬をさがすために山へ入る。コラスはある小屋の中に難をさけている。ペルレッテが再び登場する。大事な牛乳を入れる壺をこわしてしまったと、歎きの歌をうたいながらやってくる。が、むこうからあのギリヨットがこちらの方に来るのを見て、木陰に身をかくす。

ギリヨットの服は、森の中を駆けまわったためにズタズタに破けている。かれは仲間のコラスを捜そうとするが見当らない。けれどコラスの帽子が落ちているのを偶然みかけると、きっと熊にさらわれたに違いないと思う。ギリヨットは、コラスひとりを死なせては気がすまない、我も共に死のうと決心する。

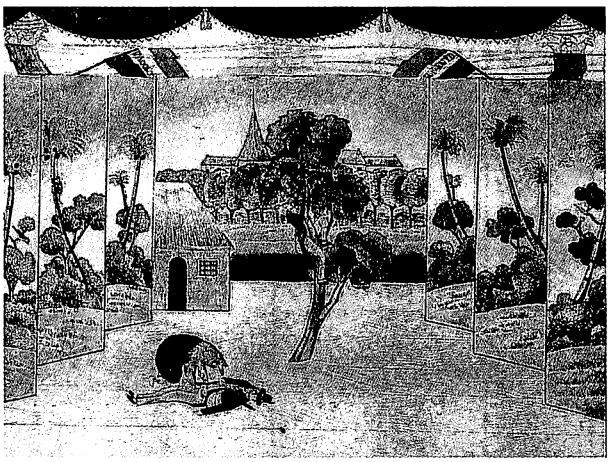
第5図―猟師ギリヨットがミルク売りの娘ペルレッテと出会う図。

そこで小屋に釘を打ち、ロープを下げ、それで首をつって死のうとしたとき、小屋はくずれ、その中からコラスがころげ出てきたので大騒きとなる。ペルレッテは、その様をみて、汝らは熊を仕損じるし、このていたらくは何かという。するとギリヨットは、たしかに私は熊を射ることはできなかった。けれど汝も大切な壺をこわしてしまったのだから、いまはどちらも富者である、とからかい、ついで我が妻になってくれないかという。

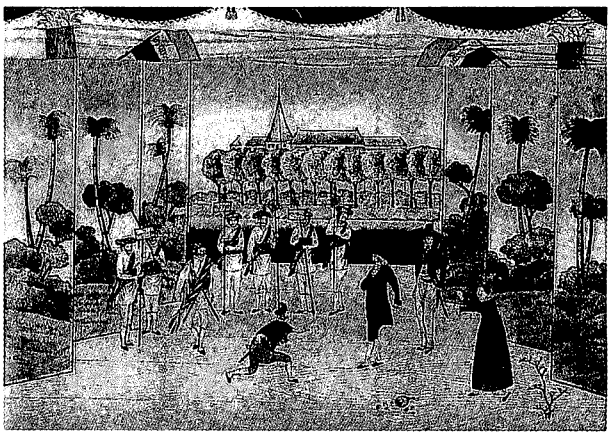
やがてコラスは、熊の皮を得そこなった歌をうたい、ギリヨット、ペルレッテもそれぞれ歌をうたいながら立ち去る。ペルレッテはひとり歌をうたい終ると、恋人のタンケレートからもらったロケットを取りだし、恋人のつれなさを大いに歎き、やがてその装身具を地べたの上に置くと、草花をつみ、それをまきちらしかけ、かたわらに身を伏せる。

第二幕。

楽器の演奏はあるが、セリフのないパントマイムがつづく。騎士タンケレートは、出奔中、見捨てたペルレッテのことが心にひっかかっており、大いに悔いている。やがてじぶんの非を悟り、翻



第6図―失神した猟師コラスとその体をかぎまわっている熊。



第7図―ペルレッテの父に許しを請うているタンケレートとその部下の図。

然と悔い改めたタンケレートは、「ペルレッテ、汝を慕うものここにあり」と記したプラカードをもった士卒らと諸処方々を尋ねあるくが、当地に来て偶然ロケットが路上に落ちているのを見て、大いにおどろく。

そのかたわらの草むらに寝入っている娘がいるので、よく見ると、何んとじぶんが捜しているペルレッテであるので、またもやびっくり仰天してしまう。そのとき猟師コラスとともに人品卑しからぬ老人がやってくる。

その者は彼女を助け起そうとすると、士卒に防げられるが、程なくペルレッテの父親であることがわかる。ペルレッテは愛憎の念に打ちひしがれ、言葉なく、ただ涙ぐむ。

タンケレートはペルレッテの父の前にひざまづくと、これまでの過ちをわび、彼女との結婚のゆるしを請う。父親はタンケレートの罪をゆるし、結婚してもよいという。やがて士卒らはこの国の慣習に従って、花嫁と花婿の頭のうえに花環かけてやる。そして一同、「タンケレートとペルレッテを万世までことほぐ」と書いたプラカードを立てながら、退場する。

第五図。

舞台のほぼ中央に、何の木だかわからないが立木の〝切出し〟（板などを切り抜き、彩色したもの）が見られる。そのうしろに薄い灰青色のヨーロッパの教会の尖塔と円形の木立（黄緑色）、さらにピンク色の壁をもつ、わらぶき屋根の小屋が描かれている。

下袖の〝鏡〟（屏風式の立ての道具）には、異国風の樹木（ヤシの木か）と動物や鳥などが描かれている。正面の切出しの前でむき合って話をしているのは、猟師ギリョットと娘ペルレッテである。

第六図。

舞台の背景は、第五図とおなじであるが、正面の立木の切出しのうえにギリヨットがおり、木の根元ちかくに失神した男コラスがいる。そしてその体をかぎまわっている熊（赤い大きな舌を出している）などが細密に描かれている。

第七図。

舞台の背景は、第六図とほぼおなじである。が、正面にむかって右の袖に何やら小枝のようなものが見られ、またその近くにロケットが大き目に描かれている。

左肩に赤いたすきをかけ、腰に緑色の幅広の帯をまき、手に槍をもった士卒が六名、士官が一名描かれている。黒い上着を着、真紅のパンタロンをはき、黒衣の老人の前で身をかがめているのはタンケレート。老人のうしろで黒い上着と赤いシャツを着、銃を肩にかけ、腰に刀をさし灰色のズボンをはいているのは猟師のコラスである。そしてその脇に立っているのは娘ペルレッテである。

彼女は濃紺の上着に、真紅のスカートをはき、さらに長い黒い前掛をかけている。このさいごの場面の絵は、派手やかな色どりで描写されている。

五　登場人物たちの衣装

「性急者」の第二図において、ダアモンとユリアが向きあって立っている。ダアモンは、茶色の短髪である。服装は、高い衿のついた黒色の燕尾服（仏・frac）を着、紺色の脚衣（仏・culotte）を着用し、白色の靴下を用いている。衿や胸元からは、やわらかい生地製の胸飾り（仏・jabot）をみせている。

はきものは、くるぶしの少し上まである短い黒色のスパッツ（英・spats, 仏・guêtre）である。ユリアは、ビロード製の黄色の帽子（ピーターパン・ハットのようでもある）をかぶっており、そこから大きな羽根が突き出ている。真紅の長いスカートをはき、ギリシャ風の長そで（うす青色）の付いた長衣のようなものを着用している。はきものは黒色のスパッツである。

第三図において、ダアモンは黒色の燕尾服を着、紺色の脚衣をはいた服装で、青色の机の上で手紙をかいている。そのうしろで、緑色の衿、帯の付いたシャツを着、灰色の長ズボン（仏・pantalon）（緑色のすじが入っている）をはいた下男フロンティンが立っている。はきものは、白い

靴下（右足）と黒色の短靴（左足）のようにも見える。

裁判所の書記は、やや長目の茶色の頭髪をし、ほおひげをはやしている。裏地が真紅の紺色の燕尾服を着、黒色の脚衣をはき、白色の靴下を用いている。はきものは、黒色のスパッツである。右手に黒色のフェルト帽のようなものをもっている。そこに赤褐色のバンドが巻いてある。

第四図においては、五名の登場人物が描かれている。正面にむかって左側に立っているのはダアモンであり、頭に黒い三角帽（仏・tricorne, 軍人などが正装したとき用いる）をかぶっている。その他の装いは第三図とおなじである。

同人のとなりに帽子を手にした裁判所の書記が立っているが、その服装は第三図とおなじである。絵描きのなりは変っていて、黒い大きな襟（えり）のついたチャコールグレー（黒に近い灰色）のローマ時代のマントのような長衣を着ている。そのとなりに立っているのはユリアであり、同人は赤いバンドと大きな羽根のついた黄色い帽子をかぶり、うすい灰色の長衣を着ている。そして手紙をむさぼるように読んでいるのがボルカンプである。かれは黄色の胸飾りのついた黒い燕尾服と黒色の脚衣を身につけ、白色の靴下をはいている。五人はおなじように黒色のスパッツをはいている。

第五図に描かれた猟師ギリョットは、緑色のバンドがついた黄褐色の帽子をかぶっている。緑色の高い衿（えり）のついた黒い上着を着、灰色の長ズボンをはいている。腰には真紅の幅広の帯をまいている。はきものは黒色のスパッツである。

ペルレッテは、あご紐つきの黄色い日よけ帽をかぶり、白いひだ飾りのついた紺色の上着をき、真紅の長いスカートをはいている。そして長い黒色の前掛け（エプロン）を付けている。右手にもっているのは牛乳を入れる壺である。その色は黒である。黒色のスパッツをはいている。

第六図にみられる、失神したコラスは、黒色の緑色のバンドのついた山高帽のようなものをかぶっている。黒い上着と赤シャツを着、腰には黄色の帯をまき、灰色の長ズボンをはいている。背には銃をかつぎ、肩からは灰色のカバンをたすき掛けしている。はきものは、黒色のスパッツ。

第七図では、登場人物は多い。まず兵士の装いから述べると、士官を含めて七名の士卒は皆、簡単な飾りのついた黄褐色の縁なし帽をかぶり、白い上着を着、白のパンタロンをはいている。左肩から真紅のたすきをかけ、腰に幅広の緑色の帯をまいている。兵士らはめいめい赤い飾りのようなものがついた長槍を手にしている。士官だけは、白と焦げ茶色のしまの肩掛け（ショール）をはおっている。

ペルレッテの父は、黒い帽子をかぶり、黒色の燕尾服と黒色の長ズボンをはき、白い靴下を用いている。その前で腰をかがめているのはタンケレートであるが、同人は飾りのついた黒い帽子をかぶり、半そでの黒い上着を着、真紅の脚衣を身につけ、足には白い靴下をはいている。

ペルレッテの父親のうしろに銃をもったコラスが立っているが、その装いは第六図とおなじである。両手を前に突き出している。ペルレッテは、こんどは日よけ帽をかぶっていない。服装は第六図とおなじである。

六　オランダ芝居が上演された場所

オランダ人らによる素人芝居が演じられた出島の中の建物とその特性について述べておこう。まずその前に出島の起源について簡単にふれておく。幕府が二十五名[29]の長崎の富裕な町人に命じて、江戸町の沖に〝扇形〟の人口島（「出島」三九六九坪）を構築する工事に着手させたのは寛永十一年（一六三四）であり、二年後の寛永十三年にそれが完成すると、それまで町内に雑居していたポルトガル人は、ことごとくその人口の島に閉じ込められた。（「南蛮人出島二令在住事」『長崎実録大成　第七巻』所収）。

当初、「出島」は〝南蛮屋敷〟と呼ばれた。天草・島原の乱が勃発したのは寛永十四年（一六三七）十月のことだが、幕府はこの乱を機にキリスト教禁制の要を痛感し、翌年七月出島在住のポルトガル人は通商と日本渡航を禁じられ、日本から退去することを命じられた。

やがて平戸にいたオランダ人らは、寛永十八年（一六四一）一月、幕府より長崎の出島への移転を命じられ、同年五月ごろより東インド会社の備品・荷物・食料などの運送がはじまった。出島の建物の多くは、日本風であった。

この出島で西洋芝居が上演されたのは、オランダ人の平戸移転から約六十年後のことである。出島内の南東に、土壁のようなもので囲まれた中にL字形に近い建物があった。出島に在勤するオランダ人は、その建物をふつうspeelhuis（スペルハイス）（「賭博場」）と呼び、日本人は「花畑亭」などと呼んでいた。そこは商館長の別荘、館員らが玉突きや飲食をしたり、ときに遊女を呼び寄せて同衾する所であった。

出島図はたくさん残されている。芝居が演じられた場所は、いわゆる「庭園の家」「玉突き部屋」「避暑棟」と呼ばれた建物の屋内である。商館長ヤン・コック・ブロンホフ（一八一八～二三年在任）に命じられて、館員のJ・F・ファン・オフェルメアー・フィッシャーが長崎で作った二十分の一の出島模型があるし、同人がペンで書いた平面図（28.0cm×40.0cm、レイデンの国立民族博物館蔵）が残されている。しかし、いちばん写実的な建物の絵としては、川原慶賀が描いた「長崎出島」36.6×91.5、紙本着色、水戸水府明徳会彰考館蔵）や「長崎出島之図」（45.5×104.5cm、長崎大学経済学部分館図書館蔵）などの右に出るものはあるまい。

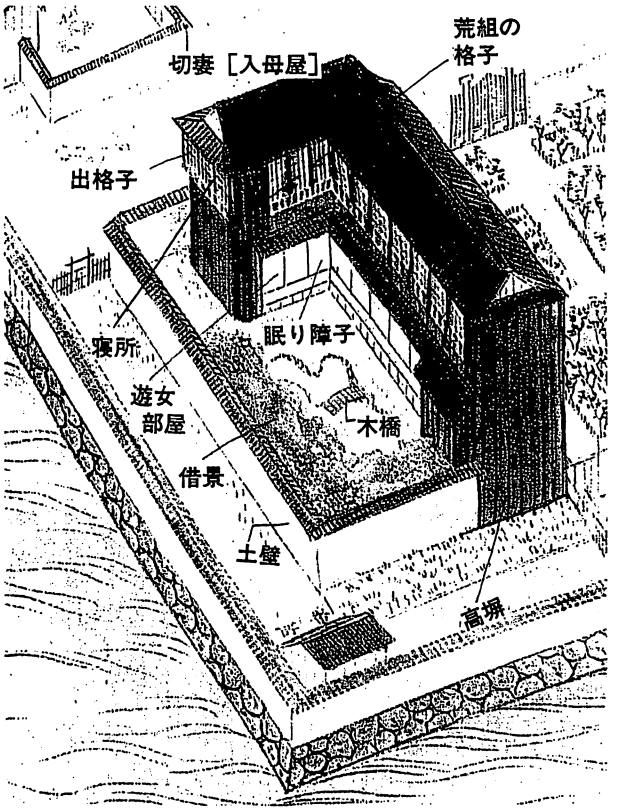
後者の出島図[30]からL字形の建物とその周辺部分を拡大してみると、いろいろなことがわかる。建物の大きさは三間×八間（5m40cm×約14m）

であったようだ。屋根は入母屋（いりもや）または切妻（きりづま）造りとでも呼べそうである。高塀造りであり、風雪にもっとも強いといわれる板壁が張ってある。一階の長い部分は板敷きであり、ふだんそこに玉突き台が置かれていて、オランダ人は玉突きをして遊んだ。一階の離れのような所は、遊女部屋であり、その上の階は寝所であった。二階はすべて畳敷きであり、オランダ人はそこで飲食をしたり、遊女と同衾した。

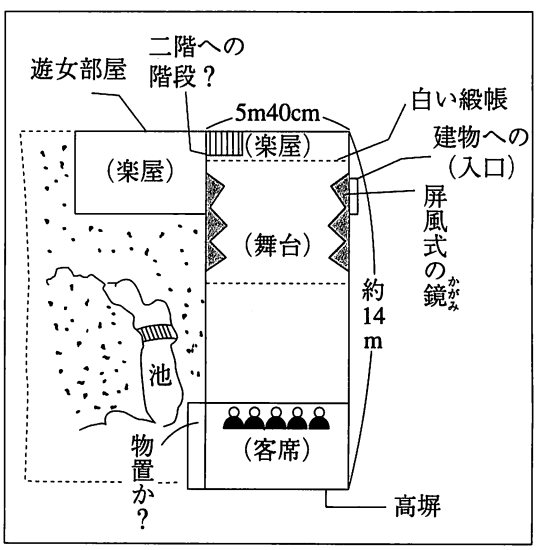
二階の窓をみると、縦横桟を打ちつけた格子がたくさん見られる。採光にじゅうぶん配慮されていることがわかる。庭に面した一階は、明り障子が多く用いられている。庭は和風庭園であり、池が二つ、木橋（きばし）が架かっている。植栽や築山のようなものもある。

七　舞台の構造について

L字形の建物のどこに舞台を設けたものか定かでない。が、芝居の舞台装飾を手かげている専門家に意見を仰いだところ、横幅が三間（五メートル四〇センチ）あれば、舞台がつくれるとのことである。わたしの推定では、長崎湾にむかった側に舞台を造ったものと考えたい。



オランダ芝居が上演された「花畑亭」（'賭博場'）
［「長崎出島之図」より。日本文字は筆者が入れたもの］



《芝居小屋（花畑亭）内部の舞台想像図》

役者はふつう幕が上がるまで、観客の前に姿をみせないものだし、衣装の着付けや小道具類などを用意するために楽屋はぜったいに必要である。そのためにも、遊女部屋を一時出演者のしたく部屋（楽屋）にする必要があったと考えられる。楽屋に使える部屋といえば、遊女部屋しかないのである。

上演は日没後の午後六時ごろにはじまり、九時ごろに終ったという。観客席はガラス蓋の燭台で照らされていた。奉行らの席は、他の席よりちょっと高く、そこにじゅうたんのようなものが敷かれていた。狭い場所を最大限に活用するのであるから、舞台づくりには苦労したことであろう。客席は舞台に近いと、芝居が見づらくなるから、せいぜい二十名ほどの人間がお互い身を寄せ合ってみたものか。

第一図の舞台装置を見てもわかるように、中央の扉の線から、左右が均斎がとれているが、これは舞台デザインとしてはありふれたもので、十七、八世紀にヨーロッパのオペラ、大がかりな見せ物、象徴的な演劇において、形式的舞台装置として用いられたものらしい。[31]

つぎに疑問に思われるのが、いったい誰が舞台用の緞張、大道具、小道具、切出し、鏡をはじめ、役者の衣装などを作ったかということである。おそらく日本人の絵師や針子、大工なども手を貸したのではなかろうか。資料がないので、何ともいえない。

八　オランダ芝居の筋書に関する日本側文献

活字本と写本。

(1)　活字になったもので一番古い文献は、(1)太田南畝（なんぽ）（一七四九～一八二三、江戸後期の文人、文化元年［一八〇四］長崎奉行所詰、翌年帰府）の「増訂一話一言」（蜀山人全集　巻五、吉川弘文館、明治41・8）に収録されている「二人猟師湩売娘」と「性急者」である。これはオランダ趣味に富んだ山口触山が写したものを太田が転載したものである。[32]

(2)　「二人猟師乳汁売娘」（『長崎市史　風俗編上下巻』所収、長崎市役所、大正14・11）。同上書の二八三～二八七頁にかけて、「増訂一話一言」に収められた、「二人猟師乳汁売娘」の役者名、幕図の様子、「性急者」の役者名などが引用されている。

(3)　「喝蘭演戯記（おらんだしばいき）（二巻）」は、新村　出の解説によると、勝海舟の旧蔵本であり、その後南葵文庫に保管せられ、ついで京都帝国大学図書館に寄托されたものという。

これは『海表叢書』巻二（更生閣書店、昭和3・1、一～一八頁）に収められた。「オンゲテユルディゲ」（「性急者」）と「二人猟師乳汁売娘」

の二編が収録されている。この写本の特色は、末尾にこれら二つの芝居を観た筒井和泉守政憲が文政三年（一八二〇）秋に書いた漢文による跋文が付いていることである。

原本は、目下行方不明ちゅうである。この写本は後書（あとがき）によると、昭和四年（一九二九）六月に勝伯爵家蔵の原本から謄写したという。京大本の大きさは27cm×19.2cm、厚さ0.4cm、請求番号は66オ2である。勝伯爵家の縁色の罫線に写したもので、袋綴じ十三枚（二十六頁）ある。本文中に区読点はいっさい見られない。

(4)「和蘭戯芸詞　全」（明治時代に写したもの。和綴じ、26.5cm×19cm、厚さ約0.4cm、二十葉［四十一頁］、内閣文庫蔵）

これは外務省とある赤い罫線（十行）に写したもの。仮名はすべて洋名を含めてカタカナを用いている。タイトルはない。少々虫くいがある。戯題はみられないが、最初に「性急者」が、ついで「貳人猟師乳汁売娘」の筋書がくる。書き出し（舞台・正面の説明）は、つぎのような文章ではじまる。

日本政府図書

内閣府図書館

幕之画解

左右ニ画キシ簾ニ書タル文字ハ

出島ニヲイテ我レ一ト狂言ノ芸ヲ競ヒ戯場

ヲカマヘ「アホルロー」（狂言ノ神ノ名）ニ奉献ストイフ（ママ）

意ノ詩ナリ

正面ノ上ニアル文字ハ

命ハ短ク芸ハ長シトイフ語ナリ

正面ニ画キタルハ

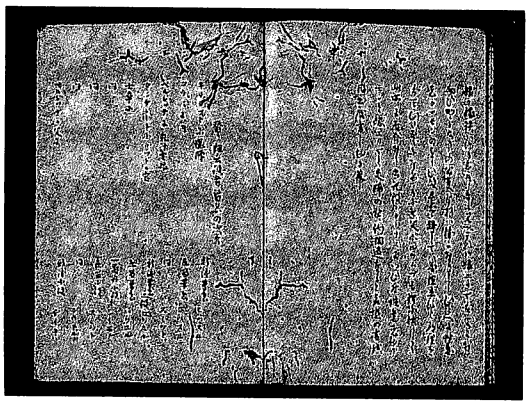
香盤ナリ其傍ニ羽翼アル　童子ノコトキモノ

外務省

(5)「喝蘭演戯記」（東北大学付属図書館蔵）。この写本は、同書の朱印によると狩野亨吉（こうきち）（一八六五～一九四二、明治から昭和期にかけての思

想家・教育者）が荒井恭□（一字不明）から購入したものである。東北大本の大きさは、24.3cm×13.5cm、厚さ0.5cm、請求番号は狩 第4問 13307 1冊である。はじめに「性急者」が来（六頁まで）、ついで「二人猟師乳汁売娘」が来る（七～十頁まで）順序は、京大本とおなじである。

袋綴じで十三枚（二十六頁）あり、ノンブルはない。東北大本は状態が悪く、虫食いが多い。全体の印象は、『海表叢書』巻二の底本である京大本とほぼ同じである。



写本「喝蘭演戯記」
（東北大学附属図書館蔵）

(6) 「和蘭戯場」（東京大学史料編纂所蔵）

これは史料編纂所の写本（26.7cm×20cm、厚さ約1cm）であるが、題簽には「和蘭戯場　鉅鹿由緒書　長崎紀事　通詞書上」とある。七十一葉［一四二頁］、奥付に「草場氏書　中茸之儀申上覚」「東京市本郷区西片町十番地中山久四郎氏所蔵　昭和十三年四月写了」とある。

冒頭に、

和蘭戯場

文政三年庚辰九月廿四　阿蘭陀俄芝居　於長崎

出嶋興行狂言仕立　大帳貳冊

とある。芝居の筋書を記する前にヨーロッパ演劇の概略についてのべている。

芝居の筋書は、「二人猟師乳汁売娘」「性急者」の順で載せられている。筋書を謄写したのは「月洲老人」（不詳）であり、文政四年（一八二一）冬ごろと推定されている。[33]

(7) 「和蘭戯芸」貳人猟師乳汁売娘　（早稲田大学中央図書館蔵）

阿蘭陀原本添

榕庵蔵」

これは宇田川榕庵（一七九八～一八四六、江戸後期の蘭学者）みずからが謄写した写本である。

オレンジ色の新しい表紙に、〝秋艸道人〟こと会津八一（一八八一～一九五六、大正から昭和期にかけての歌人、書家、美術史家）が筆をとって書いた題簽が張ってあり、それには「宇田川榕庵自筆 貳人猟師乳汁売娘」とある。

この写本（23.3 cm×16.4 cm、厚さ約0.7 cm、十二葉［二四頁］）に収められているのは、「貳人猟師乳汁売娘」の一篇だけである。文字に乱れなく、みごとな筆使いで浄書されている。

この写本の大きな特色は、芝居の筋書の原文の一部（フィリップ・フレドリック・レインスラーヘルのオランダ語訳）が、別冊としてあることである。オレンジ色の新しい表紙に、これも会津八一の筆によって「宇田川榕庵自筆 貳人猟師乳汁売娘　蘭語原本」（題簽）と書かれているものがそれである。写本の大きさは、23.3 cm×16.3 cm、厚さ約0.6 cmである。十六葉［三二頁］あり、宇田川は筆記体を用いて九幕ある原文を途中の四幕（Vierde tooneel）まで写し取っている。

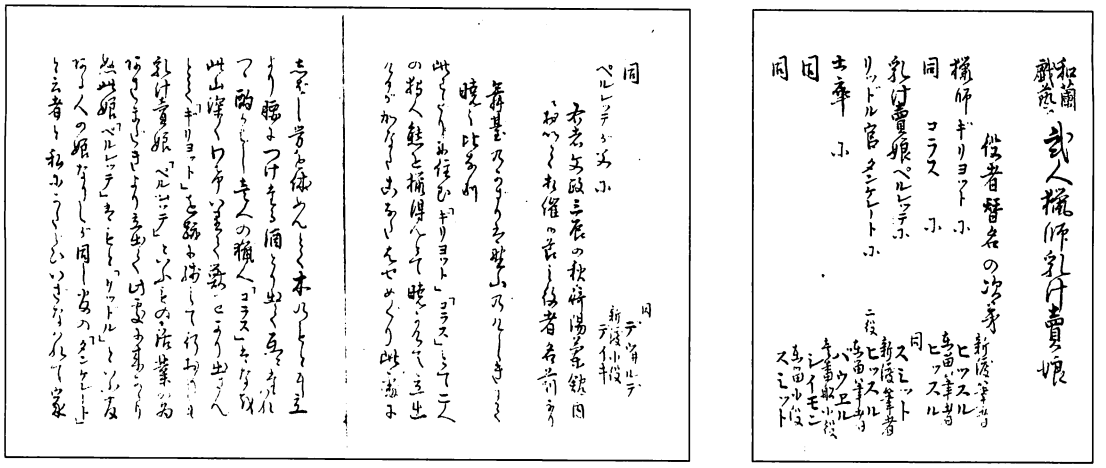
帙の中に入っている「解説文」（横長のカード状のもの。昭和二十八年の早稲田大学図書館の開国百年記念洋学展覧会を開催した際に作ったもの）には、これら二冊の宇田川の稿本について、つぎのようにある。

> 右二冊は文政三年秋、長崎奉行筒井政憲が江戸町奉行に栄転の際、出島蘭館で催された送別の宴におけるオペレッタの筋書とその原文の写し。原本はP. P. Iynslager（ママ）の作で一七八三年のアムステル版。このときの芝居の筋書は数種現存しているが、本写本の文句は他のものと異っている。

「本写本の文句は他のものと異っている」とは、何と比較して異なっているのか、何らふれられていない。が、宇田川の「貳人猟師乳汁売娘」の写本といちばん酷似しているのは、「和蘭戯芸詞　全」（内閣文庫蔵や川原慶賀の「阿蘭陀芝居図巻」の詞書）である。

「貳人猟師乳汁売娘」の筋書においては、ふつう役柄・役者名のあとに、「舞台は山野の暁の体」（「喝蘭演戯記」『海表叢書』巻二、南葵文庫蔵）とか、「舞台ノ飾リハ野山ノケシキニテ暁ノ頃ヨリ此ワタリ住ム……」（「和蘭戯芸詞　全」（内閣文庫蔵）、「舞台の飾りは野山のけしきにて暁の頃なり」（川原慶賀の「阿蘭陀芝居図巻」黒船館蔵）の文章が来るのだが、宇田川本だけは、役柄・役者名のあとに、「右者文政三辰の秋崎陽蘭館内において催の芸人役者名前なり」の一文が添えられている。この文章は他の写本において見られぬものである。

いま例挙した(1)から(7)までの筋書は、それぞれ特色を有しているが、いちばん原文に近いものとなると少ないようだ。(3)(4)(7)や「資料」とし



宇田川榕庵が謄写した「和蘭戯蕊　貳人猟師乳汁売」
（早稲田大学中央図書館蔵）

て本稿の末尾に添えた、川原慶賀の「阿蘭陀芝居図巻」の「詞書」などは、最ももとの文章に近いものと思われる。

芝居の筋書の入手ルート。

長崎奉行・筒井和泉守政憲の命をうけて通詞が訳した戯曲の筋書は、こんにちさまざまの形で残っているが、それを謄写した者は、どこでそれに接したのであろうか。筋書と出くわした時期、その入手経路となると分らぬことが多い。

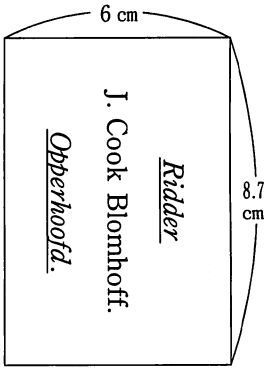
宇田川榕庵の場合は、父玄真（宇田川榛斎）［一七六九～一八三四］、江戸後期の蘭方医）がブロンホフをはじめ出島の館員らと江戸において交流があったから、「その辺の縁で原文と訳文を入手した」[34]と考えられている。また江戸にもどった筒井やその部下（たとえば公用人）らも芝居をじっさい観ているから、このあたりも出所の一つであったと考えられる。

九　オランダ芝居に関係ある蘭人の名刺

先頃、今泉源吉著『蘭学の家　桂川の人々［続篇］――日本洋楽研究［二］』（篠崎書林、昭和43・6）をひもといたら、文政三年のオランダ芝居についての短い記事につづいて、桂川甫賢（一七九七～一八四四、江戸後期の蘭方医、幕府の医官）に送られたオランダ人による手製の名刺九枚についてのエピソードが綴られていた（「二　甫賢に送られた蘭人名刺」一五一～一五六頁）。

これらの名刺は、オランダ芝居に関係あるものと思われている。つぎに揚げるものは、同書から抜いた名刺とその特徴である。

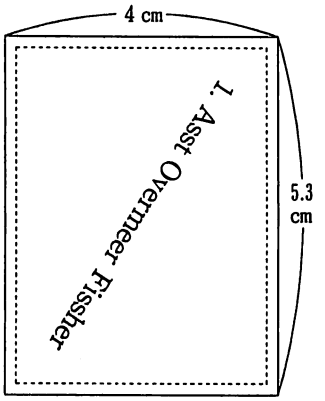
(1)



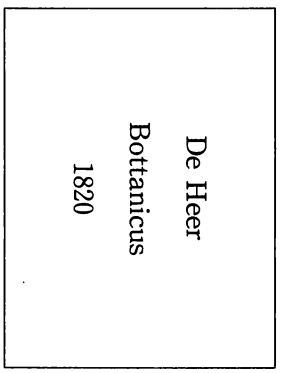
中央のJ. Cook Bloomhoffの文字だけは印刷されたものらしく、Ridder（勲爵士）とOpperhoofd（商館長）は白地の厚い紙にインクで書き込んだもの。

(2)

（おもて）

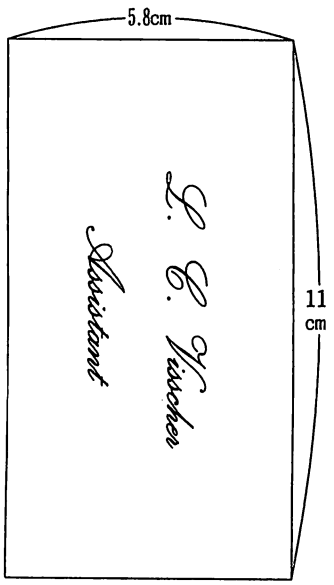


（うら）



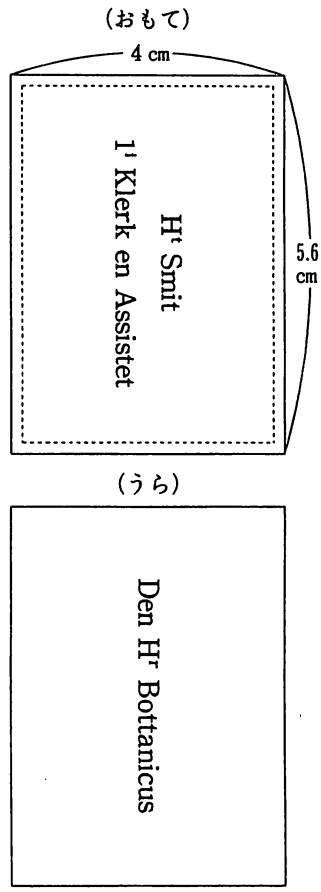
これは芝居の立役者新渡ヒッスル、第一助手のF. Overmeer Fisscherの名刺であり、うらに「ボタニクス氏（甫賢のこと）に、一八二〇年」とインクで書き込んだもの。白地の半紙で縁には金箔が塗ってあるという。

(3)



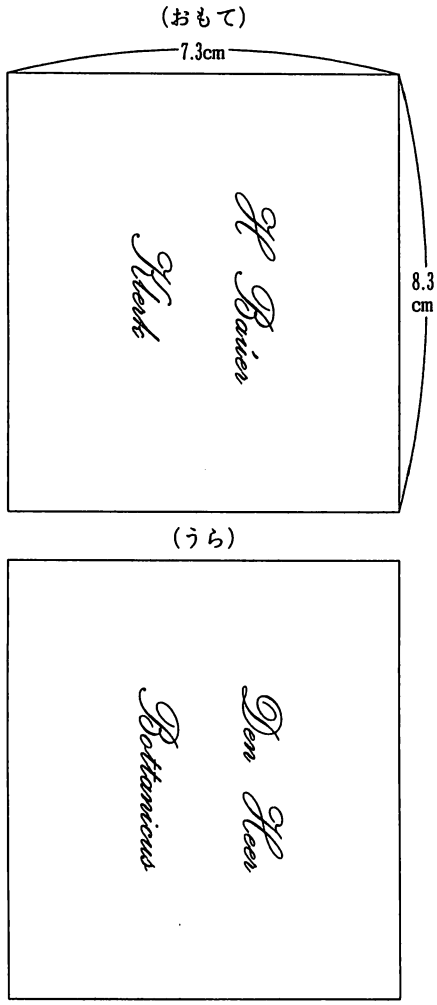
助手のL・C・フィッセルの名刺。分厚い洋紙を切って、インクを用いて草書体で書いたものという。

(4)



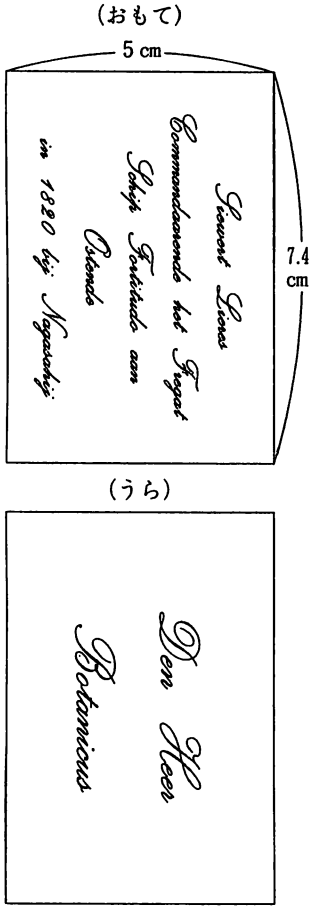
書記兼助手のヘルマヌス・スミットの名刺。同人はボルカンプの娘ユリアを演じた。一センチの分厚い白い洋紙に書いたもので、縁が金箔で塗られているという。

(5)



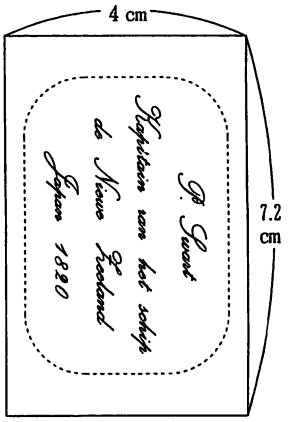
書記フレデリック・クレメンス・バウエルの名刺。同人はダアモンの下男フロンティンを演じた。薄い洋紙を切って、インキで細く草書体で書いたもの。

(6)



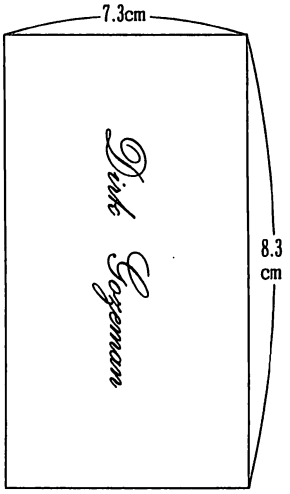
長崎湾に停泊中であった、ベルギーオステンドの快速艦フォルティチュード号の艦長シーウェルト・リーフェスの名刺。同人は出島でオランダ芝居を観た。薄い洋紙の二枚重ねに、インキを用いて細く草書体で書いたもの。

(7)



フォルティチュード号と同じように、オランダ傭船としてニュージーランドの船（船名はニューウエ・ゼーリュストが長崎湾に停泊中であったが、これはP・スワルト船長の名刺である。薄い白い洋紙の二枚重ね、中央に楕円形の枠があり、その中にインキで細く草書体で書いたもの。

(8)



これはオランダ商館の簿記役ディルク・ホゼマンの名刺である。同人は、文化五年八月十五日（一八〇八・一〇・四）イギリス艦フェートン号が長崎湾に闖入したとき、商艦長ドゥーフの命をうけて、助役ヘリット・シンメルとともに同艦を訪れた際に拉致されたことがあった。この名刺は、ホゼマンが江戸参府の折、桂川家のだれかに渡したものらしい。

(9) 不明オランダ人の名刺（4.2 cm×6.8 cm）がもう一枚あるというが、インキが薄れて判読できないという。

これらの名刺は、桂川家の遺品の中にあるものだが、(1)から(7)までは、文政三年秋に出島において上演されたオランダ芝居の関係者のものであり、長崎奉行・筒井和泉守政憲が帰府のおり、友人の桂川甫賢に対するあいさつとして[35]、オランダ人たちから託されたものと考えられている。

筒井は江戸に帰るや、七枚の名刺を甫賢に手渡したものであろう。どういうわけか、これまでオランダ芝居と甫賢に送られた蘭人名刺との関係にどの研究者は注目しなかったから、この機会に注意を喚起しておきたい。

商館長ヤン・コック・ブロンホフは、出島で芝居が上演されて約二年後の文政五年正月十五日（一八二二・二・六）、書記ヤン・オーフェルメール・フィッセル、医師ニコラース・テューリンクなどを伴い参府の途につき、同年二月五日（三・二七）の午後四時半ごろ江戸の旅宿「長崎屋源左衛門方（日本橋本石町三丁目）に到着した。

このとき検使を従えたもと長崎奉行の間宮築前守信興の儀式的訪問をうけ、ついで内輪の客である蘭学者らの訪問をうけた。その中には、先年

出島のオランダ人たちから、あいさつ代りに名刺をもらった桂川甫賢（蘭名は〝ボタニクス〟Botanicus、これはドゥーフからもらった名前）もいた。

われわれの仲間のうちの主な者は、上に記した小通詞（馬場）佐十郎、医師桂川また通称ボタニクス、（大槻）玄沢、宇田川（玄真、榕庵の養父――引用者）、（湊）長安およびグロビウスという雅号をもつ幕府天文方（高橋作左衛門景保、のちシーボルト事件に連座――引用者）であった。これらの人たちはすべてオランダ語を解し、そしてまた毎日一、二の問題について説明を求めるためにやって来たのである。

（『庄司三男（フィッセル）著　沼田次郎訳注　日本風俗備考2』東洋文庫、平凡社、二二八頁）

晩年のブロンホフの肖像（50歳代）▶

ビルクホーフェンにあった
ブロンホフの別荘の写真。
［アーメルスフォールトの文書館蔵］

あとがき

麻生義輝の遺稿『近世日本哲学史』（近藤書店、昭和17・7）を繙いたことがきっかけとなって、オランダ芝居とそれを描いた日本絵師・川原慶賀の絵巻について興味を覚え、いろいろ原物に当たって調査し、まとめたのが本稿である。もっとも文政三年（一八二〇）に出島において上演されたオランダ芝居とその粗筋については、幕末のわが国の知識人にすでに知られていたし、これまでに数多の研究者がいろいろ小論を発表している。とりわけオランダ芝居の材源に関する最新の、内容的にももっともすぐれた研究は、平成十三年（二〇〇一）一月に行なわれた中央大学文学部の中村洪介教授の最終講義「文政三年出島上演の阿蘭陀芝居二題」（のち『中央大学論集』第23号所収―二〇〇二年三月刊）である。

同氏は最終講義をおえ、研究室の整理をしていた最中に、にわかに亡くなった。享年七十歳であった。氏は日本人の西洋音楽の受容史に早くから関心をもち、その関連から十数年前ごろから、オランダ芝居に注目し、その基（もと）の台本を捜索し、近年ついに原作のすべてを発見するに至った。

氏は出島で上演された二つの芝居の原作とオランダ語訳、日本側の筋書などを比べてみた結果、

江戸・長崎屋（オランダ人の旅宿）二階の図。
この図は永見徳太郎のコレクション中にあったもの。
（『文明協会ニュース—日本と世界』第161号所収、昭和15・3）。

「オランダ語訳をそのまま上演したのではなくて、出島のオランダ商館員が手を加えた形跡大である」（『中央大学論集』第23号）ことを知った。

わたしは同氏のコラム「文政三年のフランス・オペラ」（『春秋』No.305）によって、慶応義塾大学付属図書館に、喜歌劇「二人猟師渾売娘」の原本の一つ——Louis Anseaume 作 "*Les deux Chasseurs et la Laitière*, Duchesne, Paris, 1766" が貴重本として架蔵されていることを知り、早速その複写を依頼し、先ごろついにそれを入手した。「資料二」として、本稿に原文の一部を、また「資料三」として、訳文（大意）を添えたものがそれである。

原書は、両表紙が欠けており、裸同然の小冊子（19.3 cm×12 cm、一から三十五頁まで本文、三十六から五十六頁までオペラの楽譜が付いている）である。

この喜歌劇の粗筋は、つぎのようなものである。登場人物は——貧しい農夫であるギョとコラ、ミルク売りの娘ペルレット——の三名だけである。

ギョとコラは猟師でもあるのだが、小づかいかせぎに熊を獲りに出かける。二人は熊を待ち伏せしていたとき、市場へむかうミルク売りの娘ペルレットと出会う。ギョは相棒のコラが熊をさがしに出かけるや、甘言を用いてペルレットをろうらくしようとし、しまいには女房になってくれないかという。が、相手は密猟者の妻になりたくない、といって取り合わない。

ギョは熊の皮が売れると大金が入るが、お前さんは金をもうける手段として何をもっているか、とペルレットに尋ねる。すると彼女は、ミルクを売ったお金で卵を買い、その卵をかえして雛にし、その雛鳥をたくさん育て、その鳥を売って雌羊を買い、羊の群れをつくり、その群の中に馬や牛なども加え、やがて金持になるのだ、という。そういうと、娘はミルクの入った壺を頭にのせて立ち去る。

ギョとコラは、熊を獲りに出かけるや、熊とばったりと出会う。ギョは直ちに木によじ登るが、コラは地面にすぐ身を伏せると、死んだふりをする。熊はコラをこずき回し、ギョがいる木の根元をかぎまわったのち去ってゆく。

ギョは銃を手にし熊狩りに出かけ、一方コラは木の上にのぼる。ペルレットはミルクが入った壺をこわしてしまい、金もうけのすべをなくし悲嘆にくれる。他方、ギョも熊狩りに失敗すると、これぎり狩りをよそうと思う。

芝居のさいごは、人間高望みには裏切られるということ、とらぬ狸の皮算用をせず、あぶなげがないのが一番といった教訓でおわっている。この喜歌劇の締めくくりは、オランダ語訳でも同じであるという。[36]

ところが、出島で行なった芝居では、この物語に続きがある。

ミルク売りの娘は、身の不運をなげき、歌をうたいながら、昔の恋人タンケレートのペンダントを見つめ、過去の想い出にひたっているうちに、草むらの上で寝入ってしまう。そこへ士卒を連れてペルレットさがしにやって来たタンケレートによって偶然発見される。

折から狩人のコラとともに賤しからぬ老人（じつはペルレットの父）が通りかかるが、老人はペルレットの姿を見るなり、走りよってその身体を起そうとする。娘はタンケレートを見るなり、夢かとばかり大いに驚き、ことばなくただ涙を流す。かつてペルレットを捨てたタンケレートは、彼女の父親にこれまでの過ちをわび、そのゆるしと結婚の許可を請うと、父はこれまでの罪をゆるし、二人の婚姻をゆるしてやる。かくしてペルレットとタンケレートは、めでたく婚約し、物語はハピーエンドでおわる。

出島で上演されたこの芝居は、もとの台本を少し書き替えた改作物であったといえる。[37] オランダ側が、長崎奉行から江戸町奉行に転任する筒井和泉守政憲や筒井の長崎着任後、江戸からやって来た間宮筑前守信與ら両名を招いて、素人芝居をみせたには理由がある。

出島は文化六年（一八〇九）から同十四年（一八一七）までの九ヵ年、ヨーロッパ動乱の余波をうけて蘭船の入港なく、商館長ドゥーフおよび館員はこの間窮乏生活を強いられていた。一八一五年（文化十二年）六月、ナポレオンはワーテルローの戦で大敗し、セント・ヘレナ島に流刑になったのち、ヨーロッパに平和が訪れた。文化十四年（一八一七）七月、新たに出島の商館長としてヤン・コック・ブロンホフが来日すると、ドゥーフと交代した。

ブロンホフは着任後、日蘭貿易が途絶していた空白期間中の損失をうめ足す必要を痛感した。オランダ側がいちばん欲していたのは銅（竿銅）である。筒井が長崎に着任したのは、ブロンホフが来日した文化十四年十月のことであるが、幕府は文政元年（一八一八）から同三年（一八二〇）まで、毎年輸出銅の増額（定額三〇万斤を九〇万斤）を認めた。文政三年十月、筒井は任期みちて間宮と交代して帰府する折、オランダ側は筒井らの厚意に感謝する意味で素人芝居をみせたのである。

《因終請訊政、稟令、増其銅、年百十万斤、而蘭人之欣可知也……》（写本「喝蘭演戯記」にみられる筒井の跋文より）。

さいごに説くべきは、オランダ芝居がもつ文化史的な意義である。当時これら二つの芝居をじっさい観た日本人（役人、長崎奉行、町役人、通

詞ら）は、それが西洋（オランダ）芝居であることは分かっていたとしても、原作がじっさいフランスで創られた喜歌劇（opérette）であったとは夢にもおもわなかったことであろう。これらの芝居が、日本人から請われて一度ならず何度も上演されたということは、かれらが並々ならぬ関心を西洋芝居に寄せていたことの現れでもあるが、果たして当時の日本人に西洋の芝居や音楽を味解する能力があったかどうかといった点になると疑問も残る。

けれど当時芝居をじっさい観る機会にめぐまれず、後に芝居のことを人づてに聞き、その筋書を関係者から借りて筆写した知識人がいたということは、日本人が西洋文化の吸収にすこぶる熱心であったことの一つの証でもある。

文政三年（一八二〇）は、日本の演劇史上はじめてオランダ語を通じて、フランスの喜歌劇がわが国に伝わった画期的な年であり、このことは本稿において引いた内外の文献史料によって明らかになったはずである。

本稿を草するにあたり、アーメルスフォールトの文書館、財団法人「黒船館」（新潟県柏崎市大字青海川）、早稲田大学中央図書館、慶応義塾大学付属図書館、国立公文書館、東京大学史料編纂所、東北大学付属図書館、京都大学付属図書館などより貴重史料の閲覧および複写についてご配慮をえた、記してお礼を申しあげたい。また［資料 三］に添えた、フランス語の台本の日本語訳は、加太宏邦教授に目を通していただき、誤りの訂正をうけた。厚くお礼を申しあげます。

注

（1）麻生義輝（一九〇一～一九三八、アナーキスト、哲学者）は、大分県に生まれ、第七高等学校を経て、東京帝国大学文学部で美学を修めた。学生のときから身元をかくし、貧しい人々の生活の向上に努める社会運動に従事するかたわら、芸術批評、マルクス主義文学、日本哲学思想史の研究に従い多くの論文や訳書を残した。夭逝したのがおしまれる（『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍株式会社、昭和五十七年九月）。

（2）わが国で初めて上演された西洋芝居については諸説があるものの、まだ定かでなく、学問的にも証明されていない。明治十八年（一八八五）五月十六日に、大阪道頓堀の戎座において上演された「何桜彼桜銭世中」（シェイクスピアの『ベニスの商人』を歌舞伎化したもの）などは、最も古いものの一つである。

しかし、江戸時代にシェイクスピアの作品の筋なりエピソードが酷似した作品が上演されている。それは(1)近松門左衛門の「釈迦如来誕生会」（釈迦の伝記を浄瑠璃にしたもの、元禄八年（一六九五）四月八日に大阪の竹本座で初演）であったり、(2)近松半二（一七二五～八三、江戸中期・後期の

浄瑠璃作者）の「妹背山婦女庭訓」（曾我入鹿の横暴による悲恋劇、明和八年［一七七一］、大坂の竹本座で初演）、(3)四代目鶴屋南北（一七五五～一八二九、江戸中期の歌舞伎作者）が二代目桜田治助（一七六八～一八二九、歌舞伎作者）との合作脚本「心謎解色糸」（世話狂言、文化七年［一八一〇］正月、江戸の市村座で初演）などがある。

(1)はシェイクスピアの『ベニスの商人』と同じ材料を使っている、といい、眼目は第三段目の第二場――三の切であり、罪の償いに人肉を切り取るといったテーマまたは情況が『ベニスの商人』と共通しているという。(ニ) (2)は大和時代、蘇我入鹿（？～六四五、政治家）と中臣鎌足（六一四～六九、政治家）との政争について説話をテーマとし、久しく不和になっていた両家の一人息子（久我之助）と一人娘（雛鳥）の悲恋が、ロミオとジュリエットに該当するという。(ホ)

(3)において『ロメオとジュリエット』に似ているのは、その二幕目と三幕目――すなわち、本町の糸屋中根屋の場と大通寺墓所の場であり、(ヘ) 毒薬を用いて仮死して墓場に送られ、恋人が対面するという構想が(ト)シェイクスピアを想い出させるものである。

いずれにしても当時、作者らがどこから筋の材源を得たのかわからぬことが多い。もしシェイクスピアからの影響なり波動があるとしたら、出島のオランダ人が発信源（出所）と考えられる。(チ)

(イ) 河竹繁俊『日本演劇文化史話』（新樹社、昭和三十九年十一月）、三三四頁。

(ロ) 伊原青々園「日本に於ける沙翁劇」（『早稲田文学』第一二五号所収、一三七頁）。

(ハ) 『大南北全集　第三巻』（春陽堂、大正十四年三月）、一二頁。

(ニ) 注(1)の三三五頁。

(ホ) 注(1)の三三七頁。

(ヘ) 『国立劇場上演資料集〈94〉心謎解色絲』（国立劇場調査養成部芸能調査室、昭和四十八年六月）、三六頁。

(ト) 竹村覚『日本英学発達史』（研究社、昭和八年九月）、二〇〇頁。

(3) 町絵師　川原慶賀の伝記については分らぬことが多い。生没年もはっきりしないが、天明六年（一七八六）の生れであるらしく、父香山も絵事を善くしたという（古賀十二郎『長崎絵画全史』北光書房、昭和19・8）。通称「登与助」といい、諱は種美、号は聴月楼といった。はじめ氏を川原といい、のち田口に変えた（永見徳太郎「川原慶賀に就て（上）」（『国華』六八七号、昭和24・6）。

文政六年（一八二三）八月、出島の医官シーボルトが来日すると、今下町に住む慶賀は、その画業をシーボルトに見出され、出島出入りの絵師となるのだが、かれは写生に長じ動・植物、人物、風俗、肖像、風景画などを描いた。来舶のオランダ人の中には慶賀の絵を求める者が多かったという（黒田源次『長崎系洋画』創元社、昭和7・4）。同九年（一八二六）正月、シーボルトとともに江戸参府に従い、シーボルトが採取した植物を写生し

たり、各地の風俗風景などを描いたり、地図、地形図を作成した（林　源吉「町絵師　慶賀」（『長崎談叢』第十一号所収、昭和7・12）。

文政十一年（一八二八）八月九日の夜から翌十日の夕刻まで、長崎を襲った台風は出島の諸所を破壊したばかりか（「甲子夜話」「増補長崎略史年表」）、シーボルトの荷を積んだ船が稲佐の海岸に打ち寄せられ、このとき国禁品（葵紋服、日本地図など）の数々が露見した。任期満ちて帰国寸前のシーボルトは帰国を禁じられた（「シーボルト事件」）。慶賀はこのとき事件に連座し処罰された。参府のとき、シーボルトのために「薬草絵図」などを描いたことが糾弾され、同年十二月末に入牢し、翌十二年正月末に出牢し、町預けとなった（「長崎奉行所犯科帳［第百七冊］」）。

謹慎中の慶賀は絵筆をやすめず、相変らず作画に従事していたが、西役所を写し、港内警備を担当していた細川藩、鍋島藩の番船の幕にその紋章を描いたために天保十三年（一八四二）九月預を命じられ、のち手鎖預り、十一月には江戸・長崎払を申し渡された。その後、慶賀は故郷を離れ他郷に身を置かざるえなくなった。が、いつの頃かふたたび故郷に舞いもどり、酒屋町四十七番地に住し、名を田口と変えた。

弘化のころ（一八四〇年代）、慶賀の子・登七郎（号は〝盧谷〟、嫁のおとしは江戸生まれ）は、今下町で版画や銅版画を作り、これを売り出していたらしい。万延元年（一八六〇）に慶賀は七十五歳であったことはたしかであるが、その後亡くなったものらしい。が、没年月日、法号、墓石もわかっていない。

いずれにせよ、慶賀はじつに見事な数々の細密画を描いたが、シーボルトはその巧みなる力量を高く評価していた。「かれの絵画数百は余の著書（『日本』――引用者）の中に掲げられて彼の功績を語るなり」（呉秀三『シーボルト先生　その生涯及び功業　3』東洋文庫、昭和52・2）。

(4) 泥絵とは泥絵具（ふつう画家は用いない。きわめて粗悪な絵の具を水に溶き、泥状にして使う。色彩は不透明でにごっている）を用いて描いた絵のことをいうが、もとは「胡粉絵」ともいった。本物の泥絵とは、昔の芝居の画き割、地獄や極楽の見世物の絵、のぞき眼鏡の絵などに見るものである。その描き方は、まず胡粉（貝がらを焼いて作った白色の顔料）（えのぐ）で下地をし、その上に藍・黄・赤といった従来画描きが用いてきた絵の具を塗って画にする（出井朱有「川原慶賀筆泥絵芝居絵巻　附川原慶賀・泥絵考」（『日本美術工芸』第二五六号所収、昭和35・1）。

しかし、ふしぎに思われるのは、なぜ川原慶賀は粗悪な絵の具を使ってまで芝居絵を画く必要があったかということである。

(5) 古賀十二郎『長崎絵画全史』（北光書房、昭和十九年八月）、一九六頁。

(6) 岡　泰正「オランダ所蔵の出島俄芝居図をめぐって」（『日蘭学会会誌』第十八巻第二号所収）。

(7) 永見徳太郎「川原慶賀に就て（上）」（『国華』六八七号、昭和24・6）、一一一頁。

(8) 永見徳太郎（長崎で倉庫業をいとなむ）は、この絵巻を手に入れることができたことをよほどうれしかったものか、「私は最近、絶望だと思って居たこの阿蘭陀芝居の巻物を入手して雀躍している。ライデン大学教授ドクトル・ラーデル氏は、世界唯一と激賞して下さったのである」と述べている（永見徳太郎「長崎秘実阿蘭陀芝居」（『人情地理』昭和8・3所収）

(9) 神戸市立博物館編『南蛮堂コレクションと池長孟』(神戸市立博物館、平成15・7)、七二頁。
(10) 注(7)におなじ。
(11) 注(5)の一九五頁。
(12) 『長崎オランダ商館日記　九　自一八二〇年度至一八二二年度』(雄松堂出版、平成十年五月)、三一頁。
(13) 『文政武鑑4』(柏書房)や『江戸町鑑集成第二巻』(東京堂出版)によると、筒井和泉守政憲は、帰府ののち南町奉行となり、扶持高は三千石であった。
(14) 「嗚蘭演戯記」(『海表叢書』巻二所収、更生閣書店、昭和三年一月)、一七頁。
(15) 『長崎オランダ商館日記　八　自一八一九年度至一八二〇年度』(雄松堂出版、平成九年三月)、三二〇頁。
(16) 注(15)の三二〇〜三二一頁。
(17) 注(12)の二〇〜二一頁。
(18) 家老二人とは、公用人のことか。
(19) 文政年間(一八二〇年代)に、フィッシャーJ. F. van Overmeer Fisscher(一八二〇〜二四年、第一次来日)が商館長ブロンホフの命により描いた出島図(紙本、ペン書20.0cm×40.0cm、レイデンの国立民族学博物館蔵)によると、ほぼT字形をしていたことがわかる(『出島図——その景観と変遷』中央公論美術出版、昭和六十二年三月)、一三九頁。
(20) 『新百家説林』蜀山人全集　巻五』(吉川弘文館、明治四十一年八月)、三六三〜三六四頁。
(21) 中村洪介教授の最終講義『文政三年出島上演の阿蘭陀芝居二題』(『中央大学論集』第23号所収——二〇〇二年三月刊)。
(22) 同右。
(23) ルイ・アンソームはフランスの劇作家。一七二一年パリに生まれ、一七八四年七月十七日同地で死亡。コメディ=イタリエンヌ座のために数多のオペラの台本をつくった。(*La Grande Encyelopédie*, tome troisième, Lamirault et Cie, Éditeurs, Paris, p.125)
(24) 中村洪介「文政三年のフランス・オペラ」(『春秋』No.305所収、春秋社、平成元年一月)、九頁。なお、E. R. Duniは一七〇九年二月九日イタリアのマテラで生まれ、一七七五年六月十四日パリで死亡。
(25) 注(21)におなじ。
(26) 注(24)を参照。
(27) 小笠原幹夫「文政五年の翻訳劇——宇田川榕庵の和蘭戯曲」(『文芸と批評』第七巻第五号所収、文芸と批評の会、平成四年四月)、二四頁。

(28) 注（12）の三四九頁、「あとがき」を参照。

(29) 『崎陽群談』（近藤出版社、昭和四十九年十二月）、五七～五九頁。

(30) 「伝　川原慶賀「長崎出島之図」『出島図――その景観と変遷』所収（中央公論美術出版、昭和六十二年三月）、一六〇頁。

(31) 伊藤熹朔（きさく）『舞台装置の研究』（小山書店、昭和二十四年四月）、一五七頁。

(32) 『長崎市史　風俗編下巻』（長崎市役所、大正十四年十一月）、二八〇頁。

(33) 沼田次郎「出島の阿蘭陀俄芝居」（『日本歴史』一九八六年一月号所収、吉川弘文館）、一一〇頁。

(34) 注（32）の一一一頁。

(35) 注（32）におなじ。

(36) 今泉源吉『蘭学の家　桂川の人々［続篇］――日本洋学史研究［二］』（篠崎書林、昭和四十三年六月）、一五二頁。

(37) 注（21）を参照。

［参考文献］

古賀十二郎「阿蘭芝居」（『長崎市史　風俗編下巻』所収、長崎市役所、大正14・11）

永見徳太郎「長崎秘実　阿蘭陀芝居」（『人情地理』昭和8・3）

沼田次郎「阿蘭陀狂言」（『日本歴史』第四一号所収、昭和26・10）

今泉源吉『蘭学の家　桂川の人々［続篇］――日本洋学史研究［二］』（篠崎書林、昭和43・6）

沼田次郎「出島の阿蘭陀芝居」（『日本歴史』第四五二号、昭和61・1）

中村洪介「文政三年のフランス・オペラ」（『春秋』No.305所収、春秋社、平成元・1）、「文政三年出島上演の阿蘭陀芝居二題」（『中央大学論集』第23号、平成14・3）。

石田純郎「文政三年に出島で演じられた小唄入喜劇『二人の猟師と乳売り娘』について」（『日蘭学会会誌』第一六巻第二号、平成4・3）

小笠原幹夫「文政五年の翻訳劇―宇田川榕庵の和蘭戯曲」（『文芸と批評』第七巻第五号、平成4・4）

沼田次郎「再び『出島の阿蘭陀俄芝居』について」（『日本歴史』平成5・7）

岡　泰正「オランダ所蔵の出島俄芝居図をめぐって」（『日蘭学会会誌』第一八巻第二号、平成6・3）

磯崎康彦「出島絵師川原慶賀の『和蘭陀芝居図巻』と『出島俄芝居図』」（福島大学『教養学部論集　人文科学部門』第六〇号、平成8・6）

〔資料一〕

つぎに資料として揚げるものは、川原慶賀筆「阿蘭陀芝居巻」の詞書――原文（毛筆墨書）である。原文にはほとんど改行がないため、読みやすくするため段落を多くし、語と語とのあいだを開き、かつ漢字にはルビをふった。また（　）内は理解の一助とするための注である。

性急者*

幕の図解

左右に画きし旗に書たる文字は

出島において　我一と狂言の芸を競ひ　戯場

かまへ　アボルロー（狂言の神の名）に奉納す　といふ意の詩なり

正面の上にある文字ハ

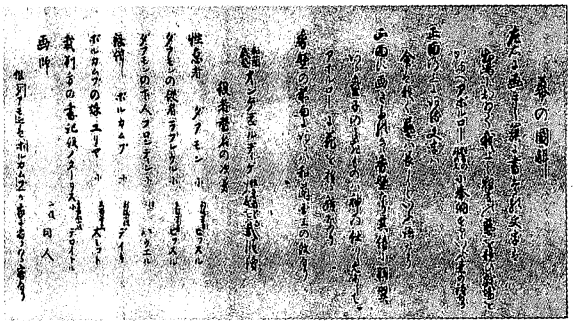
命は短く　芸ハ長し　といふ語なり

正面に画きたるは香盤なり　其傍に羽翼

ある童子（子供）のごときものハ　神の仕ハしめ（使者）にして

アボルローに花を捧る躰なり

香盤の前面にあるハ　和蘭国王の紋なり



川原慶賀筆「阿蘭陀芝居巻」（「黒船館」蔵）の詞書。

和蘭戯芸　オンゲデュルディゲ性急者といふ義也　弐段続

役者替名の次第

性急者　ダアモン　に　新渡筆者(1)　ヒッスル
ダアモンの従者　ラフレウル　に　在留筆者　ヒッスル
ダアモンの下人　フロンティン　に　同　ハウエル
銀借し　ボルカムプ　に　新渡小役　デイキ
ボルカムプの娘　ユリヤ　に　在留筆者(2)　スミット
裁判方の書記役　ノターリス　に　壱番船小役　デロイトル
画師　二役　同人

但「ダアモン」は「ボルカムプ」が家に宿りたる客なり

舞台は飾付ケ図のごとく正面に開らき戸ありて
両方に椅子を一脚ツヽならべ少し前のかたの
画ふすまハ　硝子障子より庭木の透て見ゆるに
ゴルディン帳の如き（gordijn カーテン、緞帳の意）を　かたがたへ（あちこちに）　引しぼりたる窓の様をえがき
幕の際より　少しさがりて　右の方のふすまにハ画鏡（絵画）を
かけ　書机をすえ　上にハ　墨筆などならべ　左の方のふすま
には姿見の硝子鏡をかけ　前には手箱のやうのものを

のせたる机をすえたり　すべて此所は銀かし「ボルカンプ」
か家の趣なり

但幕は上に引きしぼるやうになせり　且鈴をふりて
まくのあけおろしをしらす　こゝ（わが国）の戯場にて
拍子木もてしらするに同し

性急者「ダアモン」の従者「ラフレウル」は　手におのが帽子をぬき取　かた手には　主人「ダアモン」の剣を持て　左の方よりたち出る　ひらき戸　あら〳〵しく押しあけて　性急者「ダアモン」出来り　従者か持たる剣を取て腰におび　「コーヒー」茶のごとく飲もの也　をとり来れ（持ってまいれ）　と言付けハ　従者ハ奥のかた（方）に入る　跡ハ「ダアモン」ただひとり　此家の娘「ユリヤ」をば　いかにもして手に入れんと　思案にくれて居たる折しも　従者が持出たる「コーヒー」を飲んとて　取あぐるに　殊の外あつかりしに　例の性急たちまち怒り　「コーヒー」茶わんを打砕き　何事にも　心きかさるものかな　とのゝしるにて　従者の「ラフレウル」はひたもの（むやみと）恐れおのゝきて　あハてふためく斗也

「ダアモン」は怒をしづめ　汝「ユリヤ」か部屋に行て　障ること（さしさわり）なきならは対面せん　いざとく（さあ、よく）尋ね来るへしと言付られて　従者は「ユリヤ」か部屋へ行く

「ダアモン」ハ　娘の返事いかにそと待居たれとも　かゝる性急の者なれは　しばしもまたで（少しも待たないで）　自ら娘か部屋にゆく　障ることありけるにや　すご　すご　すごと（失望して、元気なく）立ちもどり　ひとりつぶやき　腹立てて居たりける

かくて開戸おしあけ　娘「ユリヤ」立出るを見るより（見るとすぐ）「ダアモン」打よろこび[3]　何がな事よせ（何かにかこつけて）「ユリヤ」か側に立ならひ忍ぶ心（秘たる恋）をうちつけに（だしぬけに）いゝ知らすれとも　兎角に娘はいらへ（返事）もせざりしか　つくづく思ひ廻らせハ　此の「ダアモン」こそ　此地にハ　重き役目を勤居る親族もあるなれは　我が父「ボルカムプ」か　此度の訴へ事の　執なしをたのまバやと思ひかへし　いなにハ　あらぬおもゝち（意外な顔付）にて「ダアモン」に　打向ひ　此程（このごろ）　我父おほやけに訴事ありて　朝

夕心をいため給へるにより　此事よ丈に（とくに）とりなし給ハ、　其上にてハ　いかにもて　父か手前を　取繕ひ　仰にしたかひまいらすへしといふにそ

「ダアモン」は嬉しさ　いはんかたなく（いいようがない）　此ひとわたりの事（この事を一応）取なす上は　娘「ユリヤは」心の儘　すくさま此事はからんと事の始末（しだい）も　聞とめす　かろがろしく（気楽に）立出るを　娘「ユリヤ」は　引とどめ　兎にもかくにも　此事をひとまつ父にもしらせし上　訴事のもとすえを　つばらに（始めと終りをくわしく）問ハせ給ひてより　ときに取成給ひねと　奥のかたにて　入にける

引替りて　主（主人）の翁「ボルカムプ」出来れハ　「ダアモン」はよろこバしきありさまにて　主にむかひ　其許（貴殿）にハ　此程訴事ありて　こゝろをいため給へるよし　我等よきにとりなしまいらせん　心易くあれかしと　打よろこひ事の始末を　くたくだしく　老のくりごとり（くどくどいう言葉）交て物語るに　「ダアモン」は例の性急なるさが（性格）なれば　永物かたりに　気をいらちたえかねたるさまなり

されともこゝぞ大事のきわ（さかい目）若も「ボルカムプ」か心にさハる事あらは　わか縁談の妨にも成りなんと　日頃の気質をとり直し退屈なから聞居たるを主心に思ふやう　扨々（ところで）　短気の生れつきとおもへとも　「ボルカムプ」はさあらぬ体にてものかたり　尚訴状の趣をも見せんとて　奥の間に取に入る

「ダアモン」はしばしも（ちょっとの間）待たす　従者「ラフレウル」をよび出し　とくとく（すぐに）主をむかへ来たれ　と言付けるにて「ラフレウル」ハ　主か部屋に呼に行く「ダアモン」は心せくまゝ　今やりたる「ラフレウル」か来るを待かね　今壱人の召仕「フロンティン」をも呼出し　気をいらちて（いらいらして）の言付ゆへ　言葉を聞とめ得ざりしにや　ふたゝひミたひ　問かへせハ　短気の「ダアモン」いよいよいらちたまりかね「フロンティン」をさんざん打擲してそ　追ひやりぬ

「ダアモン」ハ　ひとり腹立て　わか恋人も　しもべ等も　日頃の気質ハ　知なから　かゝるふるまひなすものかなと　そこらこゝらをふミあらす　得させんと　書記役「ノターリス」かもとに　いそき行く

従者の「ラフレウル」立出て　あたりうろ〳〵見まハせとも　主人の行えしれざれハ　つぶやき〳〵そこゝと尋にこそハ　出にける

都而鳴物（楽器の総称）を用ひす　幕のおりたる間ハ　胡弓太鼓笛等にて　はやし立て　其しらへハ　「ヲルゴル」の調に似たり

かくて娘「ユリヤ」は父に向ひ「ダアモン」の事をとりなさん（よいようにあしらう）と　兎やかくいへとも「ボルカムプ」は　彼か性急なる気質にて　物事に堪へかたきを悪ミ　娘か言葉も聞いれす　たとへ如何なる事ありとも「ダアモン」か言葉に従ふことなく　只我か教をよくよくまもり居るへしと　返々も（念には念を入れて）い、ふくめ　奥の方に立入る跡「ダアモン」か従者「ラフレウル」ハ「ユリヤ」か前に出来り　主人「ダアモン」その御もとに対面し　申へき事の候よし　障りなきや　と尋ぬるそ

娘「ユリヤ」は　是を聞きまつ　何すれ　わが父の心をなためし（なだめる）　其上にて　対面いたし候ハん　といひ捨て　奥をさして入る

「ダアモン」ハ　従者の返事を待かねて　自らこ、に出来り「ラフレウル」に打向ひ「ユリヤ」は　何とありしそと尋ぬれは　従者のいふやう

仰の通りもふせしかと　兎角の返事もなかばにて　奥にいらせ給ひしなり　と答ふるにそ

「ダアモン」きっと心付　我望ミを叶へんにハ　いよいよ彼か頼たる願の筋を速に済せんこそ近道なれ　幸ひ我か伯父何某は　此訟（争訟）の裁断の役目を勤むるものなれハ　此事たのミ遣ハさんとて　したしむる（書いた）　其文に　主「ボルカムプ」よりの頼により此度の願事よきに斗らひ給ハるへし

且「ボルカムプ」か娘「ユリヤ」事ハ　かたちも勝れ　いとかしこきものなるゆへ　兼て縁談の事をのそめとも　彼か父ゆるさ、るゆへせんすへ（なすべき方法）なく過つるに　幸ひ此度の事　速に取すまし給ハ、　我か望ミも叶ふへしな　とあらましに（およそ）心せくま、はしり書いそかわしく（せわしそうに）かひしたゝめ　従者「ラフレウル」に持たせ遣る

「ダアモン」猶も心のおちつきやらす　書記役「ノターリス」をもよびむかへ　主の訟事済むやうに　はやばやはからひ給れかし　いくらの費（費用）あるとても　それかし（わたくし）　まかなひ（やりくり）もふすへしといふにそ「ノターリス」は　うけがひて（承諾して）　立帰るかくて「ダアモン」ハ「ユリヤ」に逢ふて　思ふ程をかたらんと待居たる　娘「ユリヤ」は　しつしづと奥の方より立でる「ダアモン」はとりあへす　つもる思ひの　わり（言いわけ）なきも　逢ふ嬉しさも取交て　談り出んとする折しも「ダアモン」より　おのか姿を画かゝせて

娘「ユリヤ」にあたへんと　たのみおきたる画工なにかし　絵の具くさくさ（いろいろ）持来り　あいさつ終り　画工は姿をえかゝんと「ダアモン」の顔のさま　兎見ツ角ミツ　一筆つゝかいては見あけ　見あけてハ画かく　似顔の生写し　隙どる内を「ダアモン」は　性急短気に退屈おこり　立たり　居たり　静まらす

画工はやふやくかき終る　折しも従者の「ラフレウル」さきの返事を持帰り　主人の前にさし出す　「ダアモン」は　是を見て大ひに悦ひ　「ボルカムプ」を呼出して　伯父より来る返事を見すれは　主の翁ハ　老の目の目鏡をかけてもよめかねる　細字の書面の其内に　「ボルカムプ」は形（顔立ち）も勝れ　かしこきよし　我においても　悦へるなと書たるにて　大におとろき　かゝる我老の形の勝れしとハ　いかなることそとかたハらにかけし鑑に打向ひ　姿を見つといぶかりぬ

こは（これは）「ダアモン」か　したゝめて伯父へ遣りたる其文に　「ユリヤ」か姿すくれしと書へきを　心いらちに誤て　「ボルカムプ」と書たるにそ　かゝる返事をしたゝめたり　折しも書記役の「ノターリス」　官符よりの書付を携へ来り　「ボルカムプ」にさし出せハ　主は是をひらき見るに　「ガラヒン」（人名）を相手としたる訟事此家の主「ボルカムプ」勝たりとそ　しるしたり

「ボルカムプ」は大によろこひ　いかにして　かく速に済たるそと問ふ　書記役「ノターリス」子細をさらに言聞セす　主かいよいよいぶかるにそ　側占「ダアモン」ハ　こらへかね　我こそ汝を此公事に勝をとらせし者也　といふに　主は打おとろき　なかばハうたかふ斗なり

「ダアモン」は取あへす　「ユリヤ」か□（不明）をいゝ出れとも　主「ボルカムプ」は　とかく娘か縁談をゆるすけしき（そぶり）ハ　見へさりける「ユリヤ」は　父に打むかひ　一かたならぬ（並々でない）訟事なるを　たやすく勝となりたりしハ　偏に「ダアモン」の斗ひゆへ　縁談の事いなミ（ことわる）給ハゝ　ことハリ（道理）にもそむくへし　と道理をせめてひたすらに　父か心をなだむる（穏やか）にそ

父「ボルカムプ」も　理に伏し　幸ひ此場に居合する書記役「ノターリス」に打向ひて　娘「ユリヤ」と「ダアモン」と夫婦の契約　すえ永く相違なきとの書付を　目出度かゝせ　一同によろこひいさみ　諸共に（そろって）奥をさしてそ　入にける

和蘭戯芸

弐人猟師乳汁売娘

猟師ギリヨット	に	新渡筆者	ヒツスル
同　コラス	に	在留筆者	ヒツスル
乳汁売娘ペルレッテ	に	同	スミット
リツドル官タンケレート	に	新渡筆者二役	ヒツスル
士卒	に	在留筆者	ハウエル

同　壱番船小役　シイモン
同　在留小役　スミット
同　同　デウィルデ
ペルレッテが父　新渡小役　デイキ
に

舞台の飾りは　野山のけしきにて　暁の頃なり

此のわたり（あたり）に住む「ギリヨット」「コラス」とて（という名の）　弐人の狩人　熊を猟得んとて　暁かけて立出る（立ち去る）　かなたこなたは　せめぐり（追いつめる）此所にてしハし　労をやすめんと　木のもとに立より　腰につけたる酒取出して　互にたハふれつゝ（ふざけながら）くミかハし　壱人の猟師「コラス」は　猶此山深くわけ入て　獣をかりおさんとて　「ギリヨット」を跡に残して行く

折しも乳汁売娘「ペルレッテ」といふもの　なりハひ（生計を立てる仕事）のため　朝まだき（明け方はやく）より　立出て此所に来りかゝりぬ　此娘「ペルレッテ」は　もと「リツドル」といふ　官人（官吏）の娘なりしか　同し官の「タンケレート」といふ者とひそかにかたらひ（交わり）いざなわれて（誘われて）　家を出しか　「タンケレート」はいかに思ひけん（どういうわけか）　此女を捨て　おのれのミ　家に帰りし程に此女せんすへ（なすべき方法）なく

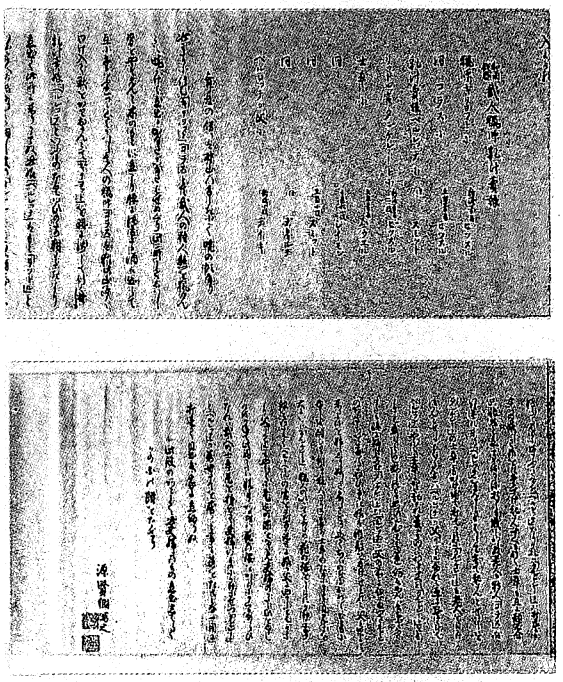
其あたりの農家に立寄り　事のもとづばらに（わけをくわしく）かたり　歎きしかは　農家にも　いとあはれに思ひて　おのか家にやしなひとり　今は乳汁売女となりけるなり

猟人「ギリヨット」は　此乳汁売娘の顔たちの　あてやかなる（うつくしいこと）に　こゝろうこき　迎へとりて妻にせんと　さまざまにいひなせんとも（言い立てる）　乳汁売娘は　さらにかけかふ（口の端にかけること）色なくそのもとハ（あなたは）　まつしきもの　我身ハ遥かに富るものなれは　其もとゝ　いもせのかたらひ（夫婦の契りを結ぶこと）　思ひもよらぬ事なり　といひはなてば「ギリヨット」いふよう　われは野山をかけめくる狩人の身なれ

御身も　かゝる乳汁売の賤しきなりハひ　互の程を　たくらぶる（お互い身分を比較する）　何ほとのけぢめ（ちがい）やあるへき　さるを（そういう）御身ハ　我よりもはるかに富るもの也と　いはるゝこそ　いぶかしけれ

そもいかなる（いったいどのような）宝をか　もたるにて　かく言へるものそ　と問ふ　娘「ペルレッテ」は　携へたる乳汁壺をさし出し　わ

か宝とハ　此つほなりとて　声はりあけて　歌を唄ふ　うたひ終りて
いふやうハ　この中なる乳汁を壺　其価をもて　鶏卵を買とり　是を
かやさせ　其鶏に卵を生せかくしつゝと養ひたつれハ　いくほともなく
多くの鶏となる
是をも羊にかへ　又そのごとくするときハ　あまたのこかね（黄金）
を得るならすや　かゝる事より（このようなわけで）　此壺を宝とハ
いへるなり　とものかたれハ　猟人の「ギリヨット」も　いな〳〵（い
やいや）御身はかりかは　我もまた熊の皮もて　五十ギュルテンの価を
得て　其ごとくするならは　御身よりハ　尚富むへしなと　いひ出れと
乳汁売娘は　耳にも入れす　むやく（むだ）の言に　時を移し　なりハ
ひ（しごと）に　おこたれり　と跡をも見すして立去りぬ



川原慶賀筆「阿蘭陀芝居巻」の詞書。

「ギリヨット」は　只ひとり　乳汁売娘か　つれもなき言葉をかこつ心によそへ　歌をうたふて居る　折しもさきに獣を狩出さんと山深くわけ入たる猟人の「コラス」は　熊に追はれ　いきも絶るはかり　はせ帰るを見るより（見るとすぐ）「ギリヨット」は大に驚き　身をのがれんと
アハたゞしく　かたへ（片方）の木立によぢのぼる
「コラス」ハ　のかるゝに　いとまなく（逃る間もなく）詮すべ（なすべき方法）なきに　伏まろべハ　熊は追付かき廻るに　「コラス」は
はや熊に打くハるゝにやと（早くも食べられてしまう）魂も身に添ハすやよ　助けてと　声のかぎり泣さけぶ　熊は何とか思けん　その儘に立も
どる
「ギリヨット」ハ　木立の上より　此有様をミて　恐れおのゝき居たりしか　やうやうに（やっと）下りたちて　「コラス」か心地うしなひたる
をかき起して（抱きおこす）いたはりぬ
此猟人等ハ　さきに熊の皮を　百ギュルテンに鬻きたる事ハあれとも　熊を打とめ得つる事は　終になかりしものなるにと　かゝるおくれを
取りたる也けり

かくて「ギリヨット」は　猟犬の行えしれされは　連れ来らんと尋にゆく「コラス」は　やうやう（だんだんと）人心地になり　あなおそろしの事にハありけれ　いさ心をしつめんとて（しずめようと）　かたへ（そば）に置たる酒うちのみ　あたりの小屋に立入て　しはし打ふし　やすらひぬ（休息する）　乳汁売娘「ペルレッテ」は　いかなる事にや　あやまちて　かの乳汁壺を打くたき　しほしほと（しょんぼりと）立もとり　世わたるわざ（方法）とたのミたる乳汁壺ハ　うちくたけ　今は何ともせんすべなし（なすべき方法）　となげきつゝ　さも（まったく）あハれなる声をあけ　歌をうたふ

折しも　あれかなたより　猟人の「ギリヨッテ」か来るを見て　出逢もうるさしとや（というのか）　かたハらなる木蔭にそ　立かくれぬ「ギリヨッテ」は　山深く尋ね入り　木立草村へ　たてなくはせ廻りけるゆへ　着たるきぬ（衣服）も引きやれつ（みすぼらしくなる）　殊に　つかれたるおもゝち（顔つき）にて　あへきあへぎ　立もとり　猟人「コラス」を尋れとも居らす

よべとさけべと　いらへ（返事）なく　いつちにや行けん（どこへ行こうか）と　あたりを見れは「コラス」か　かふりもの（帽子）と落たるを見て　扨は彼ものこそ　疑ひもなく　熊に取られ（つかまる）たるならん　こハいかに（これはどうしたことだ）かく伴ひて（連れ立って）家を出つるに　彼のミ　熊にとられしとて　立かへらんもおもてなし

我身もともにと　側なる小屋の軒端に　縄をかけ　縊れ死なんとせし處に　小屋は忽ちくハらくハらと　打崩れ　休ミ居たる猟人の「コラス」か　まろひ出たるにそ（ころがり出た）　互に大におとろひて　しはし言葉もなかりけり

乳汁売娘「ペルレッテ」は　此ありさまを見るより（見るとすぐ）　立出て　猟人に打むかひ　そのもとたちハ（お前たちは）　熊も得す　かゝるすかた（ありさま）ハ何事そと問ふに「ギリヨッテ」ハ　娘に向ひ　我々ハ　御身さきより見るごとく何ひとつ得たる事なく　かくまて　ことのたかひたるそ面目なき事なれ　といふに　娘の「ペルレッテ」ハ　我とても同し幸なきものなれ（である）　あやまちて　彼乳汁壺をくだきたり　とものかたれハ「ギリヨット」は大によろこひ　さては（それなら）御身も　宝とする乳汁壺を失ひたれ

我も熊の皮をも得たるにより　今は互に富るものとなりたるにおなし　此上は御身わか妻となりたりとも　心たらぬ事もあるまし　と打わラひぬ　狩人の「コラス」は　熊をうちとめ得ざるを　ひたすらに口惜しく思ひて　其歌をうたふにそ「ギリヨット」も　娘もともに　おのかさまざまうたひつと「ギリヨット」ハ　立去らんとす

「コラス」は　娘「ペルレッテ」にいふやう　かの「ギリヨット」は　御身か乳汁壺を打くだきたるをあざけり笑ふに　御身ハそれを心にもと

めすねもころに（熱心に）彼と□（不明）ふは　如何なる事にやといへは　「ペルレッテ」ハ　わか身　幸なきものなれは　何事も心にとめし
只此うへは　そのもとたち（お前さんたち）　此所を立さられよ　我は爰にて身の行末を思ひはからん　といふにそ　猟人等ハ　跡見かへり
つゝ別れゆく　乳汁売娘「ペルレッテ」は　身のはかなきを打なけき　歌をうたふて居たりしか　かの「タンケレート」とて　互に心を通ハせつ
る恋人の面すかた（ペンダント）を取出し　生る人にものいふごとく　いかにつれなきミこゝろとて　かたみの中のちきり（思い出の中での約
束）こそ　翼をならへ　枝をしもつらねんもの　とちかひつる君か一夜の情より　我身のほともかへりミす
家をのかれて　行すえハ　友に老もし　若し死なハ　同し所に埋れんと思ひしとも　たのめ（たのみのつな）なく　此身を君は　ふり捨て家に
かへり給へるにそ　せんすべなきに　あさましき（情けない）今の此身となりける也
さりとも（それにしても）君かミこゝろに　千草（種々の草）の露の露はかり　あはれとおほし給ハらは　又逢折をまつねの岩にも生ふる習
ひをハ思ひあハせて　おしからぬ　命をなからへ侍るなり　と草の花ひらかきあつめちらしかけつゝ　かきくどき（くどくどいう）心もきえて
涙川（涙の川）身もうくはかりなき沈む　あはれなりけるありさまなり
此段ハ　始より　笛太鼓　其外の鳴物ありて　歌をも其しらべに合せ唄ふなり　此次の段は　なりものあれと　言葉なく　只その手わさ趣にて　しらするのミなり
かくて「リツドル」官の「タンケレート」ハ　さいつ頃（さき頃）「ペルレッテ」をいさないて　ともに我家を立出しか　身のあやまちを悔る
余り「ペルレッテ」を打捨て　立帰りつれども　朝夕心おたやかならす　かくて在るへき事ならねは　いかにもして　尋出し　もとのごとく夫
婦にも　なりなんとて　あまたの士卒を随へて「ペルレッテ」汝か慕ふもの　爰にあり　と書きしるしたる旗を建かね　太鼓打ならし　こゝかし
こ　たつねさまよひ　此所に来りけるか　千草の花のうちとりたるに　心をとめて見るうちに　何かものと落てありけるを取上るに　はからす
も　過し頃「ペルレッテ」にあたへたる　おのか絵姿（ロケット）なれは　此わたり（このあたり）こそとて　尋るに側なる草むらに　伏しつ
ミたる女あり
つらつら（念を入れて）見るに　まかふかたなき（たしかに）「ペルレッテ」なりけれハ「タンケレート」ハ　打驚き　余りの嬉しさ　娘をは
たすけ起さんすべもなく　士卒も互に顔見合　只忙然と立たりける
かゝる折しも　賤しからぬ老人か狩人「コラス」を　引連れ来り　「ペルレッテ」を見るより　もはしり寄て起さんとせしを　「タンケレート」
の士卒とも　かけ隔て（間にわけ入って）打てかゝるに　「タンケレート」も　老人を目かけ　つかんとせしか　よくよく見れハ　「ペルレッテ」

の父「リツトル」なれは　互に驚く斗也

「ペルレッテ」ハ　やう〳〵（やっと）士卒にかき起され　夢かうつゝか　わきまへす「タンケレート」をミるよりも　恋しうらめし　数々つもる思ひに　心もミたれ　何言出さん　言葉もなくまたも涙にふししつむ「タンケレート」ハ「ペルレッテ」か父の前にひざまづき　是迄のあやまちを　さまざまにわびけるに　娘は漸　顔をあけ　とミれは　父か此所に来りたるを始てしり　嬉しさ　かなしさとり交て　ちゝ（父）の前におづおづ出ともに　ゆるしを願ひける

側なる猟人「コラス」最前（先ほど）士卒のために　からき目見たるを大にいかる「タンケレート」ハ　猟人のいかりをなため　花の環をかしら（頭部）にかけさせ　劔をあたへて「ヘルトヘール」の官をさづけ　諸共に娘か父にゆるしを乞けるにより　父「リツトル」も　やふ〳〵是迄の罪をなだめ（許す）女婦のかたらひ（婚姻）をゆるしける

かねて此国にてハ　祝事ある時ハ　花の環をかしら（頭）にかくるならひ（習慣）なれハ　武人の士卒　是を持出て　夫婦のものにかけさせつ「タンケレート」と「ペルレッテ」か　万世までを寿く（祝ふ）と書たる旗を立て　ミな一同に打連て目出度　家に立帰りぬ

此段のあとにて　此夫婦のもの立出て　しはらく

かの国の躍（おどり）をなせり

源賢綱　写之印印

注

（1）「新渡筆者」とは、一八二〇年の夏に出島に着任した書記の意。

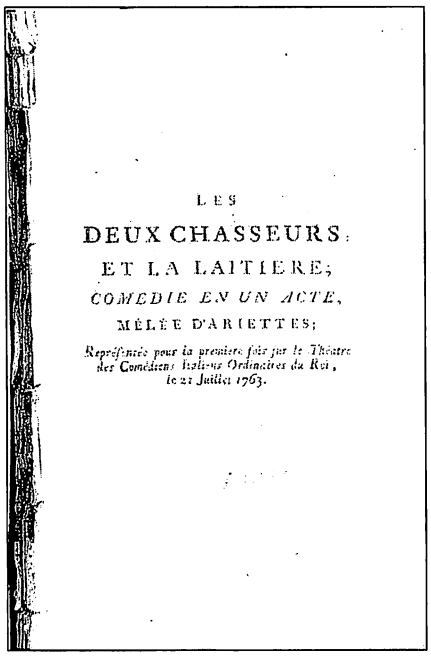
（2）「在留筆者」とは、一八一九年度から勤務についている書記の意。

（3）「打」とは、動詞や名詞に冠して用いる強意語のことか。

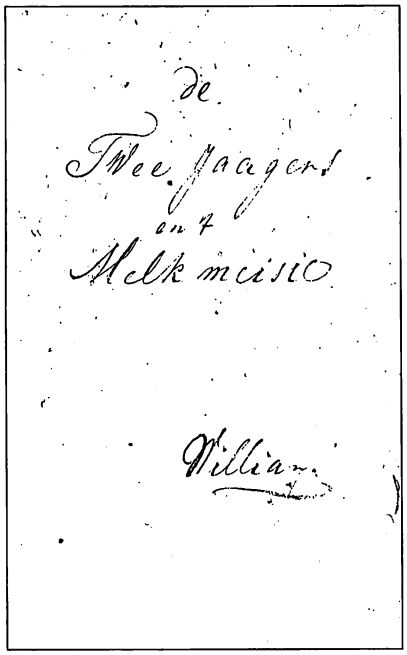
〔資料二〕

つぎに資料として掲げるものは、「和蘭戯芸 二人猟師潅売娘」の原本のひとつ――ルイ・アンソーム（一七二一～八四、フランスの劇作家）作「二人の猟師と乳売娘」の原文の一部と宇田川榕庵（一七九八～一八四六、江戸後期の蘭学者）が、毛筆で書き写した――フィリップ・フレドリック・レインスラーヘル訳 *"de Twee Jaagers en't Melkmeisje"*（「二人の猟師と乳売娘」）のすべて――四幕（Vierde tooneel）までの部分である。

フランス語の原本のほうには、訳文（大意）をつけた。［資料三］がそれである。


LES
DEUX CHASSEURS
ET LA LAITIERE;
COMEDIE EN UN ACTE,
MÊLÉE D'ARIETTES;
Représentée pour la première fois sur le Théatre des Comédiens Italiens Ordinaires du Roi, le 21 Juillet 1763.

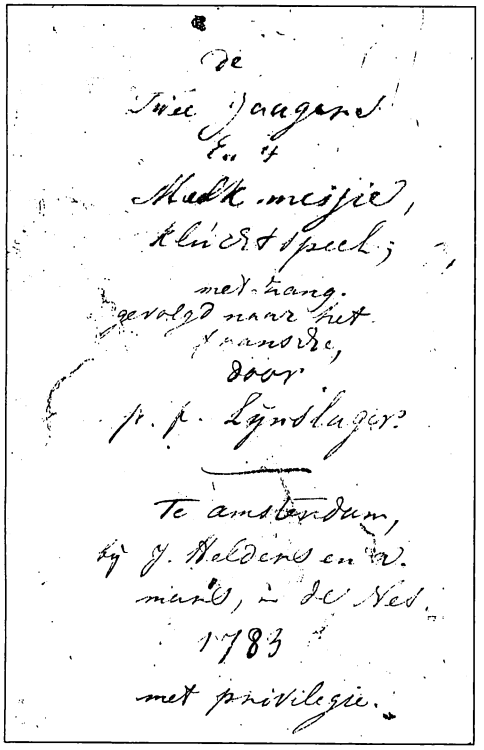
ルイ・アンソーム作「二人の猟師と乳売娘」の表紙。
［慶應義塾大学附属図書館蔵］



宇田川榕庵が謄写したオランダ語訳の表紙。
［早稲田大学中央図書館蔵］

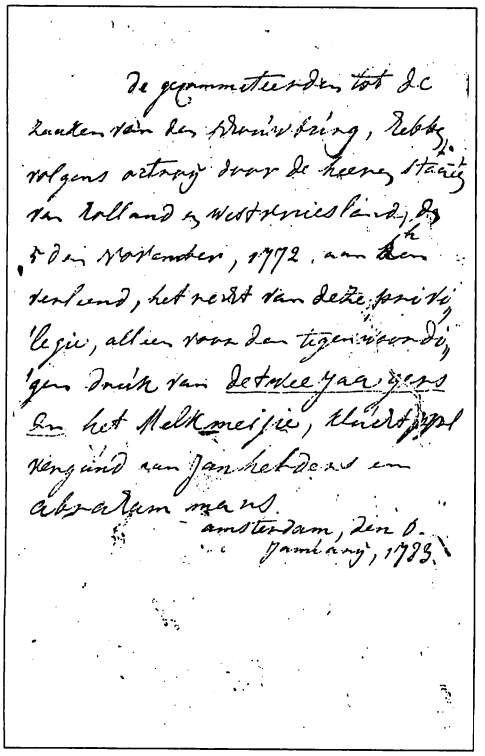
de
Twee Jaagers
en 't
Melkmeisje

William



de
Twee Jaagers
En 't
Melkmeisje,
klúchtspeel;
met zang.
gevolgd naar het
fransche,
door
P.P.Lýnslager.

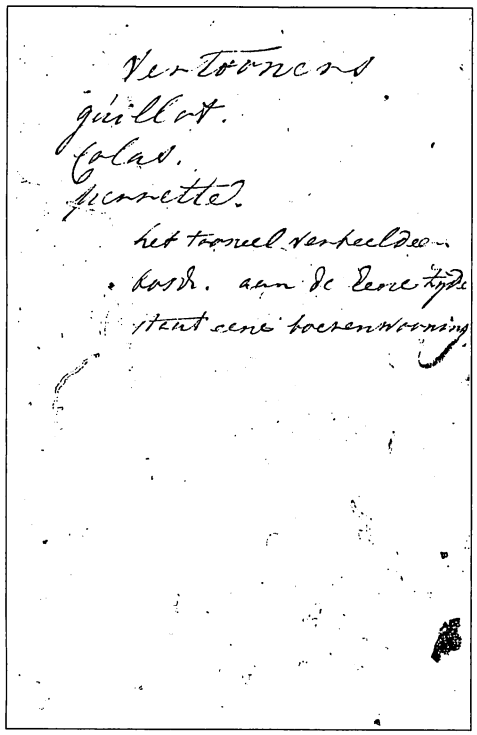
Te amsterdam,
bý J.Helders en a.
mars,in de Nes.
1783
met privilegie.



de gecommiteerden tot de
zaaken van den schoúwbrúg, hebben,
volgens octroij door de heeren staaten
van holland en westvriesland, den
5den November, 1772, aan hen
verleend, het recht van deze privilegie,
alleen voor den tegenwoordigen
drúk van de twee Jaagers
En het Melkmeisje, kluchtppl
vergúnd aan Jan helders en
abraham mars.

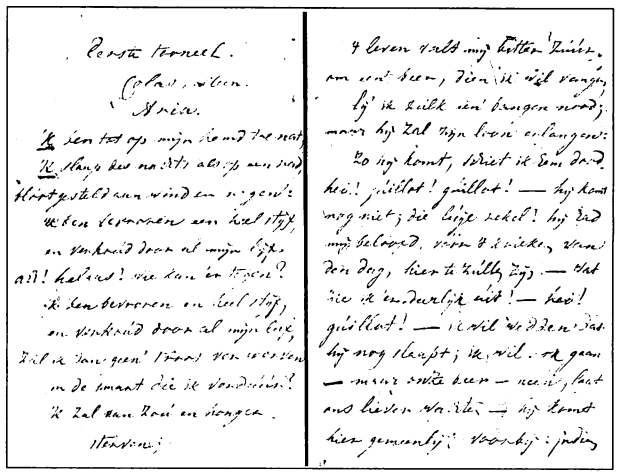
amsterdam, den 6,
Januarij, 1783.

宇田川榕庵が謄写したオランダ語訳の第２頁（上）と第３頁（下）。

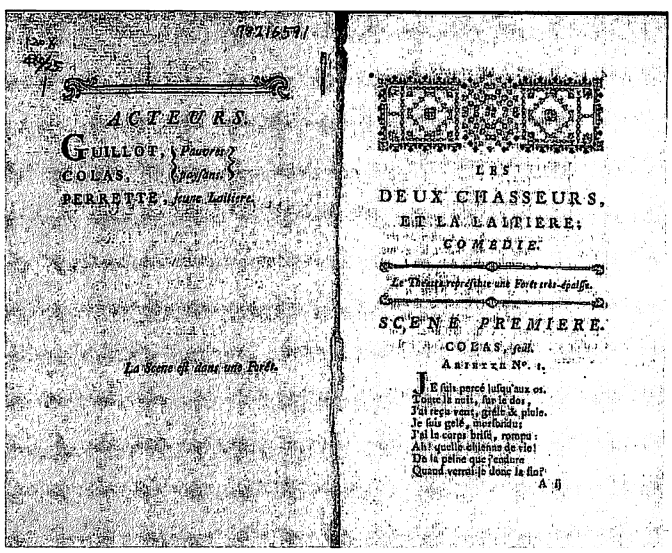


Vertooners
Gûillat.
Colas.
Perrette.

het tooneel verbeeld een
bosch. aan de Eene zijde
staat eene boerenwooning.



宇田川榕庵が謄写した「二人の猟師とミルク売りの娘」の第一場のオランダ語訳。



ACTEURS.
GUILLOT, (Pauvres)
COLAS, (Paysans)
PERRETTE, (jeune Laitiere.)

La Scene est dans une Forêt.

LES
DEUX CHASSEURS,
ET LA LAITIERE:
COMEDIE.

Le Théâtre représente une Forêt très-épaisse.

SCENE PREMIERE.
COLAS, seul.
ARIETTE N°. 1.

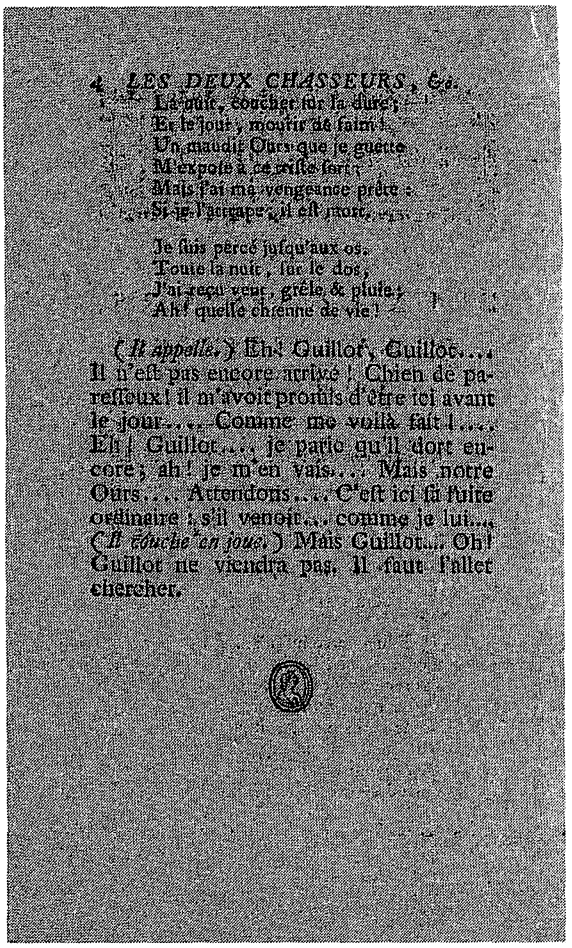
JE suis percé jusqu'aux os.
Toute la nuit, sur le dos,
J'ai reçu vent, grêle, & pluie.
Je suis gelé, morfondu;
J'ai le corps brisé, rompu:
Ah! quelle chienne de vie!
De la peine que j'endure
Quand verrai-je donc la fin?

A ij

Eerste tooneel.
Colas, alleen.
Aria.

‘k ben tot op mijn hemd toe nat,
‘k slaap des nachts als op een rad,
blootgesteld aan wind en regen:
‘k ben bevroren een heel stijf,
en verkoûd door al mijn leef,
ach! helaas! wie kan ‘er tegen?

左はルイ・アンソーム作「二人の猟師とミルク売りの娘」の第一場の原文、右はそのオランダ語訳。



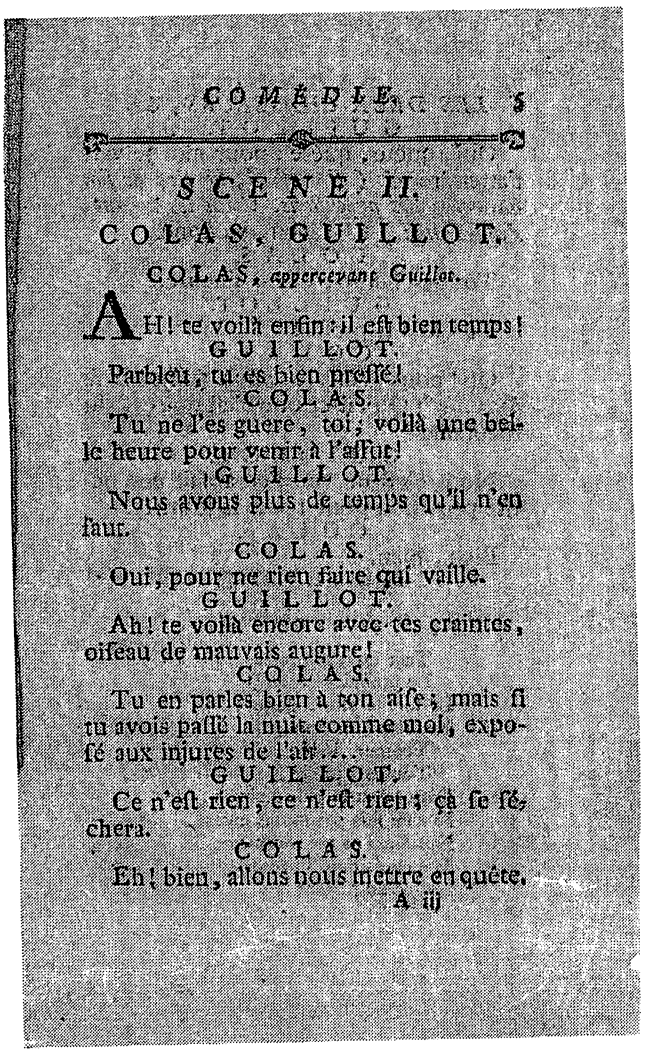
4 LES DEUX CHASSEURS, &c.

La nuit, couchée sur la dure;
Et le jour, mourir de faim!
Un maudit Ours que je guette,
M'expose à ce triste sort;
Mais j'ai ma vengeance prête:
Si je l'attrape, il est mort.

Je suis percé jusqu'aux os,
Toute la nuit, sur le dos,
J'ai reçu vent, grêle & pluie;
Ah! quelle chienne de vie!

(*Il appelle.*) Eh! Guillot, Guillot.... Il n'est pas encore arrivé! Chien de paresseux! il m'avoit promis d'être ici avant le jour.... Comme me voilà fait!.... Eh! Guillot...., je parie qu'il dort encore; ah! je m'en vais.... Mais notre Ours.... Attendons.... C'est ici sa route ordinaire; s'il venoit.... comme je lui.... (*Il couche en joue.*) Mais Guillot.... Oh! Guillot ne viendra pas, il faut l'aller chercher.

'k ben bevroren en heel stijf,
en verkoúd door al mijn leef,
zal ik dan geen' troos verwerken
in de smart die ik verdúúr?
'k zal van zo' en honger
sterven;
't leven valt mij bitter zúúr,
om een' beer, dien ik wil vangen,
lij ik zúlk een' bangen nood;
maar hij zal zijn loon erlangen:
zo hij komt, schiet ik hem dood.
hei! gúillat! gúillat! ——— hij komt
nog niet; die lúije rekel! hij had
mij beloofd, vóór 't krieken van
den dag, hier te zúllen zijn. ——— wat
zie ik 'er deerlijk úit! ——— hei!
gúillat! ——— ik wil wedden dat
hij nog slaapt; ik wil ook gaan
——— maar onze beer ——— neen, laat
ons liever wachten ——— hij komt
hier gemeenlijk voorbij: indien
hij noú reis kwam ——— de droes!
wat zoú ik hem ——— (hij laat aan)
maar; met dat all', gúillat
——— ô! gúillat zal niet komen;
ik zal hem moeten haalen.



COMÉDIE. 5

SCENE II.

COLAS, GUILLOT.

COLAS, apperçevant Guillot.

AH! te voilà enfin: il eſt bien temps!

GUILLOT.

Parbleu, tu es bien preſſé!

COLAS.

Tu ne l'es guere, toi; voilà une belle heure pour venir à l'aſſut!

GUILLOT.

Nous avons plus de temps qu'il n'en faut.

COLAS.

Oui, pour ne rien faire qui vaille.

GUILLOT.

Ah! te voilà encore avec tes craintes, oiſeau de mauvais augure!

COLAS.

Tu en parles bien à ton aiſe; mais ſi tu avois paſſé la nuit comme moi, expoſé aux injures de l'air...

GUILLOT.

Ce n'eſt rien, ce n'eſt rien; ça ſe ſéchera.

COLAS.

Eh! bien, allons nous mettre en quête,

A iij

Tweede tooneel
colas, gúillat

colas, gúillat gewaarwordende.

ha! ben je daar eindelijk! je komt evenwel nog reis?

gúillat.
jij bent wel haastig!

colas.
En jij wel langzaam! 't is noú wel tijd om úit jaagen te gaan, niet waar?

gúillat.
ô! het is nog vroeg genoeg.

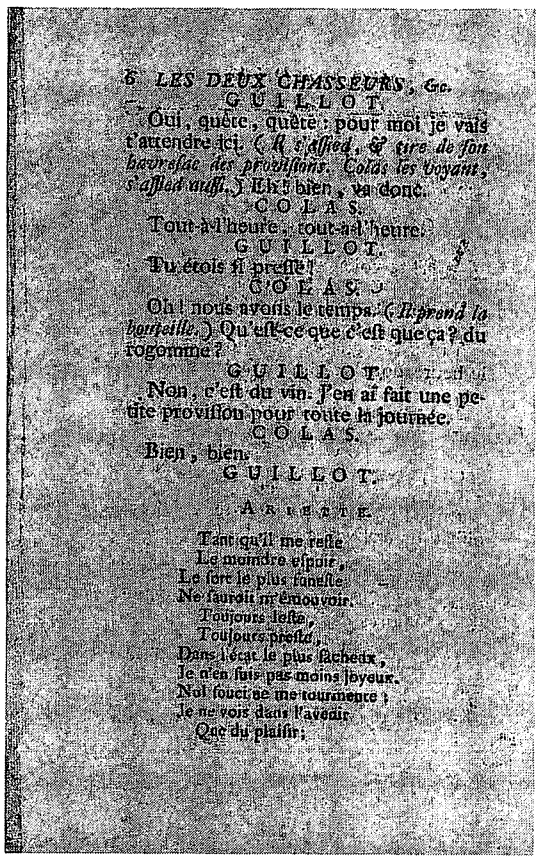
colas.
ja, om niemendal te krijgen.

gúillat.
nog al die oúde vrees? je bent een rechte onvreesvogel!

colas.
jij praat makkelijk; maar als je ook reis, zoals ik, den geheelen nacht onder den blooten hemel, in regen in wind...

gúillat.
ho! dat is niets! dat zal wel weer droogen.

colas
noú, koman, laaten we noú op den beer losgaan.



6 LES DEUX CHASSEURS, &c.

GUILLOT.

Oui, quête, quête : pour moi je vais t'attendre ici. (*Il s'assied, & tire de son bourselas des provisions. Colas les voyant, s'assied aussi.*) Eh ! bien, va donc.

COLAS.

Tout à l'heure, tout à l'heure.

GUILLOT.

Tu étois si pressé !

COLAS.

Oh ! nous avons le temps. (*Il prend la bouteille.*) Qu'est-ce que c'est que ça ? du rogomme ?

GUILLOT.

Non, c'est du vin. J'en ai fait une petite provision pour toute la journée.

COLAS.

Bien, bien.

GUILLOT.

ARIETTE.

Tant qu'il me reste
Le moindre espoir,
Le sort le plus funeste
Ne saurait m'émouvoir.
Toujours leste,
Toujours prêt,
Dans l'état le plus fâcheux,
Je n'en suis pas moins joyeux.
Nul souci ne me tourmente ;
Je ne vois dans l'avenir
Que du plaisir ;

gúillat.
dat kan je doen, as je wilt.
ik voor mij zal je hier weer
verwachten. (hij gaan op den grond
zitten, en haalt úit zijn' knapzak
enig eeten en drinken. clas,
dit ziende, stelt zijn'snaphaan
tegen'een boom, en gaat mede
zitten.) ben je nog niet weg
toe, ga dan heen.

colas
ja, strakjes, strakjes.

gúillat.
je waart zo haastig.

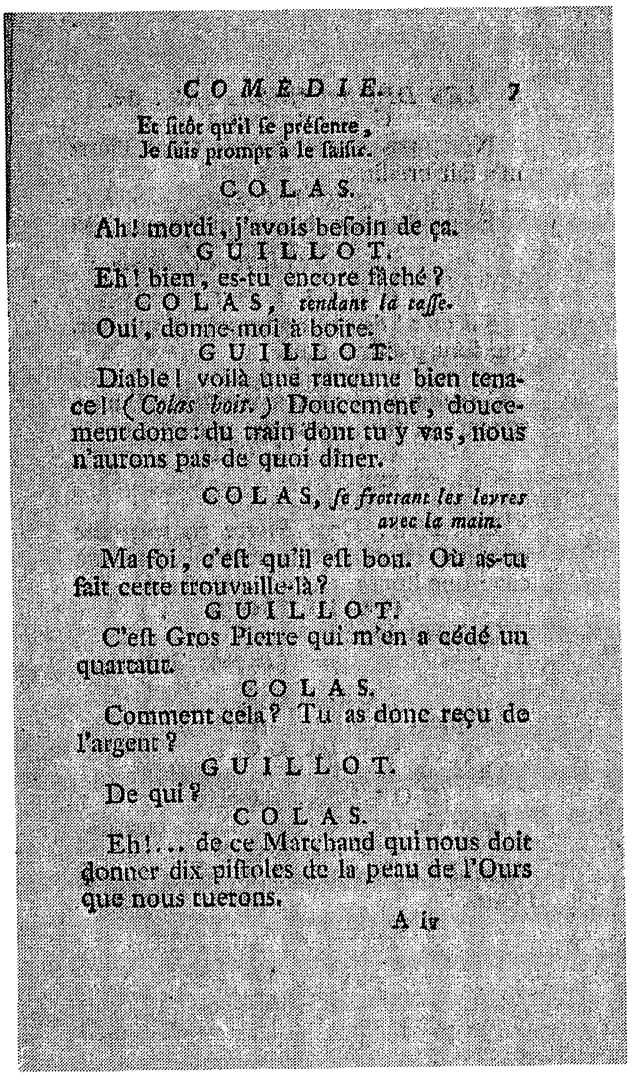
colas.
ja, maar, ik wist niet, dat
we nog zo veel tijd hadden.
(hij neemt de vles.) wat heb je
hierin? is 't een jajempje?

gúillat.
neen, 't is wijn. ik heb 'er
een klein voorraadje van, opgedaan,
voor den gantschen dag.

colas
daar heb je wel aan gedaan.

gúillat.
Aria.

hoe 't lot moog' woeden,
ik acht geen smart:
zolang ik hoop kan voeden,
bezwijkt nooit mijn hart.
altijd rústig,
altijd lústig,
leef ik, in den slechtsten tijd;
wel tevreden en verblijd.
ik ben vrij van alle zorgen:
kwelling, kommer of verdriet
gevoel ik niet;



COMEDIE. 7

Et ſitôt qu'il ſe préſente,
Je ſuis prompt à le ſaiſir.

COLAS.

Ah! mordi, j'avois beſoin de ça.

GUILLOT.

Eh! bien, es-tu encore fâché?

COLAS, *tendant la teſſe.*

Oui, donne-moi à boire.

GUILLOT.

Diable! voilà une rancune bien tenace! (*Colas boit.*) Doucement, doucement donc: du train dont tu y vas, nous n'aurons pas de quoi dîner.

COLAS, *ſe frottant les levres avec la main.*

Ma foi, c'eſt qu'il eſt bon. Où as-tu fait cette trouvaille-là?

GUILLOT.

C'eſt Gros Pierre qui m'en a cédé un quarteau.

COLAS.

Comment cela? Tu as donc reçu de l'argent?

GUILLOT.

De qui?

COLAS.

Eh!... de ce Marchand qui nous doit donner dix piſtoles de la peau de l'Ours que nous tuerons.

A iv

En dus zie ik, ieder' morgen,
niets dan blijdschap in 't
verschiet.

colas.
de droes! ik had zúlks ook wel
noodig!

gúillat.
wel nú! ben je nog boos?

colas, zijn' nap
ophoudende.
ja, geef me maar wat te
drinken.

gúillat.
seldrement! jij hebt ook wel
een' dúivelschen halstarrigen

kop! (colas drinkt.) hei! hei!
hoú reis op! as je noú alles
úitdrinkt, wat zullen we dan
voor van middag hoúden'?

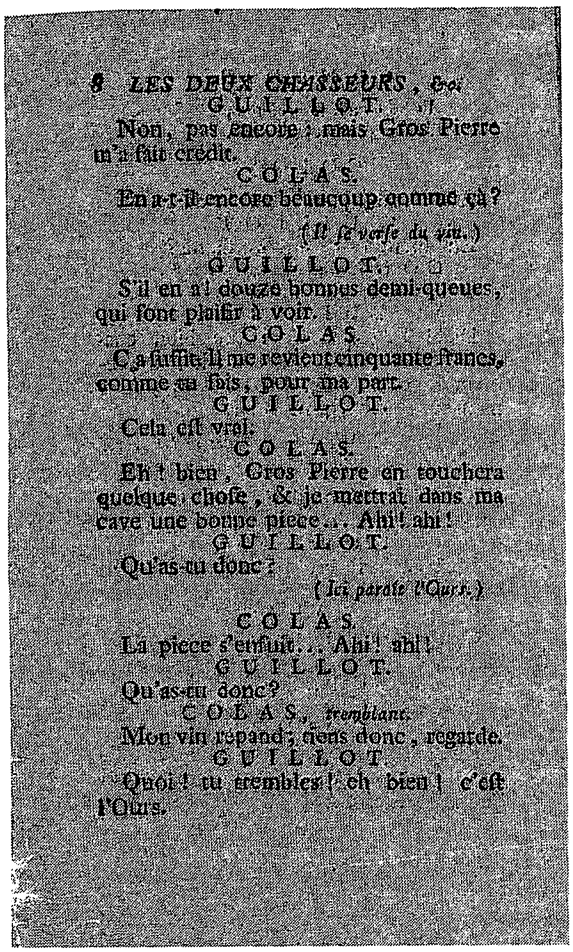
colas, zijn
mond afveegende.
dat komt dat de wijn me, bij men
zal, goed smaakt. waar heb je
dien rond gedaan?

gúillat.
dikke piet heeft 'er me een vaatje
van bezaagd.

colas
hoe! heb je dan geld ontvangen

gúillat.
van wien?

colas.
wel, van dien koopman, die ons
honderd gúldens wil betaalen,
voor de húid van den beer, welken
wij schieten zúllen.



8 LES DEUX CHASSEURS, &c.

GUILLOT.

Non, pas encore ; mais Gros Pierre m'a fait crédit.

COLAS.

En a-t-il encore beaucoup comme çà?

(Il se verse du vin.)

GUILLOT.

S'il en a! douze bonnes demi-queues, qui font plaisir à voir.

COLAS.

Ça suffit. Il me revient cinquante francs, comme ça bis, pour ma part.

GUILLOT.

Cela est vrai.

COLAS.

Eh! bien, Gros Pierre en touchera quelque chose, & je mettrai dans ma cave une bonne pièce... Ahi! ahi!

GUILLOT.

Qu'as-tu donc?

(Il paroît l'Ours.)

COLAS.

La pièce s'enfuit... Ahi! ahi!

GUILLOT.

Qu'as-tu donc?

COLAS, *tremblant.*

Mon vin répand; viens donc, regarde.

GUILLOT.

Quoi! tu trembles! eh bien! c'est l'Ours.

gúillat
Neen; maar dikke piet heeft
me geborgd.

colas.
Heeft hij nog meer van die
soort?

gúillat.
of hij 'er nog meer van
heeft? twaalf vaten vol,

die de pijpe waard' zijn om
te zien.

colas.
Dat's genoeg. je weet dat
me vijftig gúldens, voor mijn
aandeel, in de beeren húid toekoomen?

gúillat.
zo is 't.

colas
wel zoú, dikke piet zal 'er
een gedeelte van hebben, en daar
voor zal ik een vat opdoen. ———
ai! ai!
zie. verschijnt de beer

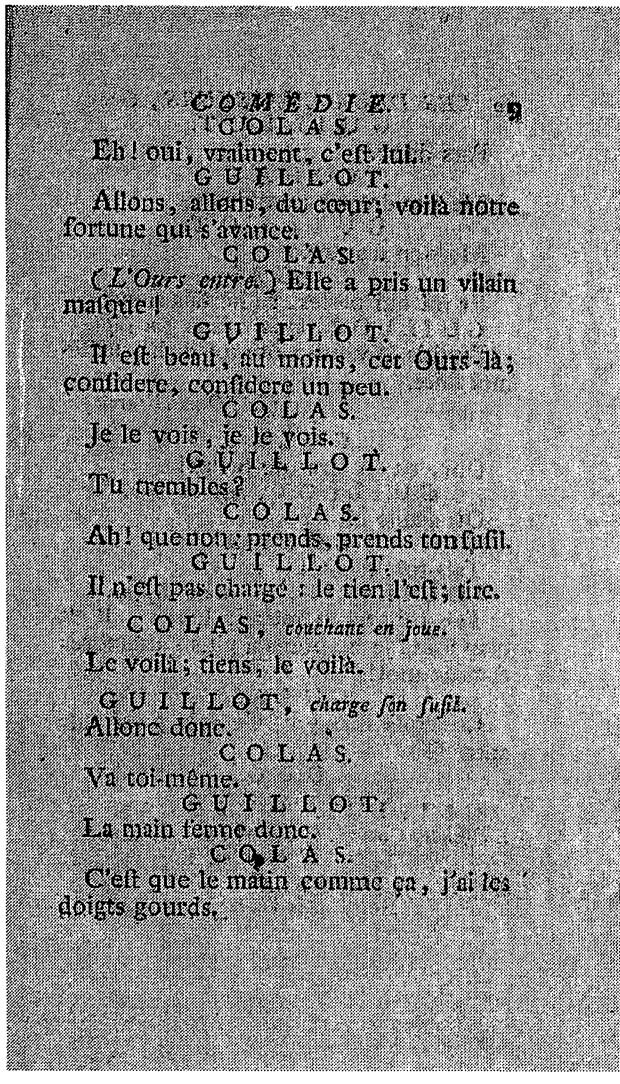
gúillat.
wat schortje?

colas.
weg is men vat. ——— ai! ai!

gúillat.
wat schortje dan?

colas, beevende
ik stort men' wijn; hoú vast.
ai! ai! kijk toch reis om.

gúillat.
hoe beef je zo? wel zoú, 't is
de Beer.



COMEDIE. 9

COLAS.

Eh! oui, vraiment, c'eſt lui.

GUILLOT.

Allons, allons, du cœur; voilà notre fortune qui s'avance.

COLAS.

(*L'Ours entre.*) Elle a pris un vilain maſque!

GUILLOT.

Il eſt beau, au moins, cet Ours-là; conſidere, conſidere un peu.

COLAS.

Je le vois, je le vois.

GUILLOT.

Tu trembles?

COLAS.

Ah! que non; prends, prends ton fuſil.

GUILLOT.

Il n'eſt pas chargé: le tien l'eſt; tire.

COLAS, *couchant en joue.*

Le voilà; tiens, le voilà.

GUILLOT, *charge ſon fuſil.*

Allonc donc.

COLAS.

Va toi-même.

GUILLOT.

La main ferme donc.

COLAS.

C'eſt que le matin comme ça, j'ai les doigts gourds.

colas.
Wis en zeker is hij 't.

gúillat.
kom, nú met lújten, ons fortúin is gemaakt.

colas.
hij heeft een lelijk grins voor zen oogen.

gúillat.
Ô! hij ziet 'er welúit. zei hem reis. zie hem toch reis.

colas.
ja, ja, ik zie hem wel, ik zie hem wel.

gúillat.
waarom beef je zo?

colas.
omdat ik zo koúd ben:

krijg je snaphaan.

gúillat
hij is niet gelaaden en de joúwe wel, schiet.

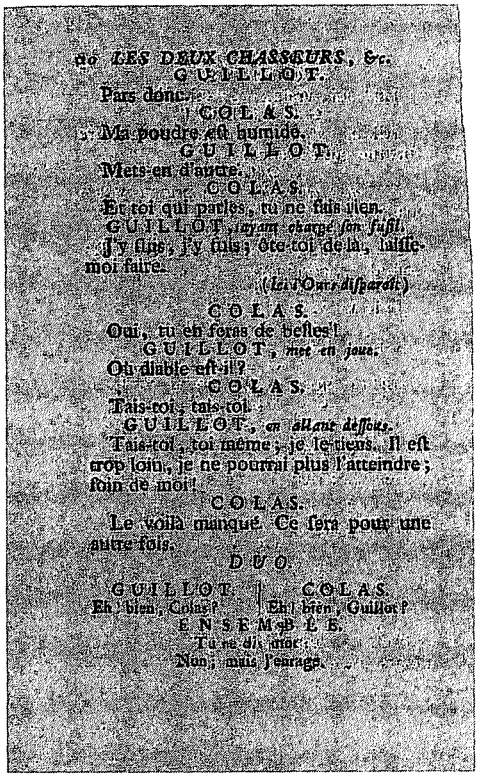
colas, aanleggende
daar is hij, wacht.

gúillat, zijn geweer
laadende
loop 'er naartoe

colas.
loop jij 'er zelf naartoe

gúillat
hoú je mond toch stil.

colas.
Mijn vingers zijn 's morgens zo stijf.



80 LES DEUX CHASSEURS, &c.

GUILLOT.

Pars donc.

COLAS.

Ma poudre eſt humide.

GUILLOT.

Mets-en d'autre.

COLAS.

Et toi qui parles, tu ne fais rien.

GUILLOT, *ayant chargé ſon fuſil.*

J'y fais, j'y fais; ôte-toi de là, laiſſe-moi faire.

(*Les Ours diſparoiſſent.*)

COLAS.

Oui, tu en feras de beſtes!

GUILLOT, *mis en joue.*

Où diable eſt-il?

COLAS.

Tais-toi, tais-toi.

GUILLOT, *en allant deſſous.*

Tais-toi, toi même; je le tiens. Il eſt trop loin, je ne pourrai plus l'atteindre; foin de moi!

COLAS.

Le voilà manqué. Ce ſera pour une autre fois.

DUO.

GUILLOT.	COLAS.
Eh, bien, Colas?	Eh! bien, Guillot?

ENSEMBLE.

Tu ne dis mot.

Non; mais j'enrage.

gúillat.

schiet dan.
maar hij is te ver: ik kan hem
niet meer raaken: foei! wat
spijt me dat.

colas.

wij hebben hem gemist, op
een andere reis zullen we hem
krijgen.

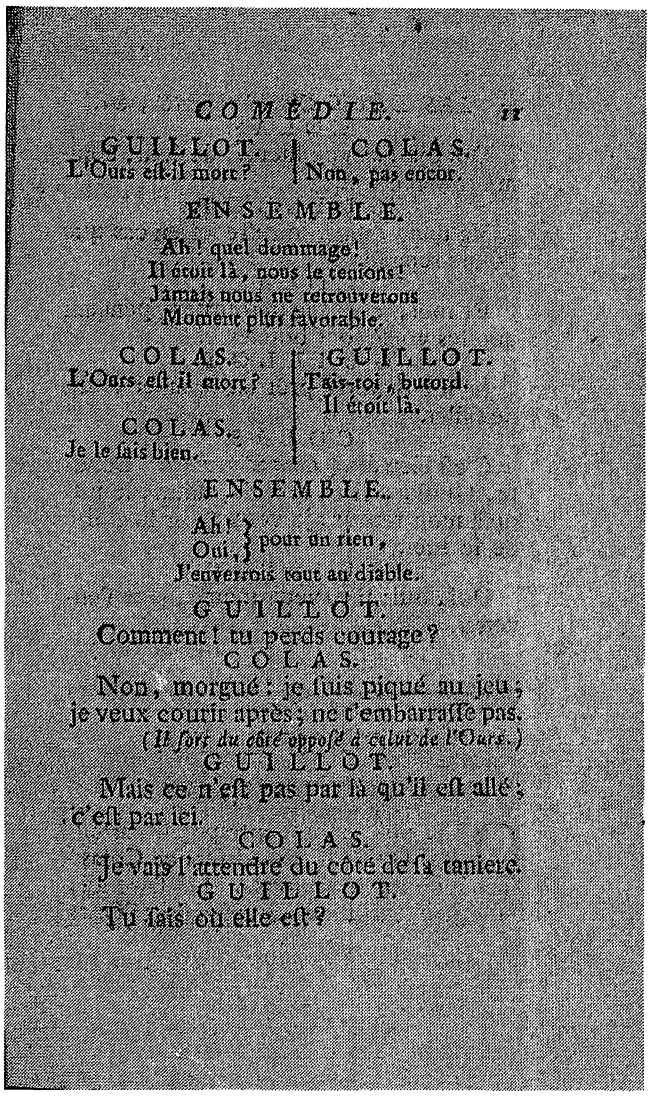
DUO.

g'uillat.	colas.
wel nú, colas?	———— ———, gúillat?
gij staat, als zot!	———— ———, als zot.
colas! hoe nú?	gúillat! ———— ———?
gij staat, als zot!	———— ———— ———— ————!

te saamen
foei! welk een schade!

gúillat.	colas.
is hij kapot?	wel neen hij zot!

te zaamen
bij ginsche boomen
had ik al reeds hem in 't gezigt:



COMÉDIE. 11

GUILLOT. | COLAS.
L'Ours est-il mort? | Non, pas encor.

ENSEMBLE.

Ah! quel dommage!
Il étoit là, nous le tenions!
Jamais nous ne retrouverons
Moment plus favorable.

COLAS. | GUILLOT.
L'Ours est-il mort? | Tais-toi, butord.
| Il étoit là.
COLAS. |
Je le tais bien. |

ENSEMBLE.

Ah! / Oui, } pour un rien,
J'enverrois tout au diable.

GUILLOT.

Comment! tu perds courage?

COLAS.

Non, morgué: je suis piqué au jeu;
je veux courir après; ne t'embarrasse pas.
(*Il sort du côté opposé à celui de l'Ours.*)

GUILLOT.

Mais ce n'est pas par là qu'il est allé;
c'est par ici.

COLAS.

Je vais l'attendre du côté de sa tanière.

GUILLOT.

Tu sais où elle est?

colas.
Mijn kuúid is te vochtig
gúillat.
doe 'er ander op.
colas.
je hebt een hoopen babbels;
maar je voert zelf niemendal
úit
gúillat, zijn geweer
gelaaden hebbende
úit den weg, ik ben 'er, laat
me maar reis begaan
de beer is vertrokken.
colas.
ja, jij zult de bot vergallen.
gúillat, aanleggende
waar dúivel is hij dan?
colas.
zwijg stil, zeg ik, zwijg stil.
gúillat. hem nalloopende.
zwijg jijzelf stil; ik zie hem;
nooit zúllen wij een tijd gewricht
zo gúnstig weer bekomen.

gúillat.	colas.
is hij kapot?	wel neen hij,
ik weet 't wel.	zot! ik zag hem daar.

te zaamen
ach! welk een spijt!
we zijn hem kwijt!
foei! welk een schade!

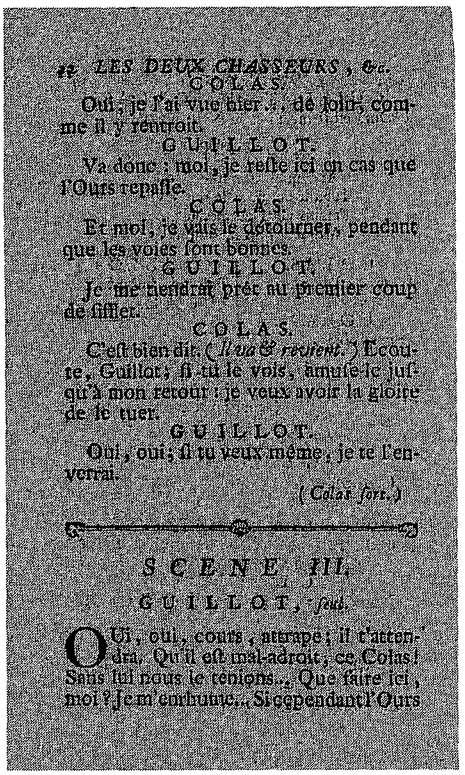
gúillat.
wat deksel! verlies je den
moed?

colas.
Neen, voor den droes! ik word
'er nú eerst recht vúúrig op. ik
zal hem achternaloopen, maak
jij je maar niet verlegen.
hij gaat een'anderen weg in,
dan dien, welken de beer
ingegaan is.

gúillat.
waar wiljlie naartoe? hij is
den anderen weg ingegaan.

colas.
ik wil hem aan zijn hol opwachten.

gúillat.
weet je dan waar het is?



LES DEUX CHASSEURS, &c.

COLAS.

Oui; je l'ai vue hier... de loin, comme il y rentroit.

GUILLOT.

Va donc : moi, je reste ici en cas que l'Ours repasse.

COLAS.

Et moi, je vais le détourner, pendant que les voies sont bonnes.

GUILLOT.

Je me tiendrai prêt au premier coup de sifflet.

COLAS.

C'est bien dit. (*Il va & revient.*) Ecoute, Guillot; si tu le vois, amuse-le jusqu'à mon retour : je veux avoir la gloire de le tuer.

GUILLOT.

Oui, oui; si tu veux même, je te l'enverrai.

(*Colas sort.*)

SCENE III.

GUILLOT, *seul.*

OUI, oui, cours, attrape; il t'attendra. Qu'il est mal-adroit, ce Colas! Sans lui nous le tenions... Que faire ici, moi? Je m'ennuie... Si cependant l'Ours

colas.
wel ja, ik heb 't gisteren nog
van vere gezien, toen hij 'er
inkroop.

gúillat.
loop 'er dan schielijk naartoe
ik zal hier op de brandwacht blijven
staan, of hij somtijds terúg
kwam.

colas.
en ik wil hem aan 't dwaalen
brengen, terwijl 'de wegen goed
zijn.

gúillat.
as je me noodig hebt, moet je
naar reis flúiten, dan zal ik
bij je komen.

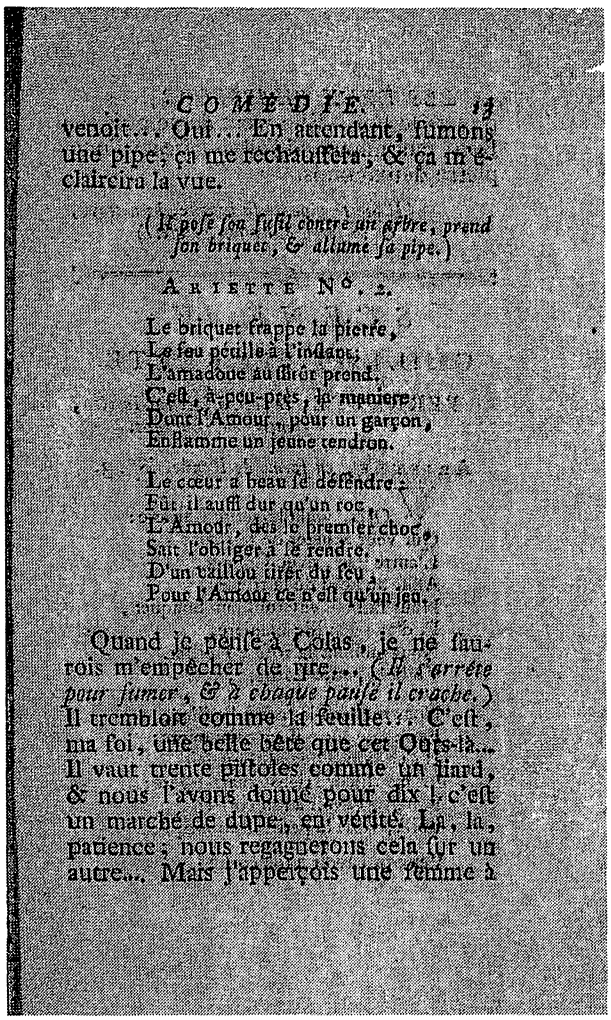
colas.
dat is goed. (hij gaat en keert
weer terúg.) lúister, gúillat:
wanneer je den beer ziet, moet
je hem zolang aan de praat
hoúden tot ik weer hier ben:
ik zelf wil de eer hebben van
hem dood te schieten.

gúillat.
ja, ja; ik zal hem zelfs naar
je teozenden, as je wilt.

---

derde tooneel.
gúillat, alleen,

ja, brúi maar heen, en vang
hem, hij zal je wel opwachten.
die colas is toch een rechte bloed!
zonder hem was de beer ons. ———
wat zal ik hier noú úitvoeren?
——— ik loop maar gevaar om te verkoúen.
——— maar zo de beer



COMEDIE. 13

venoit... Oui... En attendant, fumons une pipe; ça me rechauffera, & ça m'éclaircira la vue.

(*Il pose son fusil contre un arbre, prend son briquet, & allume sa pipe.*)

ARIETTE N°. 2.

Le briquet frappe la pierre,
Le feu pétille à l'instant;
L'amadoue au fûrôt prend.
C'est, à-peu-près, la maniere
Dont l'Amour, pour un garçon,
Enflamme un jeune tendron.

Le cœur a beau se défendre;
Fût-il aussi dur qu'un roc,
L'Amour, dès le premier choc,
Sait l'obliger à se rendre,
D'un caillou tirer du feu,
Pour l'Amour ce n'est qu'un jeu.

Quand je pense à Colas, je ne saurois m'empêcher de rire... (*Il s'arrête pour fumer, & à chaque pause il crache.*) Il tremboit comme la feuille... C'est, ma foi, une belle bête que cet Ours-là... Il vaut trente pistoles comme un liard, & nous l'avons donné pour dix! c'est un marché de dupe, en vérité. La, la, patience; nous regagnerons cela sur un autre... Mais j'apperçois une femme à

echter eens kwam. ja ——— laaten
we terwijl een pijpje rooken,
dat zal me verwarmen.

hij stelt zijn snaphaan tegen
een boom, neemt zijn tintel,
en steekt zijn pijp aan.

travers le bois. Elle vient de ce côté... Bon; tant mieux. Si j'allois faire ici d'une pierre deux coups.

(Il ôte sa pipe de sa bouche, la nettoye, & la serre dans son gousset.)

SCENE IV.

GUILLOT PERRETTE.

PERRETTE, *le pot au lait sur la tête, entre en chantant.*

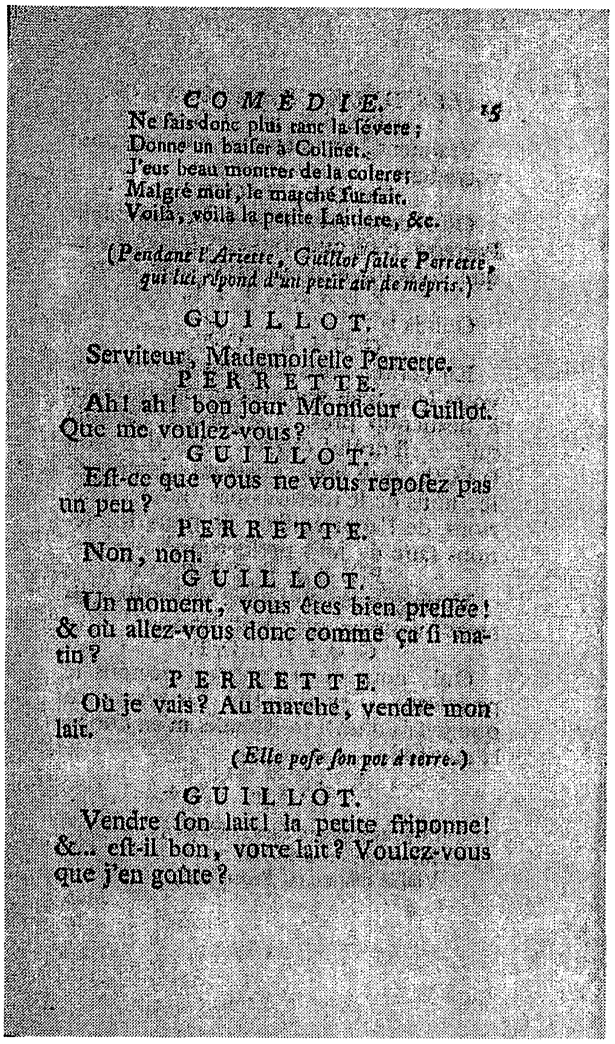
AIRETTE, *en forme de Ronde.* N°. 3.

VOilà, voilà la petite Laitiere:
Qui veut acheter de son lait?
L'autre jour, avec Colinet,
Assis au bord de la riviere,
Nous faisions ensemble un bouquet,
Et d'une gentille maniere,
Nous mêlions la rose à l'œillet.
Voilà la petite Laitiere, &c.

Nous mêlions la rose à l'œillet,
Et mainte autre fleur printaniere;
Il s'en saisit, quand il fut fait,
En me disant: tiens, ma Bergere,
Veux-tu l'avoir à ton corset?
Voilà, voilà la petite Laitiere, &c.

Veux-tu l'avoir à ton corset?

vierde tooneel



COMÉDIE. 15

Ne fais donc plus tant la sévere ;
Donne un baiser à Colinet.
J'eus beau montrer de la colere ;
Malgré moi, le marché fut fait.
Voilà, voila la petite Laitiere, &c.

(*Pendant l'Ariette, Guillot salue Perrette, qui lui répond d'un petit air de mépris.*)

GUILLOT.

Serviteur, Mademoiselle Perrette.

PERRETTE.

Ah! ah! bon jour Monsieur Guillot. Que me voulez-vous?

GUILLOT.

Est-ce que vous ne vous reposez pas un peu?

PERRETTE.

Non, non.

GUILLOT.

Un moment, vous êtes bien pressée! & où allez-vous donc comme ça si matin?

PERRETTE.

Où je vais? Au marché, vendre mon lait.

(*Elle pose son pot à terre.*)

GUILLOT.

Vendre son lait! la petite friponne! &... est-il bon, votre lait? Voulez-vous que j'en goûte?

daar, zei ik hem, hij 's 'er geschonden.

gúillat.
goeden dag, júffroúw perrette.

perrette
ha! ha! goeden dag, monsieúr gúillat. wat zoek je?

gúillat.
wat ik zoek? ——— wil je hier niet wat rústen?

perrette.
wel neen ik: ik heb 'er den tijd niet toe

perrette.

wel neen je, toch niet. dit is geen kost voor joú' mond.

gúillat.
Ô! verschoon me, júffroúw
perrette.
ik woú je wel op dezelfde wijze antwoorden.
wat zeg je van die klúcht?
ik heb zin in je, en as je wilt.
wel nú dan, van een' jaager.
hoe dat? wat schoot me dan.
hoe dat?
op welk een wijze?

perrette
je weet 't spreekwoord wel
Een vogel in de hand is beter dan tien in de lucht.

voor wel, gúillat.
mij dúnkt, in waarheid, ja, alsof.
helaas! helaas!
ach! perrette, ach! arme perrette!

宇田川榕庵が謄写した蘭訳は、ここで終っている。またフランス語の原本のほうは、このあと二十ページほど続くが、以下省略する。

〔資料三〕

つぎに資料として揚げるものは、「和蘭戯芸　二人猟師湿売娘」の原本のひとつ――ルイ・アンソーム作「二人の猟師と乳売娘」(*Les Deux Chasseurs et la Laitiere*, 1783) の全訳（大意）である。

二人の猟師とミルク売りの娘

一幕物の喜劇　小アリア入り。

一七六三年七月二十一日　王室付属のイタリア喜劇座で初めて上演された。

役　者

ギョ
コラ　貧しい農夫

ペルレット　ミルク売りの娘

舞台は森の中。

二人の猟師とミルク売りの娘

喜劇

舞台はうっそうとした森。

第一場

コラ……たった一人で登場。

第一の小アリア。

私は一晩中、風、あられ、雨にさらされている。それは骨に徹り、髄に入るほどだ。体はこごえている。体はこわれ、めちゃくちゃだ。ああ、なんとひどい人生だろうか！

いま耐えしのんでいる苦痛は、いったいいつ終るのであろうか？

夜になると、地べたの上で寝、昼は昼で飢え死にしそうだ！

狙いをつけている、いまいましい熊の奴のおかげで、私はえらい目に会っている。けれど復しゅうの誓いをたてたからには、奴を捕え、仕止てやる。

私は、一晩中、風、あられ、雨にさらされている。それは骨に徹り、髄に入るほどだ。ああ、なんとひどい人生だろうか！

（コラは名を呼ぶ）

おーい！　ギョ、ギョよ……

まだ来やがらない！　なまくら者め！　夜が明けぬ前にここに来ると、約束したくせに……俺は準備ができているのに！　おーい！　ギョよ……

きっとまだ寝てやがるのだろう。ああ！　俺はこれから出かけるとして……俺たちの熊は……ともあれ待つことにしよう……いつもやつに逃げられてしまうのはこの場所なんだ。

熊の奴、またやって来たら……奴に……（コラ銃のねらいを定める）それにしてもギョの奴……ああ、あいつは来やがらない。奴を捜しに行く必要があるな。

第二場

コラ、ギョ登場。

コラは、ギョに気づいて……

ああ、とうとうやって来たな。ずいぶんごゆっくりだな。

ギョ　なんだ、何を急いでいるのだ。

コラ　お前は、お急ぎではないのかね。

熊を待伏せするのに、ずいぶんけっこうなお時間ですな。

ギョッ　俺たちにはたっぷりと時間がある。

コラ　さよう、どうでもよいような時間が。

ギョッ　ああ！　お前はまたしても不吉な鳥のようにおびえている！

コラ
お前は勝手放題のことをいうが、おれのように夜霧に身をさらして夜をすごすことを考えてもみよ……。
ギョ
そんなのは何でもないことだ。どうということはない。夜霧は乾くだろう。
コラ
じゃあ、熊を探しに出かけるとするか。
ギョ
さよう、獲物さがし、獲物さがしが一番じゃ。俺のほうは、お前をここで待っていよう。
（かれは腰をおろすと、リュックサックから食物を取りだす。コラもそれを見て、腰をおろす。）それじゃ、お前は行くがよい。
コラ
じゃあとで。
ギョ
お前は急いでいたんだろ？
コラ
へっ！、俺たちには時間の余裕がある。（かれはビンを手にする）
これは何んだ？　強い酒かな？
ギョ
いやいや、ブドウ酒なんだ。俺は朝から晩まで、チビチビ飲んでいるのさ。
コラ
よし、わかった。わかった。
ギョ

小アリア。

私に希望のかけらが残っているかぎり、不吉きわまりない運命にも、心がゆれうごくこともないだろう。いつもてきぱきと、いつも機敏に。最も辛い状態の中でも、たのしくないわけではない。どんな気苦労も、ちっとも苦にならない。未来の中に見るものは、喜びだけである。

熊の奴、姿をみせしだい、すぐつかまえてやる。

コラ

ああ、いけない。俺さまが必要としていたのは熊なのだ。

ギョッ

ところで、お前はまだ怒っているのか？

コラ

（コップに手を伸ばしながら）

さよう。一杯飲ませてくれ。

ギョ

うへぇ！　恨みは深いようだ。

（コラは酒を飲む）

ゆっくり、ゆっくりと。お前の飲みっぷりだと晩飯に食うものがなくなってしまう。

コラ　手で口をふきながら。

たしかに、これは上物だ。とこでみつけたのだ？

ギョ

太っちょのピェールが小樽をゆずってくれたんだ。

コラ
どうしてゆずってくれたのか。まさか例の金を受け取ってしまったのじゃあるまいな？
ギョ
誰から？
コラ
おい！　俺たちが仕止める予定の熊の皮の代金十リーブル（昔の金貨）の前払いということで、あの商人からもらったのか。
ギョ
いやいや、まだ受け取っていない。けれど太っちょのピェールは掛け売りにしてくれたんだ。
コラ
やつはまだ樽をいっぱい持っているのか？
（コラはじぶんでブドウ酒を注ぐ）
ギョ
そうとも！　かれこれ大樽を一ダースはもっている。見るだけで眼の保養になる。
コラ
俺にはそれで十分だ。知っての通り、俺のほうに五十フラン入ってくるのだ。
ギョ
その通りだ。
コラ
いやはや。太っちょのピェールも、その内の［金］のいくらかを手にすることが出来ることになるな。そして俺も（ワイン）を地下蔵に何ダースもためこんでやる。
ギョ

どうしたんだ？

（ここで熊が姿をみせる）

ブドウ酒の樽に逃げられるぞ……ああ痛い！　ああ痛い！

ギョ

どうしたんだ？

コラ（ふるえながら）

ブドウ酒をこぼしてしまった。ほら、見てみろや。

ギョ

どうしたのだ！　ふるえているじゃないか！　えっ！　熊じゃないか。

コラ

そうなんだ！　熊なんだ。

ギョ

さあ、さあ、こっちにやって来るのは金の卵の熊公のやつだ。

コラ

（熊が登場する）こいつは醜いつらがまえの熊だ！

ギョ

少なくとも、あれは立派な熊ではないか。よく見てみろや。ちょっとでいいから。

コラ

なるほど、なるほど。

ギョ

お前ふるえているのか？

コラ
何だって！　とんでもない。銃を取れや。
ギョ
俺の銃には弾が入っていないんだ。お前のは弾が入っているだろうから、お前が撃てばよい。
コラ
（ほおを斜めに傾けながら）
奴がやって来たぞ、ほら、来たぞ。
ギョ
（銃に弾を込める）
それ行け。
コラ
じぶんで行ってみろや。
ギョ
手がガチガチだ。
コラ
こんなに寒い朝じゃ、手がかじかんでしまう。
ギョ
撃て！
コラ
俺の火薬はしけてやがる。
ギョ

別な火薬を入れたらどうだ。

コラ

しゃべってばかりいちゃ、らちがあかぬ。

ギョ

（銃に弾をこめてから）

準備ができたぞ。準備ができたぞ。

そこをどいてくれ。俺にやらせてくれ。

（ここで熊は姿を消す）

コラ

ばかをしでかしやがって！

ギョ

（銃をほおに当て）

熊の奴はいったいどこにいるのか？

コラ

静かにしろ。静かに。

ギョは身を伏せて……。

静かにしないか。お前のことだ。俺は奴を捕えるのだ。熊のやつ、遠くへ行ってしまったら、もう俺にはしとめられないかも知れぬ。ふうん！

コラ

今回、しとめられなかったら、別の機会にしよう。

二人で口をそろえて

ギョ
それで、コラよ？
コラ
それで、ギョよ？
そろって――
お前はひと言もいわない。
いや、俺はおこっているのだ。
ギョ
熊の奴、死んだのだろうか？
コラ
いやいや、まだ死んではいまい。
そろって――
ああ、残念なこった！
奴があそこにいたら、捕えられるのに！
あのような好機は二度とあるまい。
コラ
熊の奴、死んだのだろうか。
ギョ
だまらないか、のろまめ。奴はあそこにいたのだ。
コラ
そんなことわかっている。

そろって――

ああ！
そうだとも！　無駄骨折って、何もかも失ってしまった。

ギョ　えっ、何ていった！　お前はやる気をなくしたのか？

コラ　けっしてそんなことはない。とんでもない。勝負は続ける。熊の奴を追い続けたい。ご心配無用だ。

（かれは熊がいる反対側から出てゆく）

ギョ　ところで、熊が逃げて行ったのはそのあたりからではない。こっち側を通って行ったのだ。

コラ　巣穴のそばで奴を待つのだ。

ギョ　お前は奴の居場所を知っているのか？

コラ　知ってるさ。奴を昨日遠くから見たのだ。奴が巣穴に居るときのことだ。

ギョ　まさか……。俺はここに残るとしよう。熊の奴が再び立ち寄るかも知れないから。

コラ　で俺のほうは、通った跡がはっきりしている内に、奴の道路をそらせよう。

ギョ

俺はまず呼び子を吹く準備をしておこう。

コラ

首尾はいいぞ。（かれは行きつもどりつする）

あのなぁ、ギョよ。もしお前があの熊をみかけたら、俺がもどるまで、奴の注意をそらしておいてくれ。奴をしとめる栄誉をえたい。

ギョ

そうだとも。お前が望むのなら、あの熊をお前のところに送ってやろう。

（コラは出てゆく）

第三場

ギョ……たった一人で登場。

そうだ、そうだ、走れ、つかまえろ。熊の奴、お前のこと待っているぞ。コラの奴、何んてとんまなのだろうか！　あいつがいなければ、熊をつかまえられるのに。俺様はここで何をしたらよいのだろうか？　風を引いたようだ……。

しかし、もし熊の奴がやって来たら……。そうだ……奴を待ちながら、一服やるとするか。タバコを吸えば、体もあたたまることだろう。それに視覚もはっきりすることだろう。

（かれは樹に銃を立てかけ、ライターを手にすると、パイプに火をつける）

第二の小アリア。

火打ちがライターの石に当たると、火はたちまちぱちぱちと跳ね、すぐに火口（ほくち）に移る。それは愛の女神が若者のために、若い年ごろの娘の愛情を燃えたたせるやり方に近い。

心はわが身を守ろうとしても無駄である。心が岩とおなじように固くとも。愛の女神は、衝撃をうければかんたんに、わが身をゆだねる必要があるこ

とを知っている。小石（火うち石）の中から取り出される火は、愛の女神にとって戯れにすぎない。

コラのことを思うと、笑いがとまらない。……（ギョは立ちどまると、一服する。が、一休みするつど、つばを吐く。）

コラは木の葉のように身をふるわせていた……たしかにあの熊は、すばらしい奴だ。三〇ピストール（むかしの金貨）の値打があるのに、まるで一リャール（むかしの銅貨で三ドゥニエ、または四分の一スー）の値しかないかのように、俺たちは一〇ピストールで手離してしまった！ 実にいんちきな取引だ。

いやはや、我慢、我慢。またの機会に金を取りもどすとしよう。……

ところで、女が森を通り抜けようとしているが。こちらの方に来るぞ……。いいぞ、いいぞ、しめた。一石二鳥だとすると。

（かれは口もとからパイプをはなすと、それをふき、チョッキの小ポケットの中に入れる）

第四場

ギョとペルレットの登場。

ペルレットは、頭のうえにミルクの入った壺をのせ、歌をうたいながら入場。

第三の小アリア。輪舞曲のかたちで。

ほら、かわいいミルク売りの娘がいるぞ。
だれがあの娘（こ）のミルクを買おうというのか？
このあいだ、コリネといっしょに川のほとりに腰をおろし、いっしょに花束をつくったっけ。そして俺たちはそっと枕の中にバラを入れたっけ。
ほら、かわいいミルク売りの娘がいるぞ。

俺たちは枕の中にバラを入れたっけ。そしてその他の春に咲く花をたくさん……。枕ができ上ったとき、独語をいった。ほら、羊飼の娘よ、お前はコルセットにバラをつけたいか？　ほら、かわいいミルク売りの娘がいるぞ。

お前はコルセットにバラをつけたいか？

注・ここまで資料として、原文を引いた。

そんなにお堅いふりをするな。コリネにキスしてやれ。俺は怒りをあらわにしてもだめだった。俺の意に反して、あきないはでき上ってしまったんだ。ほら、かわいいミルク売りの娘がいるぞ。

（小アリアの最中、ギョはペルレッテにあいさつをする。彼女はちょっと見下した態度で返事をする）

ギョ

今日は、ペルレットお嬢さんよ。わたしは……

ペルレット

あら、こんにちは、ギョさん。

あたしに何か御用？

ギョ

ちょっと休みませんか？

ペルレット

いいえ、いいえ。

ギョ

ちょっと待って下さい。たいそうお急ぎのようですが！

こんなに朝早く、いったいどちらへお出かけですか？

ペルレット

どちらへですって？　市場へですわ。ミルクを売るためですの。

（彼女は壺を地面のうへに置く）

ギョ

ミルクを売りにですって！　かわいい、いたずら子の娘さんよ！　お嬢さんのミルクはおいしいかい？　そのミルクを一口味見させてもらえませんか？

ペルレット

実のところ、このミルクはあなたの口に合いませんね。本当ですの。

ギョ

おお、お嬢さん、失礼いたしました。ペルレットお嬢さん。お嬢さんはとても感じのよい方なので、そのミルクを一口飲みたくなったのです。

ペルレット

本当に！

ギョ

たしかに、お嬢さんの皮膚の色ときたら、あなたが売りに行くミルクの色よりも白いのです。けれどあなたはあまり優しい方ではないのです。

（離れて）

妙な女だな！

（大声で）

俺たちが待伏せしているあの熊がやって来たとしても、奴をしとめることはないだろう。俺たちは奴を飼いならし、奴に芸のひとつもやらせてやろう。

ペルレット

熊をねらっているんですって！　まあ、でもじっさい、そんな風にもみえますわ。

ギョ

さよう。俺たちは熊を狙っているのです。捕えられるものと確心しております。このように若くて、元気はつらつとした顔と出会えば、確信がもてるというものです。

第四の小アリア

ある猟師の言うことには、もし平野の中で、老婆や検事に会うならば、お前さん、これは縁起がわるい。そのことの全てが不幸をもたらす、と。
けれど、みごとな褐色髪の女の子が、目にとびこんで来たら、幸運や幸せやよろこびの徴候が贈られる。今やかの猟師の金言通りになった。幸福は汝の目の中にあり、わが目の中にはよろこびがある。

ペルレット
熊のお話、ともかくお勇しいことです。おなじ調子でお答えしたいと思います。ですが、あたしはあいにくお世辞のいい方を存じませぬ。

ギョ
わたしがお嬢さんに求めているものは、おべんちゃではないのです。望みは愛情なのです。

ペルレット
愛情ですって！　あなたを愛せと？

ギョ
さよう。わたしに対する愛情です。

ペルレット
滅相もない、ギョさん、あなたにさしあげる愛などはございません。

ギョ
そんなに高ぶらぬように願います。あなたはまだわたしのことを御存知ないのです。ともあれ、わたしのことをよく御覧なさい。色男を御覧に

なるでしょうか、その者は一人と言わず何人もの女を手にしてきた男だよ。

小アリア

離れたところから、かわいい小娘を見つけ、わたしはまるで若鶏をねらっているキツネのようでもある。ためらいや哀れみを感じることなく、わたしは突然、手を振りかざす。若鶏がどうじたばたしようが、その羽根や足をもぎ取る必要がある。

ペルレット

けがをしたふりをするヤマウズラのように、わが子をあわや死から救うために、わたしはその遊び人をおびき寄せる。わたしはその男のいうことばに従うことに同意する。がその者が不意に襲う、そのせつな、わたしはたちまち逃げだす。

いっしょに——

キツネは意地悪である。ヤマウズラは何をしようとしても無駄である。キツネにぱくりと捕えられ、つぎにがつがつ食われてしまう。

……

ヤマウズラは身軽である。キツネは何をしようとしても無駄である。ヤマウズラはキツネをたのしませたあげく、どんどん空へ飛び去ってゆく。

ペルレット

いいですか、ギョさん、あなたは若鶏を食べるよりも、ずっと虚言(うそ)をがつがつ食べていらっしゃるようですね。

ギョ

構わずほっておいて欲しい。もしお嬢さんをもう一度わが網の中に捕えるとしたら……

ペルレット

ああ！　そんなやり方でわたしを誘惑しないで下さい！

ギョ

じっさい、妙齢の獲物をとりそこねては残念なことです。さあ、まじめな話をいたしましょう。またわたしのところに戻って来てください。そ

してもしお望みなら……

ペルレット

ええっと！　それで？

ギョ

さて！　お嬢さんよ、わたしの妻になってくれませんか。

ペルレット

ああ、何ですって、密猟者の妻にですって！

ギョ

密猟者の妻にです。

ペルレット

えっ、いや、猟師の妻にですって。まあどっちでもいいわ、けっこうな亭主持ちになるなんて！

ギョ

なぜ！　いったいなぜ！　そもそも俺に欠けているものは何なのか？

ペルレット

（ギョをみつめながら、そしてさげすむような態度で、その服に手をふれながら）

さて……どれも……お見かけしたところ……。

ギョ

これはですね、狩の衣装なんですよ。

ペルレット

狩には毎日お出かけになるのですか？

ギョ

それからお嬢さんは、あることをご存知ないでしょう？

ペルレット

何のことですか？

ギョ

わたしはもうすぐ身上をこしらえることができる、ということです……。

ペルレット

どうして身代がつくれるのですか？

ギョ

われわれがしとめようとしている熊の皮が売れ、人手に渡すと、五〇フランになります。この金は、わたしばかりか仲間のコラにも入るのです。

ペルレット

五〇フランですって！　大したものですね！

ギョ

でお嬢さんは、金を大いにもうけるために何をおもちですか？

ペルレット

わたしが持っているものといえば、ああ、じっさい持っているものといえば（彼女はミルクの入った壺をみせる）、これかしら？

ギョ

えっ、何だって！　それは壺じゃありませんか。

ペルレット

まさにその通りですわ。ですけど、壺の中にあるのは何でしょうか？

ギョ

えーと、そうですね、ミルクでしょう。おそらく五ピストルの値いもしないでしょう。

ペルレット

とんでもない。このミルクは普通のものよりずっと価値のあるものです。たとえ世界中のすべての熊の皮をもらっても、手離す気はありません。あなたの熊の皮とも交換するつもりはありません。ほら、聞いてごらんなさい。

小アリア

ここにあるのは、あたしの計画のすべてである。ミルクを売ったお金で、卵を百ほど買って、それらを孵すのです。ひな鶏は、もうあたしの見ている前でかんたんに育ってゆく。

ああ！　ああ！　ああ！　もうとっくにそのすべてを見たような気がする。手に入るお金で、ほどなくあたしは若い雌羊が買えることでしょう。その雌羊は子どもをたくさん生むことでしょう。春にむけて、あたしは羊の群れをつくるつもりです。

ああ！　ああ！　ああ！　ああ！　もうとっくにそのすべてを見たような気がする。あたしはその群の中に、馬や雌牛や子牛を加えることでしょう。あたしは自分で、毎日それらの動物を平原に連れて行くのです。

あたしはかれらが平原で跳びはねるのをみるのです。何というよろこびでしょうか。何というよろこびでしょうか！

ああ！　ああ！　ああ！　ああ！　もうとっくにそのすべてを見たような気がする。そうなんです。あたしはひな鶏、雌羊、子羊、山羊の子、雌牛、子牛といった子どもをたくさん持つことでしょう。ああ！　ああ！　ああ！　もうとっくにそのすべてを見たような気がする。

ギョ

ああ！　もしお嬢さんが、われわれが売った熊の代金を手にしたら……。

ペルレット

しかし、あなた方の熊は！　熊は！　その熊をまだつかまえてないでしょう。あたしはじぶんのミルクをすでに手にしています。

（彼女は壺をつかむと、それを頭にのせる）

あなたは格言を御存知のはず。さようなら、ギョさん。熊をちゃんとくださるなら、取引について話し合いましょう。

さようなら、さようなら、猟のこと頑張て下さい。けれど徒労に終らぬようとくに気をつけて下さい。

（彼女は歌をうたいながら出てゆく）

ああ、ああ、ああ、ああ、もうとっくにそのすべてを手にしている気になっているようだ。

第五場

ギョ……たった一人で登場。

あのかわいい顔が俺をからかっていやがる。だが……あの女は何んと打算的で、先見の明があるのだろうか！

あのようにかわいい女は、家庭においてかけがいのない宝だ。なるほど俺の装いは大して魅力がないかも知れないが、熊の奴が死んでしまえば、彼女はそんなことを気にしない。あのようにかわいいオオカミちゃんが、羊になる時も訪れることだろう。

第五の小アリア

この年ごろの若い娘は、体に激しくさわられるとすぐ、扱いにくく、粗野になる。だけど、ちょっと、だんなさんよ。あたしの恥らいを大事にして下さいな……顔が赤くなっちゃう……いい加減やめてもらえないかしら？……

ところが愛の神が勝つならば、ようやくじぶんの心に語りかけるようになる。彼女は、魅力に富んだ、すなおな、感じのよい人とみられる。いつも陽気なのは、若い雌ネコであり、そのネコはお世辞を聞いたとたん、爪をかくしてしまう。

第六場

ギョとコラらは、駆けつけながら。

コラは舞台の袖にいる。

おい！　ギョよ、逃げろ、逃げろ。助けてくれ、熊の奴が追って来やがる。

ギョ

ああ、俺たちはもうだめだ！（かれは木によじ登る）

コラは、舞台のうえを駆ける。

なんということだ！　どういうことになるのだろうか？（かれは別の木によじ登ろうとするが、登ることができない）

ギョは、木によじ登りながら、――

俺たちは奴に食われてしまう。（ここで熊は、コラを追いかけながら登場する）（コラは、熊が登場するのを見て、地面にぱっと身を伏せる）

ああ！　俺はこれで終わりだ！

ギョは木の上にいる。――

助けてくれ！　助けてくれ！　おーい、ピェールよ！　ギョームよ！　ブレイズよ！　助けてくれ――！　ああ！　哀れなコラよ！（熊はコラのそばに駆け寄ってくる。かれのことをあちらこちらとこずき回すと、その場を離れ、ギョがいる木の根元をかぎまわる。そしてまたコラの所にもどる。そして頭を振りながら立ち去って行く）。じっとしていろよ。息を殺していろよ。死んだふりをしていろよ。熊の奴、俺のところにやって来やがる。大食い野郎め！　奴は俺たち二人を餌じきにするだけだ。

（ギョは木の上にいる間、うづくまっている）

コラ！　コラよ！　熊の奴、お前のところに引き返してくるぞ。気をつけろ、危ないぞ。誰も俺たちを助けにやって来はしない……（熊は去って行く）。えっ……熊の奴が去って行く。

（ギョは木の真ん中まで降りて来ると、すぐまたよじ登って行く）

もし熊の奴が舞いもどって来たら……いや、いや、奴は森の中に帰っていくのだ。（ギョは木を降りてくる）

コラよ、ほら、熊の奴去ってゆくぞ。

コラは、頭を少し上げながら。

やれやれ！（二人は哀れな顔をして、黙って顔を見合わせ、ときどきうしろの方に目を向ける）

ギョ　体を起したらどうだ。

コラ　もう起きることができないんだ。

ギョ　なんてことだ、相棒よ？

コラ　うん、何だというのだ。運のない仲間よ……悪魔も一枚咬んでいるにちがいない……熊の奴はもう戻って来ないのだろうか？　びくつくぜ……。

ギョ　ああ！　奴は来ないと思うよ。くそ……。奴はもう遠い所にいるよ。

コラ　そんなに遠くへは行ってまい。遠へは……。

ギョ　何でだ？

コラ　熊の奴、もう歩いて行けないだろう。

ギョ　えっ、何だって！　お前は奴に傷を負わせたのか？

コラ　たぶんな。奴が弾をくらったのがわからないのか？

ギョ
本当か？　ともあれ、奴は俺たちのものだ。請け合うよ。
コラ
もしお前が望むなら、奴はお前にくれてやる。俺はもう熊と関わり合いになりたくないから。
ギョ
まあいいだろう。俺たちは奴をしとめるだろうさ。約束してもよい……お前は奴に傷を負わせたのか？……
コラ
まさにそのとおり。俺がいうんだから間違いない。
ギョ
わかった。わかった。俺は毎朝、村の番犬を全部ひきつれて、熊をさがしに行くとしよう。犬たちはいずれ奴をしとめることだろう。断じて犬のえさにはしないことを約束する。
コラ
さあさあ、お望みなら。俺はといえば、ここにいたのだ。
（ギョは銃を手にして出かける）

第七場

コラ……たった一人で登場。
あばよ、ギョ。ギョに別れを告げることになるかも知れない。もしあいつが危機を脱したら……危ういところを救ったのは、俺様だということをはっきり云っておく必要がある。
ああ！　いまいましい熊よ！　さあ……奴を殺せるのは俺様だけだとすると、奴は長生きすることだろう……。不幸に遭うといけないから、俺

たちは安全な場所にかくれよう……。木の上にでも？

さよう！　もし俺様とまったく同じように、熊の奴が木によじ登るとしたら、俺様は疲労で参ってしまう。そしてもし俺様に足がなかったなら……私しゃ……（あばら屋に気づきながら）

ああ！　そうさ、それはおあつらえむきだ。高いあまり高くないし、そこならもっとくつろげる。俺たちの食糧をみんな運ぼう。（コラは地べたの上に置いていたビンを手にする）

敵の奴、さあいつでもやって来い。話相手をみつけることだろう。（コラは木をよじ登って行く）食物は固形かな？（石が落ちてくる）それほどでもない。

（かれは無我夢中に木をよじ登って行く）上へ、上へと。（かれの帽子が落ちてくる）。ああ！　やっと着いた。（かれは屋根に沿って横になる）

たしかに、これは俺のベッドと呼んでもよいものだ。（かれはベットの上にすわる）。

すばらしい。（かれはビンを振りうごかす）まだ酒は残っているだろうか？　うん、うん。気晴らしに、ちょっと一杯やるか。

第六の小アリア

俺を苦しめている恐怖を追い払おう。すばらしいリキュールよ、俺を慰めておくれ。ほんのちょっぴりのブドウ酒をつごうのよいときに飲べば、すべての苦しみの治療薬となる。それは悩みごとの解毒済である。ブドウ酒により、俺は元気を取りもどし、陽気になるのだ。

一杯やると、王様の百倍もしあわせになった気がする。ほんのちょっぴりのブドウ酒をつごうのよいときに飲べば、すべての苦しみの治療薬となる。

（かれは眠り込んだ酔払いの口調でもぐもぐいう）

たしかに、ギョは……用心深い男だ……もうどうしようもない……酒も残り少なくなったが、目がまわる……ああ！……恐怖よ……疲労よ……ブドウ酒よ……そうだ……ギョよ……俺はお前を気の毒におもう……俺の金のことだが？……ああ、話はついているが……兄弟のように分けよう……なぜなら……結局のところ……そうするのが公平というものだから……。

第八場

コラはあばら家の上にいる。ペルレットは泣きながら、そして壺の取っ手を手でつかみながら。

ペルレット

何てあたしは不幸な女なんでしょう!……お母さん……ねぇ! お母さん……母はこのことを何ていうかしら?……あたしには家に戻る勇気はないわ。

第七の小アリア

ああ、残念! ミルクをこぼしてしまったわ。ああ! ペルレット、かわいそうなペルレット、大切なミルクが入った壺、大事なミルクが入った壺。

ペルレットは、ミルクを売って財をなせると思っていたが、うまく行かなかった。

彼女はミルクが入った壺をこわしてしまったのだ。はかない望み、その望みにわたしの心はゆれ動いた。ミルクが入った壺といえば、わたしに残されたのは取っ手だけである。

さらばひなよ、さらば若い雌鳥よ。さらばわたしの雌牛と子牛よ。さらば雄牛よ、さらば子ヤギよ。さらばいとしいわたしの牝羊よ、運のない、いとしい不幸者たちよ。お前たちは新しい時代を迎える前に亡くなったのだ。

ギョがいる。あの人にたちまちからかわれるわ。あの人に姿をみられたら、仕返しをされるわ……けれど……とても落着きがないみたい!……様子から腹を立てているようね。……きっと何か不幸なことが起ったのね。事の次第を知るために、ここに身を隠くすとしましょう。

(彼女は框(かまち)のうしろに身を隠す)

第九場

コラは眠り込んでいる。ペルレットは姿をかくしている。

ギョ

俺はすっかり息が切れてしまった。もう力は尽きた。犬の仕事だ！　畜生、熊の奴！　俺はもうぼろぼろだ。俺様の足とボロ服を半分ずつ、やぶの中を通り抜けるとき置いてきた。……コラよ！　おーい、コラよ！　ああ！　あいつは熊の奴に食べられてしまったのかな。熊野郎は犬まで食っちまうから、俺をも食うつもりであった。奴は悪魔まで食べてしまうだろう……

もうおしまいだ。俺にはもう余力がないから、死ぬにきまっている……いったい！　俺はこの世で何をしているのか？……きっと、程なく飢え死にするはずでは？　手っ取り早い方法がたくさんあるのに、飢え死になんて！……

ああ！　俺はいま頭がかっかしているから、もし俺に銃があれば。弾薬帯は残っている。これだけでもましというものだが……。さあ、さあ、あえて（死ぬのを）早まることはない。

（かれは框の上の部分の木材をつかんで、それをあばら屋の中にぐいぐい押し込もうとする。かれの一撃で、壁が落ちてくる。コラは上で寝ている。）

三重唱

コラ

俺は落ちる、落ちる……

俺を支えておくれ……

おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！

俺を助けておくれ……（アンコール）

俺はこなごなだ……

呪われた家よ！

俺は傷ついている……

（かれは泣いている）

おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！

何んと痛ましい哀しみか！

……

ギョ

あばら屋が、あばら屋が俺の体のうえに崩れてくる。

おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！……

俺を支えておくれ……（アンコール）

俺の腕はへし折れた！

呪われたぼろ家よ！

俺は傷ついている！

おお痛い！　おお痛い！　おお痛い！

何んと痛ましい哀しみか！

……

ペルレット

何としたことかしら！　あばら屋が崩れてしまったとわ！　ああ！　ああ！　ああ！　ああ！

あばら屋は、崩れてしまったわ。かれは死を望んでいるのだわ。あの人は軽いけがにも我慢できないわ。（彼女は笑う）

ひっひっ、ひいひい。ひっひっ、ひいひい。ああ！　気の毒人たちよ。心から同情するわ。

……

ペルレット

あーら、ギョさん。あなたの財産とは、いったいどこにあるの？

ギョ

ペルレットさん、見ての通り、うまく行きませんでした。首をつって死ぬことすらできませんでした。

コラ

俺の情ない五十フランよ。

ギョは、ペルレットにいう。

貧しい、かわいそうな男をふびんと思って下さい。お役に立てることといえば、お嬢さんの羊の世話をすること位ですが、どうかふびんと思って、わたしと結婚して下さい。……

ペルレットは、ため息をつきながら。

あたしの羊ですって？　羊は遠い所にいるのです……。ほら、ギョさん……。あたしはもうあなた以上に運のよい女ではないのです。あたしのミルクの入った壺ときたら……。

ギョ

え？　いやはや。

ペルレットは、壺の破片を拾いあつめながら。

ほら、破片を……。

ギョ

壺はこわれてらあ！　これでわれわれは対等だ。お嬢さんは何ももっていないし、わたしも何も持っていないから。そうさ。破片をいっしょにしておきましょう。たぶん、かけらを用いて何かつくれるかも知れません。

コラ

俺の情けない五十フランよ！

ギョ

コラよ、黙れったら。お前はしょっちゅう嘆いていやがる。（ペルレットに向って）

ペルレットさん！　あなたは何もものをいわないが。ほら、わかりますか？　わたしは善良な悪魔です。提案を受け入れて下さい。そのような提案に腹を立てないでしょうね。

ペルレット

アリア

君を幸せにするという約束を当てにしていたけれど、あなたの空約束でした。けれど、不幸にして、希望というものは当てにならぬものだということが分かりました。かかる運だめしは、有害です。急いで相手をえらぶすべての恋人は、いずれ自分の過ちに気づくのです。わたしたちはお客の前で正しい勘定をして見せないと、結局二度も勘定をしなくてはならなくなってしまうのです。

コラ

そうなんです。おっしゃる通りです。それは。

ギョ

何だってお前は、他人のことに口出しするのか？　われわれに構わないで、ほっといてくれないか。

コラ

ついさっき、俺に教えてくれた人は、うそをついたことのない某だ。

ギョ

そのある人とは誰のことか？　お前という男はいつもでたらめ話をするからなぁ。

コラ

誰のことだって？

ギョ

さよう。

コラ

熊のことだ。

ギョ

熊だって！　熊の奴、お前と口をきいたのか？　またまた面倒なことが起った。

コラ

そうなんだ。そうなんだ。熊の奴、さっき俺様と口をきいたんだ。熊の奴、今しがた俺にこっそり耳打ちしてくれたのさ。

ペルレット

ええっと、冗談じゃありませんよ。そんなおかしな事ってありますか。

ギョ

いい話なんだろうな！　熊の奴、お前にどんな話をしたのだ？

コラ

ああ、ああ！　いつまでも記憶に残るような話さ。

第八の軽喜劇

あの場にいて、心底からこわくなっていた。きょうだけは、お前をゆるしてやろう、と熊からいわれた。こわがることはないのだと。お前の仲間にいうがいい、高望みにはいつも裏切られると。そしてしとめた熊の皮なんぞ売らないようにと。

コーラス

かくして運命は、しばしわれをあやし、そのあとびっくり仰天させる。熊はまちがってはいないのだ。

ギョ

俺たちはもうけ話をふいにしたが、態度をきめる必要がある。ここで学んだ教訓をけっして忘れたくないものだ。

さようなら、かわいいミルク売りの娘さんよ。さあ、熊の贈物をお笑いなさい。わたしとしては、地面のうへにこぼれた壺に入っていたミルクを笑いたい。

ペルレット

お互いからかうことをやめて、めいめい我が家を持ちましょう。あたしの計画は、あなたの計画よりずっとすぐれたものだが、同じようにふいになってしまった。あたしの計画から生れたものといえば、澄んだ水だけなのです。

高望みには、いつも裏切られます。しとめた熊の皮なんぞ、売ってはなりません。

コラ

欲深いダミは、豊かな遺産をうけ継げることをとっくに当てにしている。かれはすばやく身なり、宝石、衣装などをととのえる。

医師はいじわるでも、老いた祖父の命を救った。しとめた熊の皮なんぞ、当てにしてはだめだ。

陰謀家は、赤貧の中で、数々の計画を立てる。その者はフランスを富ませるために、国全体を海港に変えたいと思っている。取引からあがる利益を抵当に、かれは借金をし、掛け売りをする。けれどある朝、すべてが終わるのである。壺に入れたミルクが地べたの上に流れ出る。

ペルレット

夫というのはみずからの幸福を、もっともきびしい美徳の上に築くのです。夫はじぶんの妻が、大切な名誉よりも偽りの逸楽のほうが好きであると思っています。哀れな夫らよ、そのようなことを分かろうとするのをおよしなさい。

恋人は心をとらえられ、頭をめぐらす。運悪く、壺に入れたミルクが流れ出る。

貧しい作家は、じぶんの仕事の産物に対して、報酬が支払われることを当てにしています。かれは大勢の、欲の皮の張った借金取りに対して、すでに借金の返済をしました。

けれど宝物は、床の穴の中にすがたを消して行くのです。かけらはばらばらになり、そのとき壺の中のミルクが地面のうへに流れ出るのです。

完